を見たな、守りよ掛けさへ除けの守りをな、晝寢の寢言いうたをかしさはいの、內のなべしかまもふすぼり鑵子もとふりや、かゝみな黃金え。

⑧ 老ぼれ枕　同人作

年は寄るまい、うらが部屋へは猫もこずもの、老ぼれ〳〵こち寄れ、ちと〳〵抱いて寢よずもの〳〵、抱いてちと〳〵寢よずもの。

⑨ 牛之綱

二上り引いたりな牛の綱をえ、そんれは引きやる事ぢや、殿御のな草刈としよ、鎌もよく刈れ、千草もなん靡け靡けやれ。

⑩ 郡內八丈　同人作

二上り山の上には白豆青豆枝豆、白い袋は祕藏のしい竹、芋の葉の露ぶりしやりと、これのおさつに機織らしよ、郡內八丈小倉縞〳〵、郡內八丈小倉縞。

⑪ ありまの松　同人作

二上り松になりたやな有馬の松に、藤に纏かれてねとござる、纏かれて藤に、藤に纏かれて寢と寢とござる、なさけ有馬の花のえん。

⑫ 伊呂波　同人作

二上り子供々々よ、髮結うてとらしよ、いろはにちりぬるをわか、わがよたれそつねならむ、うゐのおくやまなけさこえて、あさきゆめみしゑひもせす京、宵にや和讃夜中にや法華經、曉起きては融通の念佛、紙子々々安倍川紙子え。

⑬ 天の川　同人作

二上りあまの川には水こそまされ、さてもやんれ逢ふ事ならぬえ、橋をやんれ架きよやれ鵲の、天竺のあまの川に、白い〳〵桶が流るゝ、奉公するとも豆腐屋にやいやよ、それなぜに、七つ起きして豆みがく〳〵、七つ起きして豆みがく。

⑭ 山郭公　古今新左衛門作

二上り花の散る時や初郭公山郭公、月は三日月、片割いびつ、丸い長月くる時雨月、雪を眺むる火桶のあぶない窓の、あかし吳竹幾夜の枕、戀に寢ぬ夜は二夜三夜。

⑮ 稻荷參　同人作

二上り引けや〳〵引けや〳〵、牛のもうもう綱をえ、柴に櫻を折り添へて、させいほうせいこりやどうだ、稻荷參りの、參りの稻荷、振袖ゆかし、友禪模樣でそんれいえ、おかた四十に娘は十五、對の模樣でゆかしえ、さいかち山へ上るとて、荒い風がもつけな吹いてきた、脛の白さでえいとこなうんとこな、白さで脛の、脛の白さで日を暮す。

⑯ 浮世言葉　同人作

二上り浮世言葉によそへて問うて、とかく浮世ぢや戀の道うらが氣儘なるならほんに、とは思へども人の口、有る事ない事おつしやります事聞けば、松は小藤と寢たといふ、小藤は松と寢ぬといふ、あの嘘はいの、寢たりやこそあれな、やれひつたりと、そのよな事はな、けもない事よ、聞けば嬉しや思ひ草、只うつゝなや、人に言はれぬわが涙、それとは知らで思ひ寢の、乾くまもなき我が涙、羅綾の袂をも、引かばなどか切れざらん。

⑰ 茶飲時　同人作

二上り起きていなんせな、明日の夜もあるに、今しばしぞや、又寢の床〳〵には濡るゝも袖、東が白むどん頓ておばゝの茶飲み時、しゆんだらまんだら福德夷、べずるべずる辨才天、南無藥師のお地藏がの、みめのよい女郎樣の、そばにそつと寢たるは、雪か霜か霙か村雨か雨か霰か、吉野の初瀨の散りかゝるやうで、おいとしうて寢られない、うらゝがやうなるみめの惡いしやつ面が、そばにぐわさりと寢たるは、毬栗ぎつくり天神髭、けさ打ちおろしのあら莚、雁木鑢鮫肌、突くやうで刺すやうで、

いつくにばつくに、寢返り打つては寢られない。

㊅　さいの川原

古今新左衛門作

本調子　爰に哀れをとどめしは、賽の川原と聞えしは、二つや三つや四つ五つ、十さへ越さぬ嬰子が、砂をつかねて山となし、小石を拾うて塔に積み、一重積んでは父の爲、父の恩と聞えしは、須彌山よりも高うして、言葉に何とも言ひ難し、南無あみだぶつ〳〵なむあみだ、二重積んでは母の爲、母の惠みの深き事、滄海よりも猶深し、三重積んでは、鄕里兄弟、わが身の爲と囘向する、南無あみだぶつ〳〵〳〵、まんづ母の胎内に、十月がうちの苦痛を受け、やう〳〵此の土に生れいで、四歳五歳七歳待つや、待つや待たずにみまかり出て、又いつの世に此の恩を、おくりかへさん童子と、さん〴〵に苛責なし、何方とも無く失せにけり、諸事の哀れと聞えける、南無阿彌陀佛〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵。

當流丹前古今ぶし　終

松の落葉　卷第四　古來中興踊歌百番

自錄

一　菊づくし　二　都橋づくし
三　小倉山　四　山ぶしうた
五　浦づくし　六　ごばんづくし
七　大津おひわけ繪　八　月づくし
九　松づくし　十　さんがらが
十一　阿部川紙子　十二　ちゆつちゆら
十三　づんがらもんがら　十四　君ちり
十五　さらし賣　十六　難波長吉
十七　一ばん鳥　十八　伽羅の板橋
十九　むねあげ　二十　源五兵衞
廿一　なぎなた　廿二　小野村彥惣
廿三　三彌土手みち　廿四　おさき鈍助
廿五　ふくの田　廿六　大小けん
廿七　外六藤六　廿八　丸ふく頭巾
廿九　福助買ぞめ　三十　有卦はじめ
卅一　順禮　卅二　次郎冠者
卅三　さい鳥さし　卅四　鵜の羽がさね
卅五　八重垣　卅六　ぶんまけ孫左
卅七　髮結小五郎　卅八　からかさ
卅九　いせき　四十　しんしよのや
四十一　楊弓　四十二　先陣宇治川
四十三　なんほゝ　四十四　たけ馬
四十五　しらかし　四十六　ふなさし
四十七　七つ道具　四十八　はんじよの市
四十九　山の手やつこ　五十　早さき梅
五十一　すげがさ　五十二　權のすけ
五十三　金山間夫　五十四　岡山がよひ
五十五　馬場さき　五十六　すまやま
五十七　しとゝん　五十八　四季花がさ
五十九　ろびやうし　六十　つり舟
六十一　さんばさう　六十二　地ふく
六十三　君はしんぞ　六十四　してゝん奴
六十五　世つぎ　六十六　糸屋むすめ
六十七　珍内花笠　六十八　春駒
六十九　荒木の弓　七十　ぞんぞりこ
七十一　牛まど　七十二　三國玉屋
七十三　彌之助　七十四　てしやこ
七十五　どうらく　七十六　唐人
七十七　ゑじま　七十八　こよみ
七十九　但馬小女郎　八十　もんつくつ
八十一　都の町靑物賣　八十二　拙僧
八十三　堺のはま　八十四　梅の木
八十五　手あひすまひ　八十六　藤内太郎冠者
八十七　蟹川　八十八　しゆんぜう房
八十九　伊勢宮廻　九十　菖蒲がり
九十一　いもの子　九十二　小川
九十三　ていこ屋　九十四　ほい〳〵
九十五　のんやほ　九十六　二木
九十七　まんまる　九十八　こんどや
九十九　ふくとん　百番　さゝら

以上

㈠　菊づくし踊

二上り加賀のお菊は酒屋の娘、顔は白菊紅菊つけて、よいこの〳〵、よいこの小菊とりなりしやんときくながし唉いて見事な扇車の、くる〳〵〳〵車菊かさね菊、猩々舞を舞の袖〳〵、見そめてそめて戀にこがれこがるゝ身は唐錦、通ふ道芝菊ませ垣さ、あしあしでとん飛び越えつとんと飛び越え、ぞん〳〵ぞんぞつとした〳〵、一重二重三重四重七重八重菊よ、御所の御紋は菊の九重。

㈡　都はしづくし踊

二上り都大橋渡りて行かば、思ひそめたよ小板の橋に、又も近江の瀬田の橋　かけよなさけのひとつばし　人の心は假橋浮橋反橋なれば、あだに其の夜は戻橋、つれなや君にふられてさ〳〵、ふられて〳〵雪に降られて鵲の橋、ちよつと替せし詞のはしを、何の忘りよぞ〳〵、それが嬉しゆて清水の、とんとろ〳〵、とゝろ〳〵とゝろ〳〵、とゝろとんどろ轟の橋、積りて戀の大和橋、朽ちぬ四條の橋柱。

㈢　小倉山踊

二上り小倉山からよむ言の葉の、歌の中山都の富士よ、續く山々戀の山、だてを飾るや衣笠山よ、なん〳〵〳〵なんでも錦織、なん〳〵でも錦織、裾はちらほらもみぢ葉散らす、高尾楓の尾いやと言はれぬ、どうも言いれぬ、袖をひかへた男山、これも愛宕の御利生おかの、上ればさつさ、えいさつさ〳〵、さつさぶろく十八町、嵐山風いとはで北山、春は必ず東山へござれの、花の盛りはまん〳〵丸山。

㈣　山ぶし歌踊

二上り男持とならの、あさはれしちやほんこの、山伏男を持ちやれの、元結ひねらず袴きず、やれこりや袴きず、のんやほの、あさはれしちやほんこの、山伏男を持ちやれの、元結ひねらず袴きず、やれこりや袴きず。

㈤　浦づくし踊

二上り和歌の浦なるいきかた男、戀に通はゝ千賀の浦ふみとりかはすそでのうら紅絹裏白裏淺黄裏、だてを駿河の三保の浦、なりよきふりよき富士を擔うた、たん〳〵たん、田子の浦〳〵、晩にや必ず〳〵堅田の浦、どうでか使にくる夜の君に大津の浦は七浦なん〳〵　どこいなん〳〵なあ七浦なん〳〵〳〵七浦、これからさきも七浦なん〳〵　どこいなん〳〵なあ七浦、なん〳〵〳〵七浦、替らで袗に、須磨は明石の浦は高砂。

㈥　ごばんづくし踊

二上り京は十らく樂み所、町は碁盤の形よや見よやしかくしめんなごふんべつ向ひ合すりや手に手を締みやる、よござるく〳〵、よい手がみゆる、戀のな中手にとゝんととぶあした、とゝんととぶあした。渡り八目ずんずんと伸びる揚石は、何百、六六三百六拾目、一期つれ添ふ、つれ添ふ仲の白いちん縮緬、黒羽二重でぬめらんす、襦子の帶〳〵、締めつ緩めつよいなんなか手〳〵、打つや打つたり〳〵おてゝん手を打つ、打つたりな打つたり〳〵、おてゝん手を打つ、打つたりな上手め〳〵、思ひのたけのよゝを重ねて、打ちや納めた。

㈦　大津おひわけゑ踊

二上り上り下りに目につく姿、露の命を君にくれべい、追分の達磨ゑごころ、鬼に衣はそけたもをかし、座頭は尻居に犬が吠えつく、猫が三味ひく、酒飲む奴愛宕參りに袖をひかれた、だてな若衆が鷹手にするて、ふれやれ〳〵大鳥毛〳〵　浮世のんせいふんらんらん、しんらんどんらん十三佛、かけ針くけ針疊針、いゝ池の側、菅笠よりほこに算盤粒、關の清水は浮き名所。

㈧　月づくし踊

二上り月は武藏野、よいつきだしの女郎は三日月、だてな道中袖つき、誰を待宵あの顏つき、年は十五夜腰つき足つき冴えた聲つき、なに夕月よ、桂男よ、さつさ、いと

しかござれ、さつさ、かわゆかござれ、いざよひ月に戯れ遊べ、えい〳〵〳〵、えい〳〵えい〳〵、照る〳〵月〳〵、照る〳〵月を見たらば、何とよござるまいかの、照る〳〵月〳〵、照る〳〵月の面影、月を見明かし飲み明かし。

㊈ 松づくし踊

二上り鳩の松山それからさきよ、志賀の浦回の一つ松ずんとよいきなひめこまつ待つ夜は〳〵君を待つ夜は遠山松よ、山坂越えて〳〵〳〵見とて北野の七本松よ、ほんに必ず青葉の松よ、殘るきぬ〴〵衣掛松よ、嵐松山さら〳〵、どつこいさら〳〵どつこい、さら〳〵〳〵〳〵〳〵、さつと打つては濱松の音はざゞんざ。

㊉ さんがらが踊

二上り荒い風にもようやよやよ、當てまい様を、遣ろか信濃の雪國へ、さあささんがらが、川ぢやざんざら柳のよいやさ、しろねが〳〵、よい手は〳〵こまの膝ぶしんがらが〳〵信濃へ遣ろか、遣ろか信濃の雪國へ、さあささんがらが。

㊉一 安倍川帋子踊

二上りお江戸お江戸土産に安倍川紙子〳〵、ありやこりやよい、著てはごそ〳〵〳〵と、さあんささあんえくわんこや〳〵、しやつき〳〵〳〵しやちんがら、こゝ爰までは走り出て見れば〳〵、ありやこりや戀のなか宿、さあ下せこれさ〳〵、著てはごそ〳〵〳〵と、さあんささあんえこつがらてくせ、天照大神おん出でなされてめでたいな。

㊉二 ちゆつちゆら踊

二上り烏かあかかつちりかあかかあ、鶯ちう〳〵ちゆつちゆらちう〳〵ちう、春になろとて法華經とも鳴いとさ、法華經でんぐりかへしてさつさ〳〵鶯へかへし

㊉三 づんがらもんがら踊

二上りゆのふ峠のまご杓子さ、さつとしめかけさ、えいこの〳〵柄が長うて、づんがらもんがらがらづんがらもんがらやつてくりよ、常陸の國のつのをかに、鹽賣長者といふ人が、黄金の築土を築くならば、蓮華はちすと言ふ娘、彼等二人の兄弟を、てこの衆と定めて、思ひのまゝに築くならば、難なく築土は出來たるらん、よふつふなんよえ。

㊉四 君ちりをどり

本調子こゝな小吉めは與五へが君、たんだ〳〵すのこきみ、ちり〴〵かますのふぐた君、たんだかますのふぐた君、たんだあぼとこふんではおぼちよこけべいてほこちよん燈火ぢや、ふやらの〳〵ふん〳〵ふ、ふやらの〳〵それはえ、ふやらのそれはえ。

㊉五 晒賣踊

二上り晒しま晒高宮晒、さらせば娘は黑む、布はなるほど〳〵なるほど〳〵なるほど〳〵なるほど娘は黑む、白くなるほど〳〵。

二上りなるほど〳〵なるほど〳〵、なるほど力にまかせたかつち杵、娘は黑む、ゑじまおれを見て何故に顔ふりやるぞ、ゑじま高宮なんとしよぞ、ゑじまは生れつき。

㊉六 難波長吉踊

二上りえい〳〵〳〵難波の梅屋由兵衛、心は入江の海の濁り淀みて、すめども終に蘆のかたほのほに現れて、引かれ出づるや心の鬼よ、せめて百兩の金ばかりかや、いまだ幼き長吉を殺そと、巧みあるとは夢にも知らで、主の使の悲しさは、是がな此の世の名殘かや、えいこりや此の世の名殘かや、長吉久しの姉に逢はしよぞ、さあこちおぢやと、いふに欺され連立ち行きて、長吉さきの物はあるか、なんの事でござんす、金が懐にあるかと言ふ事、いや〳〵なんにもござんせん、出さにや殺すが、一度で出せと、三度土器程な目をむきだせば、是は旦那の爲替の小判、命助けて、助けてたべと手を合すれば、かしましい、殺しはせぬぞ、あゝといへども、奥の納戸へ脇差とりに、行くを見てから身も震はれて、むざんや由兵衛

は長吉を捕へ、さあどうする最期ぢや、あゝ悲しやな、こゝに姉様ござらぬかいの、あら怨めしやと、怨み歎けどつれなや梅は、聲を立てたら殺すといへば、泣くも泣かれず、かはいやな、只をし鳥の、はごにかゝりし野末の井戸の、そこにありとは夢にも知らで、親子親類返せ返せ、長吉を返せ長吉返せとな、夜一寢もせで迷たえ。つても〳〵餘り輕忽。

㊦ 伽羅之板橋踊

本調子薩摩の鹿兒島の長吉どのは、伽羅の板橋を渡るとて越えた、ほとんどえ、いで其の比は花見月、櫻せたらおうたる鯰見つけた、長吉どの長松どの長吉長松、ちよろ〳〵めきがあけておとして、藤の花をしつかとかけて、さつさ姉の土產に。

㊧ 棟上踊

二上り四本々々柱をいよえおつ立て、大工のちこ助これのおたけに惚れましたさ、きりやしやつきりきりしやつきりき〳〵、ちこ助のこぎりこぶくらやつこりや、こりや〳〵

㊨ 一番鷄踊

二上り坊さま〳〵。ちと嗜まんせ、內にや女房子どもも、無いものかなんぞのやうに、性悪坊さま一番雞の鳴く時は、こと〳〵〳〵と叩き開けて早出るとの〳〵、內にや水がつくか餘りの事いの〳〵、さひきまはし、一筆書いてはやりがんな、さてなう親見たや、あの子生んだる親見たや、ちこ助のこぎりこぶくら、やつこりやこりや〳〵引廻し、一筆書いてはやりがんな、さてなう親見たや、あの子生んだる親見たや、ちこ助さあやるぞ、えい、松に小鶴が舞ひ遊ぶ。

㊩ 源五兵衛踊

二上り高い山から谷底見れば、薩摩源五兵衛は目に立つ男、のほほんにほ、しやれた鬢付茶筌髪、寢て又起きても茶筌髪、すんど窪んだ塗笠、おまんはどこへ、播磨の明石へ、蛤踏みに〳〵、蛤々踏みに、てぐり〳〵〳〵舟にの、此の舟に乘せた源五兵衛、きりゝと廻つて望んだ、播磨の明石へ、蛤踏みに〳〵、蛤々踏みに、てぐり〳〵〳〵舟にの、此の舟に乘せた源五兵衛、一萬八千寶藏、えい〳〵やえい〳〵代の榮え。

㊪ 薙刀踊

二上りさてもそなたは寬濶人か、眞紅下緒の長刀、おつとり揃へた薙刀、素槍〳〵〳〵〳〵、槍々素槍ちくとうさ、八方搦手蜘蛛手鎌槍十文字、御代は〳〵一か二か三か四か、七つ道具で治めておつとり揃へた長刀。

㈢ 小野村彦惣踊

二上り城州々々、小野村の彦惣を見たかえ、頭茶筌太元結で、細元結で、太元結細元結〳〵〳〵ひきしめて、地下で一人の伊達男え、彦惣は何處へ、山へさ、山へ上れば茨やとめる、茨やつとん〳〵放しやれ、やつしてさ、日が暮れる、彦惣〳〵、彦惣の伯母御の歌うて臼挽きやるいのめゝかまえ、臼の目ぢやもの、かまりよかい、彦惣〳〵〳〵〳〵、彦惣は地下で一人の伊達男。

㈣ 山谷土手路踊

二上りえい〳〵どつこい、長い刀を指いたはおさき、肩肱怒つてやつしつし、對の挟箱、次どつこい槍振ぢやたてたえ、山谷土手道な醉うたとさ、醉うたとさ、足や千鳥足、西は田の畦、危い合點ちや、〳〵、危い〳〵危うてならぬえ、も一つかへして足や千鳥足、西は田の畦、危い合點ぢや、〳〵、危い〳〵危うてならぬえ、ぬれにや目のない金山、どつこい男え。

㈤ 福之田踊

二上りさまが舟かや神戸崎沖に、ゑじまの姫むろは福の田〳〵、あのゝかんす〳〵よのうけてのなががのすはごんのごゞのすけ、おしやりやさうでござる、福の田〳〵、あのゝかんす〳〵よのうけてのなががのすはごんのすけ、おしやりやさうでござる、福の田、よい事〳〵福の田。

㈥ 大小見踊

二上り鹿島浦からなう、浦から〳〵寶船が着いたとさ、顔の若やぐ年男、よい事〳〵、よい〳〵こと〳〵、よい壽を祝うて事觸が參りた、是や此方へ御免なろ、まづ來年の惠方は申酉の間をば、年德神と定めて庚辰の年始め、卯の十六日が豆まきだ、わつとつかんでよいやさ、鹿島踊をばちゝちつと、ちと〳〵ちつと踊拍子にかゝつて、これや此方へ物問ふ、まづ正月は大かの、はて大とも大とも、二月小三大四五小々だ、それ六月は大よの、さてさて〳〵〳〵どつこい、七八月は小と定めて、九月は大の菊月、十月小は合點か、霜月師走は大々、極めて〳〵しつかと極めて、大小けんと定めた。

㈦ 下六藤六踊

二上りえいどつこいえい〳〵、えいこのえいとんな、聟が來るやら下六と藤六とお樽もつて參つた、おつ取り揃へた御祝儀、霞まじりの霙酒、春はめでたい屠蘇酒ひつかけて、花橘やれ宇治水、えいとんな、うんえいとんな、池田伊丹の下六と藤六が、晝は前垂玉襷、夜は綿子の三重廻り、ちんたの酒やしなの酒は、聟殿のお好きぢや。

㈧ 丸福頭巾踊

二上り何時もより賑ふ門の二柱、でつくりと幾代重ねて毎年の、毎年の惠方からとて、夷子と大黑とふつくな身でござつた、祝うて釣竿さあ參ろ、お先へござれ、來るか後から〳〵、後から見れば丸福頭巾で〳〵、頭巾で〳〵にこ〳〵〳〵、丸福頭巾でにつこりと、今朝の笑顏は尙でつくり、尙につこり、いとしえ。

㈨ 福助買初踊

二上りかどは一五三飾り藁さけて、物申、どれ〳〵〳〵どつこい、どれ〳〵どつこいどれ、當年の惠方より、福助が買初はめでたいな、倉開き棚下し皮の財布を肩にひつかけて、古金買はう唐金買はう、文の上書起請の下書買ひましよ、よい〳〵伽羅の焚きがら買はう、やれ買はう

を〳〵買はう、心中のよい娼達を、千年も萬年も萬々年も、正月買と祝うた。

㊂ 有卦初踊

二上り花は四季咲く、やれさて都は錦、野山續きて一ばいに、えいずつしりと、とことんとことん〳〵、つんとつ〳〵んつとゝんと、とこ〳〵〳〵〳〵〳〵ずつしりと、有卦七代の年八卦、正月始め事始め、やれ十七八も有卦始め、火性はつらりつとことんとこと〳〵つんとつ〳〵つんつとゝんと、とこ〳〵〳〵〳〵〳〵ずつしりと、始めて開いた扇子の要は、しつかと〳〵末繁昌え。

㊃ 順禮踊

二上りよい〳〵〳〵肩にや笈摺ひつかけて、あえいとこな、あなんとこな、つんつき揃へた棒の手、きりりん〳〵きり〳〵きり〳〵、わつとまはつた順禮衆、是は播磨の書寫寺よさ、だん〳〵揃へて登つた、えい〳〵〳〵えいえいえい〳〵えい〳〵〳〵、諸願な成就珍重〳〵、續いて登つた、よいやさ、めでたいな。

㊄ 次郎冠者踊

二上り千石のよねほね、萬石のよねほね、お庭にずつしりつゞいてまるれ次郎冠者、けに尤もさうよの、目近に持てさあ參ろ、いそ〳〵勇んでさあきり〳〵、いそ〳〵勇んでさあきり〳〵、きり〳〵參れ、さあ參ろ參る〳〵、參る〳〵さあ參ろ、鳥は鴈鴨雀鴫鶴のはし、さつても言うたよう言うた、參る〳〵參る〳〵さあ參る、花は紅梅白玉水仙花、さつても言うたよう言うた、けに尤もさうよの、揃へて〳〵揃への扇は末繁昌え。

㊅ さい鳥さし踊

二上り鶉々鳴くなる深草野邊の、根笹押分け、かき分け〳〵よく見れば、人目鶺鴒打ちとけて、ありや山雀のおの〳〵おの〳〵、おのがひきよくの羽も輕く〳〵、爪先沈めて〳〵、つごもの〳〵つごもの〳〵えゝえ餌差竿え〳〵、けさ初聲はしをらしや。

㊆ 卯の葉重踊

二上り日本目出たい、門に松竹飾り立て、若水男年男、卯の葉重の著衣始、やれ御馬乘初弓始、この、やつつるつつる〳〵つるやつつるつ、男鶴女鶴つる〳〵つる〳〵、やつつる〳〵、松は變らぬ此の殿の御繁昌、扨ておめでたいよの。

㊇ 八重垣踊

二上り小倉くわぜんちよこ〳〵、遠いのおもてからござれ、じつと引きしめ、やとん〳〵背戸は八重垣、大戸のくろゝの潜り戸、くんぐり〳〵くんぐり〳〵、なんぼくぐりくんぐりくぐりよい潜り戸、くんぐり〳〵くんぐり〳〵、くぐりくんぐりくぐつて、段々めでたい御祝儀。

㊈ 文まけ孫左踊

二上り坂の下には一夜も嫌よの、ぶんまけ孫左がお手枕、水は出てゆく山吹や、そつこでしよけろいよんの、あいしてさ、寢覺にや鹿よ鹿の聲よんの、あの峰通るはこつちん〳〵、下つて上つて、上つて下つて、來いよころ〳〵ころ〳〵ころ〳〵ころ〳〵、ころび落ちて逢瀨もあらば、あぶななかたやどつちかひかたは山田〳〵、沼田かふけか〳〵足が引かれぬ、逢坂へ坂の女郎衆とっ

㊉ 髪結小五郎踊

二上りこい〳〵小五郎、髪結ひさしてやつと束ねてや、轡かいとり、大津八町でむつきくどん〳〵新酒こざけは小才覺もな、どつこいなろかえ、關の女郎衆はやれこりや馬の口とる諸手綱、若衆見かけてな、どつこいなんななん〳〵なん〳〵やつこのやつと束ねてや。

㊊ 傘　踊

二上り婿殿はなづくべいとて、夏は何をみやけに、ずんど凹んだ塗笠、召そならく〳〵、いつそ尖笠細笠、朝日のやつる〳〵〳〵やつつるつ〳〵、そりやさせ男、やれ〳〵男かゝのゝ市大男。

三九　ゐぜき踊

本調子我は巖にさ、打ち寄する波、はつと立つ名はゐぜきの竹の、籠のや目繁きやなか〳〵あたごぞ、逢はで止みなん憂いぞつらいぞ。

四十　新庄のや踊

二上り紺屋虎落のや、だん〳〵〳〵だら助の細帶、さつてはたぐつて三重廻る、このよいかどのやしんじよやのさ、竹ごしによつくるよ〳〵、よつくる〳〵よつくる〳〵、くる〳〵〳〵とくる〳〵〳〵と、寄りたけれどもまづ通る、それはえ〱さつてはたぐつてへ返し。

四一　楊弓踊

二上り御代はめでたや袋に弓を納め納めておいて、いざや矢をとれ一百手、君の羽風になどつこい一度は落ちよ、的はたまやのな、どつこいねんね〳〵ねん〳〵〳〵音も冴えわたる、紋は花桐おれとそなたは松、どつこい〳〵松竹ぢや。

四二　先陣宇治川踊

本調子先陣宇治川ずら〳〵ずつと、まくりこむ勢ひに駒が勇む、のほらほ〳〵のほらほゝ〳〵、はんにやしとてとさ、さあしとてとさ、勝つて冑の緒締の巾著、金銀のは娘の結納に受けとつた、おゝ大分の〱駒がいさむへ返し。

四三　なんほゝ踊

二上り君は二階のはん箱梯子、奴上したて、かんじり〳〵〳〵、かんじり通うてござれ、ずんど上りつめては、下りぬ氣だ、小娘を見たか、年はなんほゝゆかないが、なんほゝなんほゝ〳〵、やれ床とつてはなんほゝ、なづみかゝる、おゝ忍びの〳〵隱し殿を見たか、やつこ上したて、年はなんほゝゆかないが、なんほゝ〳〵〳〵、やれ床とつては、なんほゝなづみかゝる。

四四　竹馬踊

二上り五十三次に隱れない男、よゝをこめたる竹馬を、さて〳〵見事に飾りたて、手綱かいくりしつしどう〳〵、どゞんどどつこいせと、どつこいせ、朝の出がけにや小室節、出がけにや朝の、朝の出がけにや小室節、一こゑ二ふし三藏や、いうたりつん〳〵つれだち、さあ〳〵行くべい〳〵、轡と鈴がりん〳〵がら〳〵りんがらが〳〵、はいどう〳〵はい〳〵はい〳〵はいどうし〳〵、あつぱれ御馬は上手と上手が、乘つたか乘つたぞ、それそれ揃たえ。

四五　白樫踊

二上りえい〳〵三熊野の、那智のお山を今朝こそ見たれ、順禮衆札をちやうど打ちや納めて、岩の狹間の白樫を〳〵、國の土産に習たよ棒の手、そつこで一振やつとう〳〵、やつとう〳〵とう〳〵〳〵〳〵やつとう〳〵まゐろ、とう〳〵とう〳〵まゐろ、岩の狹間の白樫を〳〵、國の土産に習たよ棒の手。

四六　舟指踊

二上り高砂や〳〵、此の浦松に年を經て、木蔭の塵を一さらへ、つまげてからげて〳〵たかつまとりてまぼぢよ走り出て、てゝらを待ちやれ、さあよいさ、是さよい〳〵、世の中おめでたいよの〱木蔭の塵へ返し

四七　七つ道具踊

二上りおさきさき〳〵、さあさき〳〵は振手の衆、とろり〳〵と振らねばなんよさ、つぎつぎ〳〵は、あれ助よい〳〵、是助よい〳〵、浪助關助臺笠はもち助、たて笠はでく助、戀のどつこいだて助、しやれた目元でひとひねり、今度の〳〵〳〵〳〵今度の藪入にや裏からござれ、裏の藪から妻戸から、形からふりから物好で、殿をめがけて振るは大鳥毛。

四八　繁昌之市踊

二上りめでたいな、あゝめでたいな、われが住所は都の辰巳稻荷山、零れかゝれる玉霰、是の殿御に逢ひとて見とて、あの山越えて此の山越えて、えいさんさ、さあさえ

いさんさ〳〵、君を思へば音羽の瀧の、瀧の白糸いとし、いと〳〵いとしよの、いとしよの〳〵、いとしけりやこそ繁昌な市で、此の酒に醉うたとさ、こん〳〵こん〳〵の盃は、千秋樂〳〵萬歳樂と祝ひ納めた。

㊾ 山之手奴踊

二上り薩摩ァ、のいちのやは、どつこい三ケ國の伽羅よなどつこいな、ななん〳〵名も扨てよいやな〳〵、きやら〳〵伽羅男え、竪から見ても横から見ても、はつアよい男え、おさき一番手の奴、上髭、ひんとした、しやんとした、つりりん〳〵つりりん〳〵、つりりん髭のなが刀それ八文字うから〳〵浮かれて、後からうか〳〵うか、うから〳〵浮かれて、後からうか〳〵うか、徒歩ふる手を振る伊達を振る、爰は山の手のよい〳〵奴の出所。

㊿ 早咲梅踊

二上り開き初めたる早咲梅のはんなりと、袖褄揃へてふつくりと、聞いたか〳〵えいえい〳〵、えい太郎冠者、御前に念の早々と、早咲梅の鶯が、きりきつてう〳〵きいてうきりきりきつてう、きつきよ祝うた太郎冠者、梅の花笠はどうでもさ、かうでもさ、どうでもかうでも、えい〳〵太郎冠者。

(五一) 菅笠踊

二上り東から來る花嫁嬉し、おれが目當の菅笠嬉し、ほんに嬉し、お伴にとつつくだて助が、捩らす〳〵、やれこりや捩らす、どつこい捩らす〳〵、腰を捩らす紅葉笠、眞丸濃うて着ようて、樣が菅笠百萬貫。

(五二) 權之助踊

二上り若衆さんさ、忍ばばさ、若衆忍ばば寺通ひ、なんでおぢや、そろ〳〵ねん念者がおぢや、そろ〳〵ねん、さても久しの權之助、上げのまりの、下げのまりの、上げの下げの、やりはりまりを、おりや踏み習うた、おれが踏まいで、それを誰か踏もぞいの、お手打ちかけて、ほろと泣いたをいつ忘りよ。

(五三) 金山まぶ踊

二上り佐渡の山まぶ山越えて、ぜん衛門さんが、とゝぼんかとゝおん〳〵おぢや、ぎんする〳〵ずらく〳〵ずつと竹流し、竹に花咲くぜん衛門さんが、とゝぼんがとゝおん〳〵おぢや、八百丁の鞴で千ざを万ざを、ごつほり〳〵ごつほりと、踏みや習うたに、ごつほり〳〵ごつほりこ。

(五四) 岡山通踊

木調子やんれ白波の打つや鼓の川柳、水に揉まれて根こそ入りけれ、岸影の花や櫻や藤や、打つえい太鼓の撥や川空木、雨の拍子も五月雨も、賴む汀の田歌の音頭、拍子を揃へてはやせども、えい勇みてうつる面白や、植ゑいく〳〵早乙女、笠買うて着しよにさ、笠買うてたもるならば、猶も田をば植よにさ、岡山通ひの六丁小早に艪を八丁立て、朝のおまへの三ほが瀨戸を、小女郎戀しきとな歌うて名のりてお漕ぎやるはえい、この小じやくし小娘こせんぞかこさいかかゝいかこぐる松か小女郎かつがわつがわ〳〵のんえいよほ帆ではやらいで歌でやる、君を思はで通はりよか〳〵、どこで見た、ぞつとしたとよえい〳〵、君は春咲く梅の花ぢやとよえい、薰ゆかしきとりなりは、ありやゝこりやゝ、えい〳〵さつさ、えいさつさ、萬歳ぢや〳〵千秋樂〳〵ぢや。

(五五) 馬場先踊

二上りまつは豐かに大手馬場先繫ぎ馬、がいに冷たい今朝の雪、殿のお馬は錆月毛、連錢葦毛鹿毛糟毛、しと〳〵打てば駈けあふり、お江戸育ちの髭々男、おん馬の口をしつかとさ、つりりん〳〵髭男、つりりん〳〵りんく〳〵りんく〳〵、りんとはねたる髭男、繫ぎ止めたよ戀の關札。

(五六) 杣山踊

二上りおぢが杣山から貰たよ樫を、槍にすけたる十文字、立てゝ並べて、なあどつこい、なあどつこい、長押をよ

けて一だん〳〵〳〵、やつとう〳〵二だん〳〵〳〵、やとゝう〳〵一だん〳〵二だん〳〵二だん三だん、だん〳〵そろへた石突よ、する〳〵〳〵、手並を揃へて、寄する汀の駒返し、はかたごぶぞり人にや構はぬおりや好いた。

五七　しとゝん踊

二上り尼が崎からこつちの聟殿〳〵、來るとさ、しつし艪櫂早めて一丁の二丁の、三丁の四丁の、五丁の六丁小早、花の繪島へ押せやれ男、えとやつさ須磨や明石の月を見しよ、しつとん〳〵しつとん〳〵しつとん、しとゝん〳〵とん〳〵とん〳〵、とうからから艪の音がした、花の繪島や、やんれ押せやれ男、えとやつさ、須磨や明石の月を見しよ、しつとん〳〵〳〵しつとん、しとゝん〳〵とん〳〵とん〳〵、とうからから艪の音がした、嫁が馳走に人の見る目と、磯の海松布が肴ぢや。

五八　四季花笠踊

二上り關の小萬は龜山通ひ、色を含むや冬籠り、まづ立つ春の祝ひには、縫ふてふ鳥の花笠、夏は川瀬に網代笠、秋は踊りに菅笠を、揃へてそれ〳〵小萬、踊りだせ小萬、てん手拍子もそん揃た〳〵、揃た〳〵そろ〳〵そろ〳〵、月の笑顔に照つたりや紅葉笠、そりや加賀笠よ〳〵、冬は雪見にかづく肱笠、花の都の御所塗笠は、形がようてさて〳〵どつこい着よござる。

五九　艪拍子踊

二上りえい〳〵和歌の浦こそそれしての、さての第一名所うんさうだぞえ、さつと滿つ潮寄せ來てはやの、片男波にぞ乘りくる舟の、艪は一丁の勢ひ〳〵、競ひに競うて漕ぎ寄せた、しんとろとろ〳〵〳〵とろりん〳〵とろ〳〵〳〵、おつとる艪櫂にさ、船歌あれから是まで潔ござる〳〵、妹背鹽濱。

六十　釣舟踊

二上り沖に漕がるゝ女舟を見たか、おつと梶を枕に艪櫂を

さ、立つる〳〵立つる〳〵波立つる〳〵、女波寄すれば男波も寄する、とかくや男波はやよいここいこゝ〳〵、今宵はどち枕、おつと梶を枕に艪櫂をさ、立つる〳〵立つる〳〵波立つる〳〵、女波寄すれば男波も寄する、とかくや男波はやよいここいこゝ〳〵、今宵はどち枕。

六一　三番叟踊

二上り喜びの文をえて、ちやうど參つた聟殿、勇みて末廣扇御祝儀に、しよぎつく足元見仰ぎも一つ見あふぎ〳〵〳〵さしあふぎ、鷺足する〳〵張肱扇で、拔足揃へて〳〵揃へて福々福ぢや〳〵、長者々々福々福々福々、男は大福々長者の花聟ぢや、えい〳〵〳〵えい子寶の、この幸心に任せてめでたいな。

六二　地福踊

二上りさてもめでたやな、めでたや〳〵えい世の中の米俵、心安くも抱へた、地ふくでき助が納めた俵を、御倉にずつしりと、つめたか〳〵よねが袖、のつしりとろりと似合ひます、色ます〳〵色ますこよねが目に附く〳〵、そりやえい〳〵こと〳〵えいこと聞きます、ますますこつちの寶ます、黄金の桝で米計るんよの、めでたき御代はたんだにこにこやかに米のお山。

六三　君はしんぞ踊

二上り君は新造の乘り心、さよいよえい〳〵君と我と、我と君と引き寄せてはよるよるさ、男は花の都入、づに乘つた、乘つて來た〳〵舟のや、宿の娘は小手招き、えい袖をかざして表の潜戸のくろゝの穴から〳〵から〳〵から〳〵そこしんから〳〵顔が見たさに戸開けて、そこせいちやうど一ぱい君はよい酒。

六四　しててん奴踊

二上り五丁さきから振出す肩の、裄の長いはお國の小小姓色はまつ〳〵くろ黑いがどこやらがよい、靜かに見ゆる奴の〳〵〳〵、管槍をひろどれば、何尺々々なんぼ〳〵、何尺なん〳〵なんぼの何尺、こゞころつけてさあ參ろ、

しててん奴が手の内〳〵、しててん奴がしてゝん手の内〳〵、しててん〳〵から〳〵〳〵、してゝん奴がすりさげ男、國に隱れない大介萬五郎、おゝそれ〳〵〳〵隱れない。

㊄ 世繼踊

二上り お江戸通ひに世繼が出來た、やつとうお名は加賀に菊酒、お江戸のまん鉢、ずんど飲めばよござんす、吉六酌とれ、合點だ、金銀の盃におさへた、まつかせ〳〵つぎめぢや〳〵世繼〳〵〳〵、世繼繼目はめでたいな、顏に色增すこれ繁昌〳〵え。

㊅ 糸屋娘踊

二上り 木町二丁目をとん〳〵とん〳〵とことん、とことん〳〵とんとことん〳〵通りたうはないが、糸屋娘は二十一二十、やつしつし〳〵、姉に望みは少しもないが、妹見る目はしんとろ〳〵、とんと親を見る目は猿眼え、さる〳〵さる〳〵さる〳〵猿眼え〳〵姉にのぞみ返し。

㊆ 珍内花笠踊

二上り さても見事に揃たり〳〵、そつこで振出せお手廻り、大事の前の居合腰、寸よし振よし形もよし、みよし吉野の花よりも、えい〳〵紅葉よりも、えい〳〵えいこの〳〵〳〵、こつちの〳〵いまがする事を珍内が見附けた、大かい事を言うたりな、な言ふそ珍内ない〳〵ない〳〵ない〳〵酒盛ろぞ、珍内酒は下戸なり情でないぞ、そこらを是非とも〳〵そこらを〳〵〳〵是非ともおつぴしげ、やごゑでまつかせ、やごゑでふりやれ、やつとん〳〵〳〵殿のお立ちにお供花やか。

㊇ 春駒踊

勇む春駒引き連れ、千疋も繋いで自慢での、しやなら〳〵しやなら〳〵れんな紅裏、誰だ樣だ、馬鹿やつた、づきんちやちりちり〳〵ンちん〳〵ちんなとりなりで、おつとまかせの、よい〳〵〳〵、振よしや〳〵、ぬらりひよ、誰もかれもめつけんしよ、こゝもとでえい。

㊈ 荒木弓踊

君は長押のや荒木の弓よ、引手數多に仰せのあらば、はつと答へてよん所、はりよやひよや〳〵はりよや〳〵、はり〳〵はり〳〵弓張月の、樣は三日月よい〳〵、どつこいよい〳〵、どつこい宵ござる、せめて今宵は有明のさ。〳〵はつと答へてよん所へ返し

㊉ ぞんぞりこ踊

本調子 麻の中にも三度は寢たが、麻が物言はにや名も立たぬ、ぞんぞりこぞんぞり〳〵ぞんぞりこ、芋よ〳〵ぞんぞりこの芋よ、どの子がいとし、負うたもいとし、抱いたもいとし、かたくまの小女郎は猶どつこい猶いとし、ぞんぞりこぞんぞり〳〵ぞんぞりこ、芋よ〳〵ぞんぞりこの芋よ、負うたもいとし抱いたもいとし、かたくまの小女郎は猶そつこで猶いとし、ぞんぞりこあすはとう。

㊉一 牛窓踊

本調子 牛窓のえ觀音堂の傍でえ、どつこい是は聞いたぞや、今朝のや刻を打つ、どう打つなう、はてなう、時の太鼓はのほほん〳〵、おででんがら〳〵、おででんがら〳〵、おででんがらでん〳〵がらりの、でんがらりのおででんがら、音も聞えてさらりつともえいよえいよえ、どう打つなう、はてなう、時の太鼓はのほほん〳〵、おででんがら〳〵おででんがら〳〵、おででんがらでん〳〵がらりの、でんがらりのおででんから、天下打納めおめでたいよの。

㊉二 三國玉屋踊

二上り 三國玉屋の新兵衞を見たか、三國一のやさ男、まるて〳〵繻子の鬢付刷毛長に釣鬢〳〵、なぜに小鶴は出て待たぬぞ、さつこのしよ、聞けばたらふくつるてん〳〵だらふく〳〵たんたらふくつるてん、ふくつんゆふはかうしにまつのをの新兵衞どの〳〵さつこのしよへ返し。

㊉三 彌之介踊

えい〳〵〳〵是から先は、お先手をふる長刀〳〵、お先手を振る長刀、さんやれ〳〵〳〵えい〳〵〳〵是から先は、宮城野に咲く萩の花〳〵、宮城野に咲く萩の花、さんやれ〳〵えい〳〵〳〵、彌之助〳〵、寒そにこざる、火桶やりたや炭添へて〳〵、火桶やりたや炭添へて、さんやれさんやれ。

十四　美濃國てしやこ踊

本調子美濃の國にて妻持ち置いて、さつこの、いよこの、九重の花の都に住ひすれば、てしやこ、雨は降らねどみの〳〵、どつこい〳〵みの戀し、ゆかしてならぬは、てしやこてしやこ、てしや〳〵〳〵てしやてしやことしよ、まだ〳〵雨はななんな降らないにさ、みの戀し、ゆかしてならぬは、てしやこてしやこてしや〳〵〳〵てしやてしやこうとしよ。

十五　だうらく踊

本調子いとし殿御は破魔弓始さ、あの道樂め、むかひこよねが羽をつくにの、手鞠つくにの、よいつく〳〵〳〵にはつ天筆和合樂とぶつつけた、招く袂に文や玉章、袖の内は文や玉章、あの道樂め、むかひこよねはさ、やれこりや羽をつくにの、手鞠つくにの、つく〳〵〳〵にはつ天筆和合樂とぶつつけた、招く手元に文や玉章、袖の内は文や玉章見たか。

十六　唐人踊

二上リいきにて〳〵、すゐちやえんちや、すゐちや、すいふいちやういさらこわいめさはんやさそうわ〳〵ううちたるまたひさらきこいさらこわめさはんやさそうわ〳〵うあう〳〵。

十七　ゑしま踊

二上リ繪島岬に帆を巻きかけてどつこい別れの小手招き、君に廻らば、さつさ押寄せ漕ぎ寄せならばよえ、それ〳〵姉のおまきはもんやと契る、妹おなべはよきちとしよけろ、はて其方をどつこい、をどつこいおん〳〵思はゞさつこりや碇をぶつこめ、まつかぜ押寄せ漕ぎ寄せ〳〵ならはよえ、はりはどつこい、あみでせまつかぜ。

十八　暦踊

二上リやたて〳〵めでたや、こちのやの寶ぢや、元服よしの色男、續く日數を輕くかたげて、暦大經師暦、二十の殿御に、十九のおんお方、十九のおん〳〵お方、やれさてしつくりと〳〵、くり〳〵くり〳〵しつくりと〳〵、嫁入聟取復日大明、やら〳〵めでた。

十九　但馬小女郎

二上リ但馬小女郎ありやこりやといのにのぎよのふだわいの、見れば其の日のやつこりや祈禱となるわいの、ありやこりやといのにのぎよのふだわいの、見れば其の日のやつこりや祈禱となるわいの、なるぞ。

二十　もんつくつ踊

二上リ今津海津に朝通ひさ〳〵、蒔繪の差櫛桐のとう、もんつくつ〳〵もんつくつ〳〵朝通ひさ、蒔繪の差櫛桐のとう、もんつくつ〳〵もんつくつ〳〵朝通ひさ。

二十一　都の町青物踊

二上リ都町々に賣つたる物は何々なんぞ、青菜小なもみ大根〳〵〳〵、柚や生薑や茗荷の子、唐辛や菠薐草、白瓜から瓜あこだ瓜、西瓜の核は赤核黑核もござんす、四五寸伸びたるあさつき、さつても言うたよく言うた、松茸は見事ぢや。

二十二　拙僧踊

頭圓めて浮世を輕く、拙僧本意にあらねども、門々で貰ひまする、鉢の米の情に親をはごくむ旦那、一重に拙僧本意にあらねども、今日の釋迦の御弟子とおぼしめし、見す〳〵某を佛菩薩の化身とて、もろ〳〵の亡者を弔らふ旦那、拙僧本意にあらねども、思ひ忘れぬ娘盛を好いてきた、これが誠の拙僧本意でござるよの、是非ない人目恥かし色いろがよい間の手〳〵一錢や二錢や報捨を賴む

と夕暮に、兎唇が談義はかによらい、首筋元をやしろうて、ないすのけんかんへれそで捉んで、へめころせおゝよとろしや。

㉓ 堺の濱踊

二上り堺の濱にありやこりや、流れ枯木が棄てゝある、或人の申されしは、目や節や江戸や木曾や都にやない、定めて〳〵きん木目細かにござる程に、唐木でござるべんよの、さんがれ。

㉔ 梅の木踊

二上り昔より賣り始め候、梅の木村の和中散、君の病は思ひか戀か、外の藥は定劑でござる、こちの家にはじよさいとてはござらぬ、じんじやく胸虫こはり腹、酒の二日醉には娼や若衆の、やとゝんとん〳〵寢顏で呑まんせの呑まんせの〳〵、萬の虫に第一の藥ぢや。

㉕ 手合相撲踊

二上りよい〳〵〳〵お待ちやれ、やつとんとろ〳〵とろ〳〵と、御前かゝりに振り出す男、してゝん立がみ力自慢ゆりかけ〳〵、幸嵐にきり〳〵、やつきり〳〵きりりと廻つて、しつかと結んだ力帶、一夜なれ〳〵帶買うて取らしよ、それ振れさ〳〵、帶買うて取らしよ、解けて亂れて、やんれ〳〵それ〳〵〳〵男勇んでさ、進んでさ〳〵、繻子の鬢付、やととんとろ〳〵〳〵〳〵やととん〳〵〳〵とろ〳〵見惚れて優男、國で隱れない、さつても見事な大い男え。

㉖ 藤内太郎冠者踊

二上り藤内太郎冠者次郎冠者でござる、日本一の御機嫌に立つて舞をぞ舞うたりける、振を揃へてどりやどこの、そりやどこでの、さらば舞へ、太郎冠者えい次郎冠者、樣と並ばゝ雛の殿よ、並べて顏を〳〵、顏を並べてにゝにつとも笑うた、こつちのや〳〵こつちの〳〵よい殿え俺と其方は二重の帶よ、其方はそちらへくるりと廻りや俺はこちらへくるりと廻ろ、手先を揃へてとん〳〵、とん〳〵やととんとん、殿さまの二重帶締めて括して、しつくり〳〵力帶、結び止めたら猶よかろえ。

㉗ 蟹川踊

二上り蟹川を渡るとて、戀の文を落した、蟹らは知らぬか、はなしする〳〵出る月を、えてはお手を引き合うて、しんとろ〳〵とろ〳〵〳〵とろ〳〵とろ〳〵〳〵、たら〳〵おりで休んだ、俺は其方を忘れまい〳〵。

㉘ 俊乘坊踊

二上り大和でんまどつこい、してから〳〵都がとまりで、おんぢやり申せよさ、なうようほんにほんにお釋迦の堂供養、俊乘法師の後をつぎ、檜のお笠で鉢の子手に持ち、都の町を殊勝らしう通れば〳〵、あれの乳母も爺も父も、妻も姉も妹もちよき〳〵ちよき〳〵ごされの〳〵ちよきりこ〳〵ちよきり〳〵〳〵ちよきり〳〵ちよともぶん出した、むな木かまつかせ山家奥より横抱きにと、やれ〳〵でつくり坐つた楠。

㉙ 伊勢宮めぐり踊

二上りさてもえいしやさ、見事な天照神の、けふ吉日の宮廻り、後先揃うたら、さあ廻れ〳〵やまは廻れ風車、廻れ〳〵ばきん氣の藥、根から葉からそこ眞實から、浮氣がましましぢや、それさくるり〳〵くるり〳〵くる〳〵〳〵、それはえ春はどつこい伊勢參宮。

㉚ 菖蒲刈踊

二上り千代を〳〵重ねてえいえてこい、また每年の菖蒲刈、所は名に負ふ廣澤の、池の〳〵菖蒲を、ちよん〳〵きり〳〵〳〵ちよつきりと、家苞にひつ束ねかい束ねてかづいた、今年や世の中なかの〳〵よい〳〵よい〳〵、〳〵、なつかの〳〵なつかの節供の大飾り、惡魔外道を打拂ひ、清めたてまつるの〳〵、千年も萬年も萬々年もお家は盡きせぬ飾りえ。

㉛ 芋之子踊

二上り芋の其の子の育ちを見たかえ、さつては子寶めでたいな、子は四十八よの、末廣がりで、やら〳〵やら〳〵そんれはえ〳〵、やら〳〵やら〳〵めでたしやん〳〵、一座はざらりと竝べて、一度に呼んだお名はえ、おとよけさよ、たつまつ、ゆるまつ、だんだら、いなごに、かいつくぼう、ひつつくぼう、かいつく、ひつつく、火打袋に、しやん〳〵おめでたいよの。

㉓ 小川踊

二上り水を汲みやらばようやよやよ、小川で汲みやれ、小川小石川轉びよて、轉び〳〵轉びかゝるとよえ、君はさい鳥さし、わりや鴈の鳥、無念至極や落されたとよえ。

㉔ ていこや踊

二上り戀をしやらば火燵でしやれ、火燵痴話箱さんさ隱れござらぬ、なうほんえ、えゝなうほんえ、ていこや〳〵ていこ〳〵、ていこやと言うた奴は合點か、おうさゝ〳〵合點ぢや、打ちもせい、ちよんも一つせい、ちよん〳〵ちよちよんと打つた奴に、はる〳〵と出合うた、ちよちよちよんのちよ。

㉕ ほい〳〵踊

二上りこちのちんちくちを、ほい〳〵譽むるではないが、とつと奥山のむぎてものが有るとの、親子なかに五六本と言うてかりてこいとの、人がかりてないとの、それ〳〵見たか、それ見たか、根性長な子を持てば、人につい〳〵つい〳〵つい〳〵とられて、事をかゝした、ほい〳〵のほい。

㉖ のんやほゝ踊

二上り戀とくれ〳〵のんやほゝ〳〵、おしやおん〳〵おしやおしやれ〳〵、のんやほゝ〳〵とは思うたさうゝできたのや、おんは〳〵えい〳〵〳〵、裏の背戸のやのんやほゝ〳〵、おしやおん〳〵おしやおしやれ〳〵、のんやほゝ〳〵とは思うたさうゝできたのや、おんは〳〵えい〳〵〳〵。

㉗ 二木踊

二上りにほく戀しやな世にある時は、引けど靡かぬな曲もなや、とは思へども〳〵、善太どの〳〵、情に隔てはない物を、せめて一夜の情のあらば、今の嬉しき御親文字、忘れまじ盡させまじ、此の世はさておき後の世も、これさて〳〵〳〵よいやさ忘れまじ。

㉘ まん丸踊

二上り眞丸ござれ〳〵、十五夜の月の輪の如く、はり〳〵輪の如く、よいとんなとん〳〵、十五夜の夜さり〳〵綱挽女郎にうつ惚れた、はり〳〵うつ惚れた、まん〳〵丸やの七左が手管は合點か、おしつけ押へてやら可愛のみ船や、でかした〳〵これさ。

㉙ 今度屋踊

二上り今度やござらば、ようやよほいほぞんこしの町へ、行けば左へ戻れば右へ、えゝよほいほ、直に通へば一里十八丁廻らば三里、よほいほ、それをば行き過ぎ花のかの様に尋ね逢はう、これさ紺の暖簾によの字と書いて、紫竹出格子で隱れなや、えいそれをば行き過ぎ、花のかの様に尋ね逢はう、これさ〳〵。

㉚ ふくとん踊

二上り情夕霧ほつとりとりおことな、あゝんはずむなあ、ふくとん〳〵、小薩摩いき小太夫、ふくとんふく〳〵、ふくとん〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵。

㉛ さゝら踊

二上りやんらめでたや、やんら樂しやさゝさ千町や萬町の鳥追が參り ものもふくとくとのむこがきたやれこりやつまだてゝ、そろ〳〵そろ〳〵そろ〳〵そろ〳〵そろ〳〵そろ〳〵そろ〳〵そろ〳〵そろ〳〵やつこりやつまだてゝ、御代の盛の眞中、まん〳〵眞中、中で一人の御代繼。

古今踊歌百番　終

松の落葉　巻第五　古來中興當流はやり歌

目錄

一　花見車　二　五條車
三　咲いたさくら　四　吉田小女郎
五　四季よほんぶし　六　しうとめ
七　鹽屋長次郎　八　茶つみ
九　替りさいもん　十　手杵
十一　さまがたより　十二　間の山念佛
十三　伊勢の樞田　十四　おもやこそ
十五　替り榮閑神蔵　十六　うらのせどの屋
十七　旅の日暮　十八　鬼がでる
十九　おもひ草　廿　庄屋の庄左
廿一　つく物揃へ　廿二　三瀬川
廿三　心中しゆん　廿四　はてくせ揃
廿五　心中江戸三界　廿六　しもの關ぶし
廿七　わすれがたき　廿八　つらい〳〵
廿九　お馬屋關助　卅　かだの粟島

卅一　さまは天人　卅二　つんと坊
卅三　葛の葉　卅四　酒はさかや
卅五　おもてみやれ　卅六　いかな容衆
卅七　唐崎心中　卅八　むこ川
卅九　替りかんふうらん　四十　沖の石
四十一　さうだんべい　四十二　五尺手拭
四十三　大坂茶屋名寄　四十四　法性寺入道
四十五　お葛籠馬　四十六　ひめ小松

㈠　花見車

本調子花見車を引きやるはよいが〳〵、御所の女郎衆の袖引くな、やれ袖引くな〳〵、御所の女郎衆の袖ひくな。

㈡　五條車

本調子五條あたりを車が通る、のほんえ、誰そと夕顏に、さんさ花車、のほんえ、花車くるま、のほんのほんえ。

㈢　咲いた櫻

本調子咲いた櫻になぜ駒繋ぐ、のほんえ、駒が勇めば、のほん〳〵ほんほのん、いよ〳〵、花が散る〳〵。

㈣　吉田小女郎

本調子吉田通れば二階からちよいと招く、しかも鹿子のずんど振袖が、なんきみちよいとしよ。

㈤　四季よほん節

太調子誘ふ嵐に散り行く花の、よほん〳〵〳〵え、よほん〳〵え、せめて暫しは香ばかり袖には殘れ、よほん〳〵〳〵え、よほん〳〵え。

〽軒の橘枕にかゝる、よほん〳〵〳〵え、よほん〳〵え、小夜の寢覺に言問ふ山時鳥、よほん〳〵〳〵え、よほん〳〵え。

〽ところ關屋の月さへつらや、よほん〳〵〳〵え、よほん〳〵え、鹿の鳴く音にいよしも哀れを添ふる、よほん〳〵〳〵え、よほん〳〵え。

〽雪にならはで思ひは積る、よほん〳〵〳〵え、よほん〳〵え、消ゆる思ひになどかは解けぬは君の、よほん〳〵〳〵え、よほん〳〵え。

㈥　姑

二上りおれが姑はきぶいぞ〳〵、あの松山の葉をよめ、あの松山の葉をよめば、そなたは天なる星をよめ、姑を踊一踊。

㊐ 鹽屋長次郎

二上り鹽屋長次郎はこいさばにのせてなうさ、おきにやどん〳〵どんどろめけば、夜の目もよねられず、あさせうがいな。

㊑ 茶　摘

二上り雲の御來迎はさご右衛門が拜むえ、其の子無事郎ともあじことはするなえ、後はさご右衛門がみせかはりえ。

〽隣藪からによき〳〵出たは、こぞの竹の子のこの〳〵眞竹、こちのとゆ竹に見ておいた、しよがいな、やれ見ておいた、こちのとゆ竹に見ておいた、しよがいな、踊ろとまゝよ、跳ねぎろとまゝよ、いとし殿御とこちや寢たがよい、袖を敷寢の新枕。

㊒ 替　祭　文

本調子祓ひ清め奉るの、色は根本太夫職、扨ては天職姿なり、先んづ江口の始めより、君といふ字を書き初めて、世々の末には娼とよみかへ、僭上大臣閨の樞にひき籠り、常闇の夜店となりけるを、八百萬の末社達、おろせが宿にてこれを歎き、神樂を以て文作袖を飜せば、又常闇のけも晴れて、燈光り輝きて、これより色里繁榮し、末の世までも不退轉、寂光淨土の臺とかや。

〽思ひ切れとや、きりやまの朝霧こめて、やつきり〳〵〳〵八重桐や、小原高倉たませしは、式部奥州小倉山、背山都路唐崎や、くれは八汐の三千歳に、うらの揚巻つりはせで、いその勝山わけ上る、麓の野邊の萩原が、敷きとねし夜のねたましく、狹の上風吹きはらひ、あくるわびしき葛城や、高間高崎のせを川、あふえ大きし大淀や、此の大國の君たちに、替らで通ふ人々に、來るまじきはあゝ苦しの、災難が崇をなすとも、今よりは諸客は成就、揚屋は滿足全盛と、敬つてぞ申しける。

㊓ 手　杵

二上り市べ頭に弟は二人、餅の米がな、やれ小豆がな、山に手杵を見て置いた、しよがいな、やれ見て置いた、山に手杵を見て置いた、しよがいな。

㊔ さまが便り

三下りあらいたはしや、百合若さまは〳〵、知らぬ他國に棄てられて、橋の欄干に腰打ちかけて〳〵、そより〳〵と吹き來る風は、樣が便りか、なつかしや〳〵。

〽鳩が豆喰ふ八兵衛どの、鳩が〳〵、お花出て追へ、竿打ちかたげ、夜やり日やりに出て追やれ〳〵、ちやつと出て追やれ、夜やり日やりに出て追やれ。

㊕ 問之山念佛

二上り憂き事を、思へばいとゞ胸の火の、消え易き身と言ひながら、輪廻の絆に繫がれて、南無阿彌陀〳〵〳〵。

〽夢の中なる夢の世を、悟らぬ事のはかなさよ、南無阿彌陀〳〵、野邊より彼方の伴とては、胎藏界の曼陀羅と、血脈一つに數珠一連、南無阿彌陀〳〵〳〵。

㊖ 伊勢之櫛田

二上り伊勢の櫛田の眞中程で、深き思ひのやれ紫帽子、ほんにくどくかそりや眞實か、五智の如來の惠もあろと戀の重荷を乘掛馬に、離れがたなき我が思ひ。

㊗ 思やこそ

二上り思やこそ來れ思はで來よか、千夜萬夜は寢てこそよけれ、かけて良いのは小竿に小袖、かけて惡いは薄情〳〵。

〽君を待つ夜はのほんほ、ほんに〳〵さ、西も東も南もいやよ、ほんにさ、とかく待つ夜はきたがよい、のほんほ、ほんにほんにさ。

㊘ 替り榮閑神おろし

本調子飾らるゝ、百色の道具を竝べければ、たゞしまひものの如くなり、五通の手形の五本立て竝べ、元よりせいすけ、三國に隱れなき神變奇異の智慧者なれば、旦那の椽にさしあがつて、まで泣事をぞ申しける、金子三兩〳〵貸し給へ、上へ上るも路銀なければ、てんと白癩、ごと

うのつまりは下界に落つる、伊勢に身代固めたれども、雨に降られ風に吹かれ、月待日待に、あまつさへ大にちにあひ、あさましや火吹く力もあらばこそ、大屋の屋賃もなさゞれば、怒り切つて立てよ〳〵と、頭下しに叱られて、男ならば正八幡大菩薩、待つぞや誓しおなしあれ、伏見のごほうはいつものごとく、とうに濟まさばなにかせん、たてたは此の月申の日よ、車は少し御免なれ、眞實恩になすならば、錢は一文なけれども、天王寺で醬油造らせ、炭賣しても大事もない、四國の米は讃岐で一石同じく一石三斗なり、筑紫の彦山はいつものごとく大屋して、奇特にめうとは方便なり、丹後に成相きれいに門立て、大勢暮すと承る、日吉は山王廿一じやが、親は白髭左跂でこするな男、父をふんぬくぞんめいなり、みやうぎ町には願人坊、出刃で腹切る、湯殿のゆかたは見ぬまに失せたが、だいつが取つた、手元がみたい、見付けたぞ、追ひくる時は一厘にけ二厘にけ、第三にあたつては、奴に頭を切りわられ、惣じて身の創は、一萬三千餘創なり、たとへ定業かぎりの質物なりとも、今一度請けさせてたび給へと、せりかけ〳〵祈りけり、質屋も納受したりけん、五兩二つにさつとわれ、二兩二分にぞ成りにけり、三人の泥坊ども、左手右手より取付て、おん騙つたり〳〵、かほどの騙りは漢家本朝に、又と二人はあるまいとて、金貨す者こそなかりけり。

㊱ 裏の背戸のや

裏の背戸のやで、ぎしり〳〵とぎしめく程に、なんぢやと思うて、走り出て見れば、なんでもしやり〳〵、おんぢやれめされ、さしまさぬか、夏帷子のぬをおしやり〳〵さらす、おんぢやれめされ、さしまさぬか。

㊲ 旅の日暮

二上り言うて歎くは愚かでござる、言はで思ふはなう身を焦すといの、旅は日暮れが物憂いものよ、忘れた戀を又思出す。

㊳ 鬼が出る

本調子送り歸せば比叡の山風身にしみて、菜種の花もいろ〳〵。

〽鬼が出る跡より子鬼がいくらともなく、によき〳〵とある所につき給ふ。

㊴ 思ひ草

本調子長い刀をほしや〳〵とさして、通は流れ中を交にて通ふ、いつそ此の身は揉みくしやにして、死なば野中の身は朝露と、消えてはかなく成りゆくものを、何が殘りて罪とは成るぞ〳〵。

㊵ 庄屋の庄左

二上りおとんとん〳〵とろさくやれ、なかそめてこんにもせい、仲さへよくば鍋買うて所帶しよ、それがそこへいてることか、庄屋の庄三どの、はつちや愧かしや。

㊶ つく物揃

本調子籬がもとに立ち出でて、來ぬ人を〳〵、待つ身の怨み言はんため、やくや裳裾をかいとりて、土手をつく〳〵見渡せば、土手の番太は棒をつく、お寺の法師は鐘をつく、こちの馴染は嘘をつく、さて又我等は數々の、作りし罪の恐ろしや、後の世賴む南無阿彌陀佛〳〵、行いて歸るさに、行きや當り廻りて胸をつく。

㊷ 三瀨川

本調子西は堀川中小川沅湘日夜東に、流るゝ水の賀茂川や、妾がための三瀨川、げに〳〵はしも三本木、比は卯月といふしでの、ほんでんすごく立てならに、小家の燈火消え殘る、影をたよりてふみ迷ふ、かしこ妾よと定めえぬ、いつそ二人が中の島、隱れ行く身今更に、忘れぬ顏を今一度、見つゝ見られぬ薄月夜、しばし入間の水鏡、川を隔てゝほの聞ゆ、撥もしどろに引く三味線の、てうし〳〵といふ聲きけば、飲み白けたる風情して、夜も早いたく更けぬらん、わけと鳴きゆく時鳥、誠冥途の鳥ならば、地獄の有樣語れ聞こ、聞くともいかで變らめや、今宵限りの憂き契、ひじきものには薄羽織、はおらでし

くも短さよ、三下り〽どしおり帯の長枕、起きて見さんせな、後の世も逢をに、今しばしぞや又寝の床、〳〵にも濡るゝは袖、東が白む、白むか鳥も告げ渡る、翼を交さんためしにや、褄と〳〵を引結び、ともに假寝の夢姿。

㉓ 心中しゆん

本調子まゝにならぬは浮世ぢやものと、思ひまはせど又捨てられぬ、いつそ露とはきはめたけれど、後で其方が怨みんものと、思ひはかりて語ると言へば、しゆんは聞きつゝよう言はんした、わしも氣の毒語るにつけて、憎い平ざが横しま戀慕、それさへあるに近々に、西國方へやらんとは、親のまゝなる悲しさは、これが浮世の習ひとや、とてもこなさん死なんす身なら、わしはかうぢやと囁きければ、吉左首肯きさあらぬ體に、暇乞して立ち別れゆく、夜は何時ぞ、八つの過ぎかや七つの頭、六つの巷も三途の川も、死出の旅立つかいどり姿、心細くも後見かへりて、なう吉さまか、待ちかねさんしよ、首尾をつくろひ此の脇差を、盜みまするに暇どりました、いざや最期の水盃を、一つ二つに早ふしごやの、囘向の鐘は南無阿彌陀、南無阿彌陀佛と消えて明日は卯月の五日、せみの小川に名を流す、思ひと戀とえ。

㉔ はてくせ揃

本調子粋な在所の癖聞けば、まづ土手町はけしからぬ、雨の夕は面白や、また氣をかへて島原と、行けば禿がはしたなく、流行詞の口合に、あゝけたゝまし祇園町へと立ち歸り、もんじが門で誰やらが、氣でせい〳〵と石かけに、はやる口合まあさうよ、それは一升がなんぼする、はてさう言やるが嫌ぢやいの。

㉕ 心中江戸三界

二上リト本調子　江戸へやりつゝ鹽ふませたら、末がよかろとみな言ひ合せ、既に談合極りければ、そちに逢ふのも今日明日ばかり、まめで勤みやや、煩やんなや、暇乞ぢやと涙で語る、ふさは聞くよりこは何事ぞ、私は勤めを明日やめうとも、まゝな身なれどこなさんに、逢ふが嬉しゆてうかゝと、勤めまするに胴慾な、江戸三界へ行かんして、いつ戻らんす事ぢややら、山も見えざる假初についい馴れなじみ、わしを扨て、どうせ女房に持ちやさんすまい、要らぬ者ぢやと思へども、どうしたことの縁ぢややら、忘るゝ暇もないわいな、それを振り棄て行かうとはやりやしませんぞ手にかけて、殺しておいて行かんせな、放ちはやらじと泣きければ、男しばらく泪を流し、馴染もないに嬉しやな、なんのあが身に別れておれが、何を頼みに行かうぞいの、其方振り棄て行く身でもなし、今宵爰にていざ死なんとて、つひにふさをば刺殺しつゝ、ともに其の身も野邊の露。

㉖ 下の關節

本調子思案橋とん〳〵〳〵越えてな、お宿にござんす〳〵か、そこせい〳〵、三里隔てし波の上、色と情を小舟に乗せて、來るは誰ゆゑ、そさまゆゑ。

〽北山ばら〳〵ば、時雨ながら笠持て來い、降つてきたそこせい〳〵、雨は降るとも濡るゝとも、只恐ろしきかざし風、とかういふ間に晴れてゆく。

〽淺黄はざつとした、いやよな、望みがござんす〳〵る、そこせい〳〵、小雀山雀四十雀、から松たけの幾千代も、戀にうき茶の葉の色に。

〽一夜はちよつとの間これ靡けな、あんまり〳〵、そこせい〳〵、さりとはつらき御心、物の報は物ごとに、小野の小町の、身は市原のしやれすがた、あなめあなめと吹く風に、熱のさめたる末を見よ。

㉗ 忘れがたき

二上リ忘れがたきは彼の人さまの、過ぎし便りにこされし文を、たとひ三千年逢はずとままよ、親と〳〵の結びし緣を、なんの解かりよう其の下紐を、俺が解かいで解く者はおんぢやるまい、あとの玄猪にこされし文は、いつ〳〵よりもかはいらしや、なう〳〵えいこのさんさ、富士の裾野になー本薄、やれ書かれしは、いつか我が戀ほに出て、亂れ合はうといふ事か、えいこのさんさ、岩の狹間になやれ溜り水、獨りすませといふ事か、君と締め

合て寢る手枕は、長門印籠ぢやなけれども、具合がよかろと褒められた、褒めたも道理今の世に、又とあるまい御女郎。

㈥ つらい〳〵

二上り　つらい〳〵と思ひはすれど、顏が見たさにあこがれ來たを、それと知らぬえ、よしやよそに移ろふ濡衣なれど、色深くも思ひ染めたえ。

㈦ 御馬屋關介

二上り　伊達を好みやる、御馬屋の關助、くるやら馬も、馬も嘶き轡も鳴るに、次郎よ、太郎よどこに〳〵、さて馬どどんどつゝんとつ繫いだ、お寺の寺の柿の木に、づんぼろぼ〳〵、とゝんとつゝんと繫いだ。

㈧ 加太の粟島

二上り　加太の粟島を、えい〳〵えい〳〵えい〳〵な、えい〳〵えい〳〵えい〳〵な、何と言うて又拜むえ、君と寢釋迦を、えい〳〵えい〳〵えい〳〵な、言うて又拜むよえ、抱いたら締めたらさ、猶よかろえ。

㈨ さまは天人

二上り　さまは天人、それ〳〵とんとろり少女の姿　雲の通路ちらと見た、とんとろり少女の姿、雲の通路ちらと見た、とんとろり。

㈩ つんと坊

本調子　つんとぼがさ〳〵え、ちやのお前の反橋を、あんまいぎやたら〳〵のほんほほあゝつんとぼがさ、いやおりやつんど好いたよさ。

㈪ 蔦の葉

三下り　落ちよ〳〵と落しておいて、壁に蔦の葉のき心、蔦の葉〳〵壁に〳〵蔦の葉のき心。

㈫ 酒は酒屋

二上り　酒は酒屋に茶は茶屋に、女郎は木辻の鳴川に、〳〵泣いそな泣いそ五月にや戻る、遲て六月中頃に。

㈬ おもて見やれ

三下り　おもて見やれの、せけんまいよものか、忍びながよ妻のよ、ふたあゝ心よづまのよ忍び〳〵ながよ妻のよふた心。
五月雨ほど戀ひしのばれて、今は秋川の落し水〳〵。

㈭ いかな客衆

本調子　いかな客衆よりも、髭の角さまおいとし、お歸りの後を見れば、鬢附一貝鼻毛拔、小栗の草子を置かれた、これが花かや但し今宵の勤めか、物日〳〵の口ふさげ、世にこくに忙しらしいは晦日毎の夕暮、白いお手にて出だされた、何よ、お錢を二百出された。

㈮ 辛崎心中

二上り　此の世の名殘夜も名殘、死にに行く身を譬ふれば、

仇しが原の道の霜、一足づつに消えて行く、夢の夢こそ哀れなれ、あれ數ふれば曉の、七つの時が六つ鳴りて、殘る一つは今生の、鐘の響きの聞き納め、寂滅爲樂と響くなり、鐘ばかりかは草も木も、空も名殘と見上ぐれば、北斗は冴えて影映る、星の妹背の天の川、渡せる橋を鵲の橋と契りていつまでも、我と其方は女夫星、必ず添ふと縋りより、二人が中に降る泪、川の水嵩も增るべし、道行く人の聲高く、京や大阪の心中の、言の葉草のとり〴〵を、聞くに心もくれは鳥、あやなや昨日今日までもよそに言ひしが明日よりは、我も噂の數に入り、世に歌はれん、歌はゞ歌へ、歌ふも舞ふも法の聲、實に思へども歎けども、身も世も思ふまゝならず、いつを今日とて今日までも、心ののびし夜半もなく、思ひの色につらかりしに、どうした事の緣ぢややら、忘るゝ暇もないわいの、放ちはやらじと泣きゐたり、歌も多きにあの歌を、歌ふはたそや聞くは我、過ぎにし人も我々も、一つ思ひと縋りつき、月の影さへとゞまらで、心も夏の夜のならひ、命を追はゆる鷄のこゑ、明けなばつらや辛崎の、濱

で死なんと手を引て、志賀のさゞ波さよ烏、明日は我が身を餌食ぞや、誠に今年はこなさんも、廿五歳の厄の年、わしも十九の厄なれば、思ひあうたる厄祟り、縁の深さの印かや、神や佛にかけおきし、現世の願を今こゝで、未來へ回向し後の世も、猶し一つ蓮ぞと、つまぐる數珠の百八に、涙の玉の數添ひて、盡きせぬ哀れ盡きる道、心も空も影くらく、波打寄する辛崎の、松の木蔭に着き給ふ。

㊱ むこ川

二上りむこ川に住居する茶吉殿わいの、年が十五なら、心は月の眞中よさ〳〵さ、年が〳〵十五なら、心は月の眞中よさ。

㊲ かんふうらん替り

二上り大酒亂、冷酒飲んでみや、長酒飲みしらけも一つ飲んでみや、たんたらふく二日醉、後悔藥に金圓。

〽やんしうすむいろまりやんけんたにこたさんちゐけ。

〽宿がいよこのよければ、宿がよければ名も立たぬ。

〽佐渡といよこの越後は、佐渡と越後は筋向ひ。

〽橋をいよこのかきよやれ、橋をかきよやれ船橋を。

橋のいよこの下には、橋の下には鵜の鳥が。

小鮒いよこのくはへて、小鮒くはへてぶりしやりと。

㊳ 大坂茶屋名寄

二上りえい〳〵えい〳〵、繋がぬ船は、波にゆられて身は捨小舟、寄邊定めぬ港屋の、二階座敷で引く三味線の、音はてんつる〳〵、天滿屋たゞ屋、水の流れに吉野屋見れば、いつも格子に花橘屋、ゆかり求めてお名をば菊屋、それを尋ねて北島屋、文の數讀むかみたや紙屋、尼崎屋で身に濡衣、色が黒けりや大黒屋ぢやと、人が名立つりや少しはわくや、さきに夷屋あしや但馬屋で、焦れ扇屋あの姫路屋で、互ひちん〳〵交ひの、お手打交ひのお手枕、じつかはす枕に契をこめて、かはすまいとて起請まで書いて、のほりつめたる坂本屋、誰が思ひもあまさんな、はらりと酒の燗、同じこと梅の花、とうらいきうご五うりうすう。

〽鹿背山薄雲江口白菊坂田花崎唐崎ぢや、若松小紫でん〳〵り、几帳錦木琴浦玉の井伊達みよし。

㊴ 沖の石

木調子沖の石とは愚の沙汰よ、乾く間もなき我が涙、間もなきな、間もなき乾く、乾く間もなき我が涙。

㊵ さうだんべい

二上りそなた待つ夜の油火を、細く長かれとろ〳〵と、さうだんべい、至極と聞きわけた。

〽内裏女郎衆は水の月、手にも取られず見たばかり、さうだんべい、至極と聞きわけた。

㊶ 五尺手拭

木調子五尺いよこの手拭、五尺手拭中染めて、

〽おれにいよこのくりよより、おれにくりよより宿に置の太子屋の、花の振袖年や若松屋、つらい勤めは身にしみ〴〵と、流行小歌のその一ふしも、聞いてなりとも月日を松屋、額の小三はな綿屋の勤め、戀がござれば勤めのさはり、内のかゝたやな目をむきだして、叱り升屋と言うてたもれ、えいこのこいや、思ひ沈みし身は河内屋の、浮名かき消す住吉屋、波の枕に鹿島屋たてゝ、京屋伏見屋讃岐屋までも、くるりくるりと寵られてめぐる、便りござらばあの三笠屋で、一つ參れとを手にするゐたさ。

㊷ 法性寺の入道

二上り法性寺の入道、前の關白太政大臣、うな何故うせをつた、やれ叩き出されるな。

〽祇園町の眞中が、海なら川ならよござんしよ、魚をつる篠竹の、やれ様を釣りまつしよ。

〽猿丸太夫奥山に、紅葉踏みわけ鳴く鹿の、うな何故鳴きをつた、叩き出されるな。

關の小刀銘はなけねど、綾もたちます錦もたちます、金襴緞子は申すに及ばす、瓜も割ります西瓜も割ります、

うな何故割りをつた。やれ叩き出されるな。

㊹ お葛籠馬

二上り扨ても見事なお葛籠馬よ、下にや氈敷き唐縞の蒲團、蒲團ばりしてな、小性衆を乗せて、其方上りか、おりや今下る。文を遣ろにも言傳しよにも、此所は箱根のな山中なれば、筆にやこと缺く、硯墨は持たぬ。もしも水口なお宿りならば、札の辻から四五間めの茶屋で、馬も息災其の身も無事に、やがて上ろと言うてたもれ、えいこのさんさ。

㊺ 姫小松

二上りやら〳〵目出たや〳〵、天下泰平國土安穩、治まる御代は天長地久、千歳樂萬歳樂、民も豊かに住吉様の岸の姫松、しつてん〳〵に大悲の風吹かば、地には黄金の花が咲こ、ありややいよしのめでたいな。

松の落葉　巻第六　中興當流所作

目錄

一　契情夜明烏　二　犬阪上り道行
三　傾城因幡松　四　淀川所作
五　契情多賀大祓　六　契情誓湖
七　富士禪定　八　多賀御傳來記
九　奈良名所盡　十　吉田小女郎
十一　公時酒之醉　十二　西國八景
十三　鎌足道行　十四　菊の花いくさ
十五　名護屋山三　十六　傾城淺間嶽
十七　關東小六青葉　十八　小六自然居士
十九　男道成寺　二十　行平道行
廿一　行平地獄物語　廿二　松茸狩風流
廿三　稻荷四門　廿四　稻荷塚狐會
廿五　契情花筏　廿六　彌陀たのむ
廿七　傾城佛のはら　廿八　女仙人
廿九　女仙人怨靈　三十　廿四孝狐會
廿一　傾城善の綱　廿二　文覺上人
廿三　とがしの城　廿四　山居の僧
廿五　名馬揃　廿六　柴かり風流
廿七　あふみ八景　廿八　狂亂
廿九　三の車　四十　時雨の松
四十一　思ひの繪姿　四十二　文ことば
四十三　定家怨靈　四十四　地つき踊

㊀ 契情夜明烏

袖崎歌流
澤村長十郎

二上り今は昔とのむ煙草、何を便りに身は浮草の、浮いて流れの情なや、嘘もかざりも一座ながれの面憎や、ようも〳〵書いたぞ起請文、たゝく煙管に咎もなや、しやくり飲み〳〵流す涙の袂をひかへ、誓文くされ、神ぞこれにはあの言譯が、はて先づ聞けば恥知らず、いき畜生。二人が中の起請を見よ、先づ一つ其の方様と二世三世、死なばもろとも後世までも、夫婦の契約致すこと、また一つ外の男に假枕、交す詞のそのしな〳〵を、包まずあかし申すべし、こゝに誠の一つあり、かさねて嘘にも勤めにも、起請血判のおし申すまじき事と、書いて置いたはこりやどうぢや、人には嘘をばつくとまゝ、せめて神には恥ぢよかし。

㊁ 大坂上りの道行

中村千彌

本調子伊達なとりなりつい思ひたつ旅姿、人目を包む笠ふかぐ〳〵と面はゆく、五條の橋の霜柱、思ひ出せば故郷浪

華も懐しやと、いとゞ心はよわ〳〵と、行けば程なくこれやこの、宮川筋をのぼりつゝ、はやたつ風呂の浴衣がけ、さすが女子の京めいて、ちよこ〳〵急ぐゆたかさよ、東に向へば清水寺、大悲の誓有難や、枯木に雪の花も咲く、たれ松原の橋すぎて、加茂の流の水せい〳〵、ゐせきに遊ぶ友千鳥、はつと立つてはひらり〳〵〳〵、ひら〳〵〳〵飛びつれ〳〵飛びつく飛びゆく有様、たとへて云はんかたもなし、續く川風かみ洗ひ、さす手引く手にしなはこ話戀話、比良の雪風も肌さむござる、裾も小褄もちよとからげて、しやんとからげ、さん〳〵小波男波にもまれ女波にもまれ、遊ぶしらかみ、さんさ〳〵ちらし聲、をかしくもいさぎよや、西は法輪愛宕山、みこし高山峨々たるは、三國一の比叡颪、わが念願をはらさせ給へと、一心に祈誓かけ、歩み〳〵て今ははや、ふたうる茶屋にぞつき給ふ。

㊂　傾城因幡の松

瀧川六三郎　藤村半太夫　坂田藤十郎

二上リだまされて、思ふ事をば寢言いふ、わがつらい男に食ひつき歯切りする、其の心の罪つくる、油火とろ〳〵影法師、こゝにつつくり面影みする、嘘のかず〳〵つく男、寢てはびつくりする夢を見せてなりとも、あゝあの性悪々々、性の悪いは粋から起る、口に任せて目で殺す女心のはかなさよ、空誓文に乗せられて、嘘にも惚れたといふことは、餘り嬉しゆて憎からし、髪を梳きたて百しやうわけ、戀をしこなす男つき、そんなたならでは外にはないとさ、言うた詞のよい〳〵嬉しさに、逢うて悔しや恥づかしや。

㊃　淀川所作

山下龜之丞　澤村長十郎　岩井左源太

春の夜の夢おどろかす鶏の、そのきぬ〴〵の物思ひ、又あふ事もいつかはと、深き心に詫ち草、根引にせんと言ひ交す、身は捨草の捨てられて、流れし此の身は淀川の、何を便りに浮草の、波にゆらるゝうたかたの、あはぬは君が情なや、妬ましや、それは若草身を恨み草、なんの其方に飽いたではなし、飽きも飽かれもせぬ仲なれど、うけ出す金の、蔓に離れてつたなき我が身、せめて哀れと思へかし、送りかへしさみしや寢屋の、今は枕に香ばかり殘るうき思ひ、猶恨めしき鐘の聲、下行く水の思ひ川、底の心を白糸の、亂れて物を思へとや、鳥が歌へばも去のとおしやる、さのえ、月夜烏メはさ、いつも鳴くよ、しやうがえ、も去のとおしやる、さのえ、月夜烏メはさ、いつも鳴くよ、しやうがえ、しばし止りてくれよかし。

㊄　契情多賀の大祓

岩井玉之江　中村四郎五郎　津川半太夫

三下リ又とだに頼まぬ中の別れ路を、いまはの空の山葛、言葉でからむ葛の葉の、怨みかこちて甲斐ぞなき、水に繪をかく男氣を、頼む力ぞ便りなき、狂ひかけだす心の駒よ、止めてくれかし情のあらば、情手綱や縁の綱、たぐり寄せばや引き寄せて、抱いて寢た夜は花をやろ、寢た夜は花を、抱いて寢た夜は花をやろ、解けぬ思ひのあだ男、なう柏木ばかりはいとしうて、うちには水がつくかいの、死ねなら死ねと假名がきに、讀めるやうには言ひもせで、あだに取られし命ぞと、髻に縋りむしりつき、食ひつきつめり涙ぐみ、疊たゝいて泣くばかり。

㊅　契情誓湖

大和山甚左衛門　山下龜之丞

三下リ花は散りても春は咲く、死して返らぬ死出の山、迷ふ戀路のむごやつらや胴慾や、ようは殺したその苦しさを、今ぞ語らん泪川、いとし男のその言の葉を、かはい〳〵と僞りごとを、誠と思ひおりや一筋に、つらい勤めも、それはその〳〵そりや苦にならで、廓はなれて罪なき花を、いつか〳〵と氣のせく事も、皆あだ花と散り行くこの身、今くる花に目がくれて、よふは樂しむ心の憎さ、とかく死んだかさりとは因果、死んで花實の咲かぬとは、花實の死んで、死んで花實の咲かぬとは、我が身の上に白雪殘る、積るうらは戀の山。

㊆　富士禪定

高島尾上　金子十郎左衛門

二上リ一筆と書きそむるは懐かしさの儘、道より問はせまゐらせけべくけ、別れより程はあらずけへど、思ひ寢にする獨り寢は、心も澄みて目も冴えて、煙草戀草伽とな

る、閨の内かはる色なき御暮し、やがて逢はうぞや、語ろぞや、筆に任せぬ物思ひ、ただ逢ひまして〳〵、殘る言の葉かへすがき。

㊇ 多賀御傳來孫嫡子

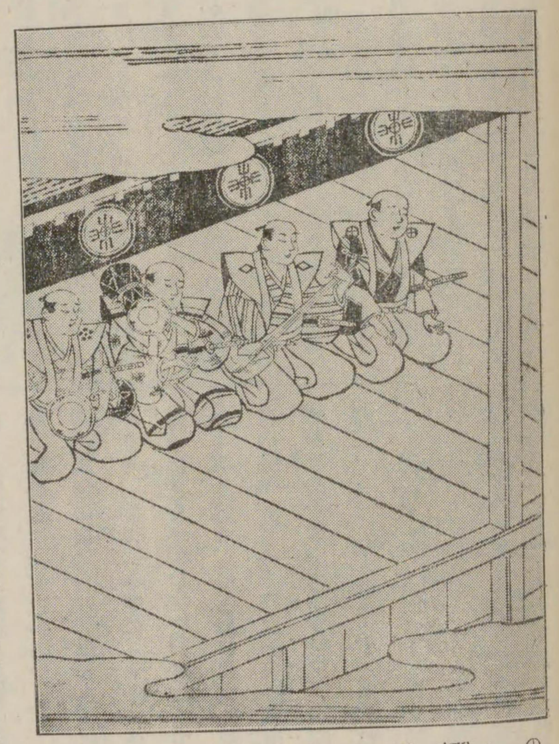
松本重巻
大和山甚左衛門

二上りうつゝ、男の姿にまがふ、さらば面影離れもやらで、我が身一つの憂き思ひ、おなじ思ひに沈みし仲も、いとど忘れぬ閨の内、いざ床とらん春の夜に、こち寄れ枕、長枕語り明かさんおぼろ月、煙草引きよせ呑む睦言に、おれもそなたも知らぬ昔がよいわえ、とても知るなら根から底から知れかしな、いつの物日に馴れ〳〵そめて着衣はじめ、譯ある戀の種蒔きそめて、仲よしかみよし心よし、二人轉寢にころりとしたもましぢやえ、明方の鐘は撞く數の、響きにあたら夢を忘るえ、あけもんの知らせは、お歸りと起され、あたら床をわかるえ、遲い〳〵〳〵の、お歸りと起され、あたら床をわかるえ、惜しや妬まし春の風。

㊈ 奈良名所盡

竹中吉三郎
山村勘三郎

本調子三笠山名に高く、唐にても仲麿が、ふりさけ見ればと、よみし名所のその昔、今も雲居にすむ月の、久方のあまくだります宮の神杉、木の間すかしに眺めあり、問はせ給へや敎へ申さん、嬉しや扨ては尋ね申さん、あれあれは名に負ふ奈良坂や、此の手を合せて伏し拜む、東大寺には大佛の、釋迦はやり、彌陀は導く一筋に、後生前生のみ寺とかや、おうそれ其處の高嶺はつゝら山、のりかけ馬の徒路の道を行けば、左へ戻れば右へよほいほ、直に通へば一里十八町、廻らば三里よほいほ、それをば行き過ぎ、花の初瀨の山續き、興福寺と申せしは、藤氏の御願所にて、大織冠な御身をやつし、面向不背の玉を取らんとおぼしめし、賤しき海士の磯枕、妹背ことばの末かけて、女も命捨小舟、漕げやえいさら、八十島鷗の立つよの、たたせ給ふは志度寺の觀音、南無や薩埵



いとゞ綱の、延ぶるを便りに走り入り、かの寶珠を盜み取つて、逃げんとすれば惡龍追かけ、かねて巧みし事なれば、持ちたる劍を取り直し、乳の下をかき切り玉をおしこめ、劍を捨ててぞ臥したりけり、龍宮の習ひに死人の忌めば、邊に近づく惡龍なし、約束の繩をうごかせば、人々喜び引きあげ、玉は面向不背の唐、あの御本尊の、力を合せてたび給へとて、大悲の利劍の額にあて、龍宮の中へ飛び入れば、空は一つに雲の波、煙の波を掻き分け潛き上げ、又どう〳〵と落ちくる男波のひまを、つつと潛るや唐紅の、綱は腰繩命のきづな、しつかとひかへよ、御船のうちにも心得、えい〳〵えい

眉間にこめしぞ、拜ませ給へや旅の姫、二月堂には觀世音、牛王は彌陀佛はん木の御板、井筒の祈に鈴錫杖はがら〳〵〳〵、ちんから〳〵〳〵唐獅子の、踏むらん拍子やしつたん〳〵、たん〳〵賴むやたん〳〵他力、他力功力のたき文珠、わかさみかさにわかさやと、瀉水の印をぞ結ぶなり、結ふや誓の常陸帶、鹿島の御神當社に遷るや、高きお山は本社の甍、麓にとゞろき猿澤沙羯羅、八大龍王龍燈捧げ、池の青波蹴たて〳〵て雲にのり、大地をかつばと踏むひやうしの御神、惣じて奈良は七堂伽羅八百八禰宜、九重十重都の礎、社の數が一萬八千、通り者めが褒めて置いたる名所舊跡、互に問うつ問はれつつ、春日の宮居に著き給ふ。

㊉ 吉田小女郎

嵐三右衛門
芳澤菖蒲

端歌あら淺ましやつれなやな、我からなせる思ひの種、みの末世、一代教主の如來も、生死の掟は逃れ給はず。

木遣子〳〵池水に底の心は通へども、岩に堰かれて落ちあはぬ、あきてはかなき浮世ぞと、思ひすてゝも棄てられぬ。

三下り〳〵昔の人の戀せしは、命も絕えよと戀をする、さて中頃の戀の道、草木も靡けと繼をする、二上り〳〵我は思へどそなたはつらや、磯の流れ子の片思ひ、さはりせうがのやれ片思ひ、磯の流れ子の片思ひ、さはりせうがの、

端歌〳〵とは思へども、いとど戀しき折々は、人目も恥も包まれず、せめて閨もる月だにも、別れを急ぐ遠寺の鐘や、梢の嵐は物すごやの。

二上り〳〵戀の山、寢るも寢られず目も合はぬ、身の狂亂は誰故ぞ、問ふに辛さのます鏡、いつまでかくは存へて、憂きは數そふ習ひにて、身は捨て草のいたづらに、あら怨めしや〳〵、心も無けに立ち昇る〳〵、くゆる煙りはほの〴〵と、あとには戀の淵瀨川、せど川の澤の〳〵、寒き嵐にひよつと浮かれて、川原面に浮名をさらす、思はじ〳〵とんと棄てう、そも戀は何の報ぞ〳〵。

㊊ 公時酒の醉

竹島幸左衛門

二上り峰の松風通ひきて、琴の調べと疑はる、一の人大臣はしよだいない人で、え踊らぬ我に踊れと仰る、踊りでふりを見せまるらしよ〳〵、くわんこや〳〵、くわんこや〳〵くわんこや、てれつくに〳〵、からりちんにちんからり、しやつきしや〳〵、しやつき〳〵しやつきしや、ここを開けさい、開けずば戻ろ〳〵、忍ぶ其の夜の通路に、必ずござせとさ、樣の俤、深山の奥を通りて見れば、いたいけしたる花あり、荻萩薄刈萱紫苑龍膽、數の花折りせたら負うて背負うて、藁で髪を結うて、腰に鎌差いて、ついつくばうて、かいつくばうて、つい〳〵とりなりは、柴刈る男のなりふりは、みめの惡いしやつ面で、そばにころりころ〳〵り、〳〵〳〵、ころ〳〵りとも寢たるは、毬栗頭髭天神鬚、今朝打ち下しのあら筵、雁木鑢鮫肌、つい突くやうで刺すやうで、いつくにばつくに寢られぬ、誓文のつつ立て申すべい、弓矢八幡腰骨粉微塵に打つて、屍はかきに晒すとも、梢頭に寢よ、危いこんだとさ、變り果てたよ、しよだいなや。

㊋ 西國八景

竹島幸左衛門

木遣子別れて泣く音高砂や、室津に通ふ市人は、山市の晴嵐今此處に、移しぬるかと面白や、それより沖のあま小舟、八十島かけて漕ぎ出づる、此方は尾上鐘の音に、霜に冴えつゝ聞ゆるは、遠寺の晩鐘哀れなる、一村雨の降りくれば、苫洩る雫に身をそばめ、こがれたゞよふ其の風情、これや誠に瀟湘の、夜の雨よと思ほゆれ、繪島が崎は雲はれて、猶洞庭の秋の月、心を慰むたよりとなり、夜もほの〴〵と明け〳〵れば、いとゞ舟長力を得、梶とり直し帆上げて、波に漂ひこがれゆく、淡路の島の朝霧に、群れるて遊ぶ雁金の、我は故郷の戀しさに、とこよの寒さ如何なれば、故里棄てゝきたるやと、問はばや平沙の落鴈に、蘇武が古思はるれ、沖のつん釣舟なる艪拍子の、音はからころり、つるえりつるろ、男鶴女鶴夜のつん〳〵鶴めが、つま思うて鳴く音に、いざや較べん較べこし、暮れかゝりては浦々の、沖の釣舟我さきにと、入江々々に歸りしは、遠浦の歸帆是なるべし、遙に見えしは一の谷、誠にいにしへ源平の戰、亂れし跡も有明の、月に白むは劍の光、水に映るは青の星、打合ひ刺違ふる軍勢の其の有樣、退くは潮に滿つるは又、八重の潮路の

はる〳〵と、西海四海の波の上、疊みかけ〳〵追かけ〳〵戰ひしは、はな〴〵しくこそ聞えける、あら面白の眺めやと、勇みに勇んで行くほどに、明石の浦にぞ着きにけり。

㊸ 鎌足道行

竹島幸左衛門

本調子扁柏の二面、いつか竝べん長枕、本ノマヽにかれて行くや只一人、勅諚重き御意を得て、四國の浦へと急がるゝ、心の内こそ頼もしき、はや山城に井手の里、月の横川の峰續き、左手は比良の、右手は愛宕の山おろし、峰の煙の一結び、袖打拂ふ古を、思ひ出せば故郷の空も懐かしやと、猛き心もよわ〳〵〳〵と、しどろもどろの志賀の里、須磨の若木の櫻花、嵐につれて、散るは〳〵散りくるの、散りくる〳〵、惜しき櫻は散り果つる、思ひ明石の浦過ぎて、室の泊に身をよせて、海漫々と見わたせば、此方は四國の淡路潟、波にもまれて行く鷗、浮いつ沈んづ、沈んづ浮いつ、ばつとたつてはひらり〳〵ひら〳〵〳〵と下るゝ有樣は、譬へて言はん方もなし、便り求めて行く程に、七重八島の壇の浦、眞砂をはつと拂ふ風のまは、笠かぶり傾けて身を詫ち、人まつ澤に腰を掛け、旅の休息なされける、異國は知らず我が朝に、例まれなる所存やと、褒めぬ者こそなかりけり。

㊹ 花軍

竹島幸左衛門

三下り優曇華の花の開くを待ちかねて、散らすな花の主をば、焦れ〳〵て、連れて都へやれ上らんと、音にきころ〳〵、音に聞えし小原の里は、菊の名所と便を求め、杖に絶りて數へてみれば、白菊の紅菊の、小手鞠寒菊きくきり〳〵、きり〳〵まはる水車くるり、澄まず濁らずよほほんにさ、くん〳〵くん〳〵〳〵廻る車菊、廻り廻れば芹生の里、沈や麝香は持たねども、匂うてくるは薫物、小原木〳〵買はい〳〵、黒木召されの柴召さいの、ちやうりよふりよひうやらに、ひやらろひやらろに、るろるりちやらるろう、心浮かれてさつても〳〵面白や〳〵、兩陣互に心を合せ、菊の勢を味方になせば、菊の莟をさつと開かせ、躍り上り飛び上り、手重の菊の勇みをなし、あつぱれてん〳〵手柄やと、褒めぬ者こそなかりけり。

㊺ 名護屋山三

中村七三郎
花井東一
子役

端歌泣く泪雨と降らなん三瀬川、水増りなば歸り來て、此の有樣を見給へなう、夫婦は目もくれ心消え、こはそも夢かと立ちよれば、妄執の雲の隔たりて、今まで見えしは姿もなし、是は夢かや現かと、夫婦たがひに手をとりて、わつと泣いては抱きつき、呆れ果ててぞゐたりける。

二上り〳〵光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨、南無阿彌陀〳〵、袖の港の波風も、聲添へて南無阿彌陀、聲の中より幻に、迷ひ出でさも苦しけに、よろ〳〵と歩みより、あら情なや母上さま、喉が乾きて苦しきに、水を手向けてたび給へ、苦しやと、絶え入るやうにぞ泣きゐたり、夫婦は夢の心地して、げに道理なりいとほしと、器物に水を入れ、よらんとすれば忽ちに、猛火さかんに燃えあがる、母は餘りの悲しさに、抱きとらんと立ち寄れば、不思議や俄に風吹き來り、眼くらんで降りくる雨の音は、そも、篠を束ねてさら〳〵〳〵と、雨か涙か陸路にどうど伏しまろび、木神にひゞく聲ばかり、あら悲しや堪へがたや、助けてたべなう父母と、叫ぶ聲の聞ゆれば、夫婦はいとゞ悲しくて、八聲の鳥の音をたて、人間の水は南、星は北にたんだくも、あまの海面よき雲の、立ちそふ聲も微かに聞え、夢かなう現か夢か、幻の世ぞ哀なる。

㊻ 傾城淺間嶽

中村七三郎
岩井左源太

二上り怨みも戀ものこりねと、もしや心の變りやせんと、思ふ疑ひ晴さんための誓紙をば、なぜに煙となし給ふ、怨めしや胸の炎は夜に三度、こちの思ひは日に三度、煙くらべん淺間山、あれ御覽ぜよ淺ましや、邪淫の惡鬼は身を責めて、なう劍の山の上に、戀しき人は見えたり、嬉しやとて攀ぢ上れば、思ひは胸を碎く、こはそも如何に恐ろしや、花の姿もよわ〳〵〳〵と、彼處に立ち、行かんとすれば、此處に消え、あるかなきかの春の夜の、

朧月夜に果敢なくも、消えて形はなかりけり。

㊦ 關東小六青葉　芳澤菖蒲

三下りこは情なきしわざかな、さのみ人にはつらかりそ、悲みの涙眼にさへぎり、西も東も白波の、よるべ定めぬ泡沫の、いつそ泡とも消えもせで、こがれこがるゝ身の行くへ、青葉々々と呼べども濱の、濱の松風音ばかり松風濱の、濱の松風音ばかり、そよとばかりの便りもがなと、怨み歎くぞあはれなる。

㊧ 同小六自然居士　中村七三郎

二上りよせては岸をどうとは打つ、あま雲迷ふ鳴神の、とゞろ〳〵と鳴る時は、小笹の竹の籔をすり、あなたへざらり、こなたへざらり、ざらり〳〵、ざらり〳〵ざつと、吹きくる風は戀風か、あだし野の草葉に置ける露の身なれど、身なれど是も、是も假なる世の勤め、とかく世の中につらいものはなに〳〵、忍ぶ妻戸に、妻戸に忍ぶ、忍ぶ妻戸に籠の聲よんの。

㊨ 男道成寺蚊屋之段　中村七三郎　山本歌門

二上り君戀ふる泪を受くる盃に、思ひ切る瀬と切らぬ瀬の、中に流るゝ妹背川、思ひ焦がるゝ短夜は、とても寝られぬ憂き枕、蚊屋の一重の薄月洩るゝ〳〵、洩れてさびしき夜すがら、共に泣かるゝ時鳥、包みかねてはくい〳〵と、水雞の鳥の物思ふ、今宵ばかりは薄情、さのみつらくはのたまひそ、いつの月日に見初めて、扨ても思ひ切られぬ身ぞつらや、心からなる我が涙、とは思へども怨めしや、血筋は眞紅の網をはり、戀を結ぶの神心、我が身の戀はいかでかは、憎しと思ひ給ふらん、あら怨めしや其の人の、思ひ亂るゝ新枕、誰か解くべき常陸帶

禪僧の戀するはまづ文を遣りて見て、やりかけ〳〵やりて見て、來たろにや抱いても寝しよね、もし來ずば袷の片褄片袖を打敷いて、此の怨み寝にも寝しよね、波のたちゐも何故ぞ、假なる宿に心とめずば浮世もあらじ、別路も嵐吹く、花よ紅葉よ月雪の、ふることもあらよしなや、假の浮世に。

思ふもつらし姤ましと、蚊帳の中へ入りぬれば、こは悲しやと走り出で、わな〳〵震うておはします、なう情を知らぬ姫君や、たとひ何處へ逃け給ふとも、此の戀仇になすべきか、思ひ知らせん腹立やと、蚊帳の外をくる〳〵〳〵、くるり〳〵くるり〳〵と、苦しげにつく息は猛火と成つて此の身を焦す、あゝ曲もなき御姿と、蚊帳に包みしつかと抱き、虚空に向つてつく息は、鬼ともなれ蛇ともなれ、我ながら我が姿人目はづかしあさましと、思へど切られね輪廻の絆、哀れにも又恐ろしや。

㊤ 行平道行　中村七三郎

本調子けに幾秋を經べき御代なれ住吉の、かねて植ゑおく松の千歳は盡きすまじ、時しも秋の夕まぐれ、里の砧に月冴えて、千々の草葉になく蟲の、聲も涼しき鈴蟲や、君を蟋蟀、轡蟲、忍ぶ夜寒は松蟲も、荻が上葉にねもしなん、猶行先は姫小松、浪華の蘆に初鴈の、おのが友呼ぶ聲添へて、眺め盡きせぬ道すがら、身にしむ風に空晴れて、兎唇初茸うら若き、薄につなぐ賤の、磯のみるめも

三下り語るに罪も消えぬべし、語るにつけて恐ろしや、苛責の責も音高く、振り上ぐる鐵杖は、天地も響くばかりなり、罪を現す淨瑠璃の鏡に惡を映せば、八萬奈落明かに、天を映せば非想非々想天まで隈なく見えたり、扨て又大地をかゞみみれば、先づは地獄道罪を現す罪人の苛責、打つや鐵杖の數々盡く見えたり、こはそも如何にと立ち去れば、紅蓮大紅蓮の氷に閉ぢられて、あたりを見れば猛火大地に滿ち〳〵たり、無間地獄の苦みは、熱々たる炎の中へ、まつさかさまに落つる事三羽の征矢、下より猛火吹き上ける、とがは上より落つる所を、さつ〳〵と吹き上けて、隙なく苦患を受くるなり、阿鼻大地獄の苦みは、鐵石を立つ事一由旬、劍をひつしと植ゑ並べ、罪人を追ひまはし、岩石背に結ひつけられて、峰よりどうど突落さるれば、骨は微塵に碎かれて、風に木の葉の如くなり、助け給へや人々よ、懺悔に罪も消え失せ

て、願ひのまゝにやす〳〵と、弘誓の舟の川岸に、到り到らせたび給へとて、泪ぐみてぞ語りける。

㈢　松茸狩

中村七三郎

木調子　稲舟の押すに押されぬ梶枕、寝もせで長き夜のつらさ、語り慰む片糸の、折敷御座のかた〳〵に、寝られねばこそ夢もみず、誘はれ出て道の邊の、千々の草葉に鳴く蟲も、思ひ亂れて糸薄、せめてそれかと我問ふものは、荻の上葉に亂れ〳〵て風そよぐ、餘所にも置くや袖の露、どれ〳〵月の映ふ影見えて、殘る松さへ嵐につれて、いとゞ心はなうさんさ物わびし、道しるべせよ忍草、繁き思ひは秋霧の、仇名たつとも厭はじな、宵より閨に引き籠り、待てど暮らせど其の人の、そよとばかりの音信も、はや九つの鐘が鳴る、扨ても思はぬ障あり　今宵の逢瀬はやれ扨て叶はぬな、よし〳〵詫つても野暮らしや、いつそ夢こそましならめ、枕一つを樂しみて、戀しゆかしき閨のうち。

二上り　らよりさきに必ずと、仇し言葉の人心、其方の空よと眺むれど、それぞと問ひし人もなし、夏もはやすぎまどの、秋風冷やかに吹き落ちて、よしや思へば是とても、逢ふは別れなるべし、世をも人をも怨むまじ、たゞ身のほどを思ひ續けて我一人、まろねの床こそさびしけれ。

㈢　稲荷塚四ッ門

中村七三郎

二上り　翌帳紅閨に枕並ぶる床の內、馴れしねまきの夜すがらも、四つもんの跡夢もなし、さるにても我が夫の、秋

㈣　稲荷塚狐會

中村七三郎

二上り　亂菊や小菊白菊小手鞠や寒菊、君を待つ夜はくる〳〵と車菊　よしや歎けど慕へども、秋の朝空露とぢて、露なき草に木隱の、杖を頼みに休らへば、身にしむ風に褄も袂も、ふは〳〵と吹きあげて、我とは見えぬ水鏡、映す姿は月影の、曇りみ晴れみ行く雲の、空さだめなき山々の、木々の梢に鳴く鳥は、山雀小雀〳〵四十雀、鶸や鵐めうない雀、鳴子ひく音に驚かされて、

數の小鳥が群立ち騒ぐ、憎や〳〵小鳥が我をおどすは面憎や、えいこのえ〳〵〳〵えいこのえ、簑と頼むよいや又笠と、笠と頼むは小池の蓮の葉、かくは草刈たすく男はよいやさ、えいこの〳〵〳〵〳〵えいこのえ、木の葉の雫はら〳〵〳〵、風にもまれて秋の小蝶の戯れて、峯の小松にしなだれかゝる蔦葛、よれつもつれつ、離れがたなき我が思ひ。

㈤　傾城花筏

葉山　岡右衛門
蔦山　四郎兵衛

二上り　語るにつけて悲しきは、此の幼いが身の上なり、父は播磨の某とて、人に知られし武士に、母は室津の上臈のはて、假に難波に住居して、此の子を設け給ひしに過ぎつる秋の末つかた、我に此の子を預けおく、いたはしや幼いは、父よ母よと戀ひ焦れ、晝はひめもす夜はまた、夜明の鳥ともろともに、まどろみもせず泣き明かす、目もくれ心消え〳〵と、身も世もあらぬ不便さに、母の几帳に渡さんと、さてこそ室津へ參るなり。

㈥　彌陀たのむ

芳澤あやめ
今村粂之介

三下り　彌陀頼む人は雨夜の月なれや、雲晴れねども西へ行く、なまみだ〳〵、いとし我が子もせめてさて、彌陀の御國に行くなどと、便りのあらば如何ばかり、嬉しかるべき我が心、其方いとしけりや、なうやれ我が子もいとし、それなぜに、いつそ子もなけりや、なけりやこそ思ひもないよさ、よしやよしなや、迷うたりなう扨て、なまみだ〳〵〳〵〳〵、鐘の響きに夜はなん時ぞ、八つでもあろか、いやなうあれ〳〵夜が明けるやら、はや晨朝の回向の鐘のあら有りがたや、いざや我が子の菩提の爲に、なまみだ〳〵、宵にや和讃、夜中にや法華經、南無地藏大菩薩〳〵、心が亂れての、しどろんもどろんく〳〵、其方へは行かぬか、此方へは行かぬかと、傍なる人に問へど〳〵、問へど答へぬ古塚の、夢か現か幻か我が子戀しや。

㈦　傾城佛の原

岩井左源太
上村吉三郎

二上り何時の間にかは秋風の、吹くや越路の山越えて、波の三國の分ある里へ、惡性通ひの面憎や、提子の水は湯となれど、まだ覺めやらぬ我が思ひ、つらし嫉ましあら腹立やと、縋りついては泣くばかり、俺と其方はなん〳〵〳〵七つ八つ、十で殿御を見初めて惚れて、人こそ知らね振分髪の、其方ならでは、誰にか見せん此の黒髪を、今は仇なる亂髪、亂心があゝ〳〵〳〵〳〵逢ひた見たさに來たぞ、やれつらや〳〵と思ひはすれど、まだ棄てられぬ、憎さ餘りていとしさ優る、扨ても命はつれないものよ、君つらや、生きて思ひは愛別離苦の、死んで又來て、その〳〵〳〵そのさきの世で、思ひ知らしよぞ思ひ知れ、袖の港の戀の淵、渡り比べん涙川、戀の一念盃の、影暗きよに瞋恚の毒蛇、くる〳〵〳〵〳〵くるり〳〵〳〵、廓通ひもふつゝりと、思ひ切れ〳〵嫉ましや、あら腹立ちやと立つたるは、あはれにも又恐ろしや。

㈥ 女仙人

多門庄左衞門
出羽島小三郎
山本歌門

二上りそちが思へばこちも思ふよ、何れ思ひは變りはせねど、いつもながらの御見も絕えて、今はなか〳〵逢ふ事ならぬ、何故な、僞がちなる心と知らで、つらきながらも離に立てば、傳の文さへ、やれ扨て叶はぬ浮世ぢやえ、よし〳〵詮つも野暮らしや、いつそ死んだがましならめ、扨ては叶はぬ浮世やと、思ひつめたる其の氣色、身につまされていとしさまさる、たとひ萬里を隔つとまゝよ、變る心が〳〵なけれども、逢ひとて見たうて、語りたうて來たおれに、何故に其方は顏ふりやる、扨ても〳〵其方は、けに戀の敵よと、怨めしさうに打眺め、縋りついては泣くばかり、一樹の蔭の一宿り、又は一河の流れの身、枕竝べし睦言も、假の浮世の習ひぞや、あはれはかなき自ぱ、たま〳〵受け難き人身の受けたれど、例少なき川竹の、流れの身となる悲しさよ、前の世の報いまで、思ひやられて悲しやな、少しあはれとおぼしめし、機嫌直してなうこれ〳〵、ちと笑ひ顏が見とござる、戀も口說も一盛、假の浮世の夢なれや、經文交りになまうだ、なも〳〵なまうだ、語る間もなき閨の內、はやきぬ〳〵に引き別れ、首尾さへあらば重ねてと、さらば〳〵〳〵さらばやと、裾や袂に取り付けば、戀しき人の面影は、見えつ隱れつ幻か、消えて跡なき夕まぐれ。

㈦ 女仙人怨靈

山下又四郎

三下りそれ三界は夢なれや、三つの車に法の道、火宅の門をや出でぬらん、月は東の山より出でて、西の山の端に隱れつゝ、世上の無常はかくの如し、何の上にも報いあり、浮む事なき自は、邪淫の惡鬼と身は成て、えい〳〵さつても〳〵未來えい〳〵、くる〳〵〳〵といや附添ひて、我に憂かりし其の人の、生きて此の世にましまさば、水くらき澤邊の螢の影よりも、われが思ひも胸の火は、火焰となつて此の身を燒く、無念や腹立やと、笞振り上げ追ひ廻り、髮をくる〳〵〳〵〳〵〳〵と、手にからまいて打つや打つ、宇津の山邊の夢の世に、廻りくる〳〵因果は今ぞ、思ひ知らずや思ひ知れと、飛び上りては轉び伏し、雲に打乘り波を蹴たて〳〵飛行するこそ凄じけれ木蘭子恐ろしや幣束に三十番神まし〳〵て、魍魎鬼神は穢らはし、出でよ〳〵と責め給ふ、面憎や嫉ましや、思ふ人をば徒らに、とらであまさへ神々の、責めを蒙る惡鬼の通力、力もたよ〳〵よろ〳〵〳〵と、足弱車の廻り〳〵て又とるべしと、呼ばはる聲も微かに聞え、〳〵、松風ばかりや殘るらん。

㈧ 廿四孝狐會

山下又四郎

三下り見初めまいものうか〳〵〳〵と、浮かれ心か烏羽玉の、夜ならで晝は焦るゝ我が思ひ、寢ても覺めても忘れもやらで、音をぞなく〳〵、君を思へばなんな〳〵篠薄や、尾花の中を潛り〳〵潛つた、なんぼ潛りにくい、潛り〳〵潛戶やるまいぞ〳〵、どつこいそつこいやるまいぞ、さまを見かけてはしりこきり〳〵こきりこ、こきりこきり〳〵や、月の夜も行く闇も行く、雨か霰か露か木の葉かはらり〳〵〳〵、しどろもどろとあの山越えて此の山越えて、今朝のきぬ〴〵現れさうな〳〵、去のよ戻ろに我が古塚へ歸らん、勇み〳〵歸らん、おれが思ひは包むに餘る〳〵、綟の袱紗に紅梅小袖、包めど〳〵何と包めど色にでて、人目恥かしやるせなや。

㈡　傾城善の綱

大和屋　甚兵衛
芳澤　あやめ

二上り筒井筒井筒の水は濁らねど、交はせし人は朧月、入る方もなき我が思ひ、只變らじと一筋に、寢ても覺めてもいとしさの、餘りて洩れて憎うなる、墨と硯は濃い仲なれど、人が水さしや薄くなる、しんきえしんき〳〵、水さしや人が、人が水さしや薄くなる、しんきえ、其の一念の附添ひて、蔭に佇みあゝ日向におほひ、くる〳〵くる〳〵〳〵と、苦しき胸のほむらの火、湧きくる水になう消えもせず、かすかに隔つ淺ましや、少しはそれと思ひ知れ、足元はよろ〳〵よろ〳〵〳〵と、弱りはてたる釣瓶の雫、落ちて形はなかりけり。

㈢　文覺上人

竹島　幸左衛門

木調子其の時文覺膝押立て、愧かしながら某は、源氏譜代の侍なり、先年義朝野間の浦にて生害あり、其の首やがて六波羅の、川原にこそは掛けられしを、愚僧ひそかに盜み取り、菩提の道に修行者の、首に掛けたる頭陀袋

あけぬ暮れぬとせし程に、はや三歳の光陰は、矢よりも早き武士の、守りの神ともなし給へと、しやれたる頭蓋を取り出し、佐殿に奉れば、扨ては疑ひあらがねの、土に屍骸は朽つれども、名は末代に有明の、月の都に攻め上り、絕えて久しき白旗を、み山おろしに吹き靡かせ、驕る平家を平けんと、賴朝今は勇まれしが、いや待てしばし難儀あり、院宣令旨なくしては、諸軍の催促あるべからずと、佐殿あぐみはて給ひ、我に賴むと有りし時、それこそ易き事どもと、卽時に津の國經の島、牢の御所にかけつけて、光義卿を賴みつゝ、院宣令旨を請ひうけて、又立ち歸る浦波の〳〵、磯を傳ひ山を越え、蛭が小島になりしかば、院宣の取りいだし、兵衞殿にいたゞかせ、それより義兵を擧げ給ひ、源氏の御代となす事も、徧へに愚僧が恩ならずや、せめて廿日は待ち給へ、鎌倉に馳せ下り、此の一奏をせんまでは、必ず〳〵賴むによな、北條殿と言ひ棄てゝ、衣の裾の高縛げ、破れ笠腰につけ、ちよこ〳〵〳〵走りて出られしが、又立ち歸り文覺は、北條殿に打ちむかひ、これにも承引なきならば、我生きながら魔障と成て、高野粉河金峰山白山立山富士のだけ、此の山々の天狗ども、さつ〳〵と招きよせ、車軸の雨に劍をまぜ、ひさうを非々想天まで叩きあげ、海に浮かまば六代七代八大龍王、山神水神江河の鱗類、八方よりも崇をなさせ、例の天狗の空礫、一時が間に打ちひしぎ、味方のせいうん日輪月輪、じやうふを吹き和らけ〳〵、暫時に本望とけん事、なんの子細のあるべきと、躍り上り跳ね上り、勇みに勇んで申せしは、賴もしきとも中々、申すばかりはなかりける。

㈣　とがし城

竹島　幸左衛門
同　幸重郎

木調子さる間武藏坊熊井太郎、只一筋に思ひ切り、さしも大勢待ちかけし、富樫が城へ入りたるは、人に變りて覺えたり、山伏の法なれば、例時懺法を讀むべきに、武藏何とか思ひけん、高念佛を唱へつゝ、大門よりつつと入る、富樫が城の體を見るに、表の櫓十三ケ所、脇の櫓九所、二重三重櫓を上げ、北の表を見てあれば、鞍置馬の數しらず、それぞと言はゞ引き出さんと、用心嚴しく見えにけり、扨て又後の要害は、表は山高うして、一片の雲の如し、谷深うして飛ぶ鳥だにも翔り難し、山峰一丈さがつて、空壕ほつてうむ〳〵九十九折なる難所なる、東の方のをさきには、川を要害とし、青篠覆み滑かに、足そばだつに便なし、此の關所を越えん事、韓信が術と學び、富樓那の辯にてたばかるとも、扨て中々思ひもよるまじき、されども武藏が智慧の程、百千萬に碎きなば、やはか通らでおくべきか、それにも運命つき弓の、巧みし智略も現れて、さしもの大勢前後左右より取卷かば、陽炎稻妻水の月、無手にはいかで取らるべき、かしこにおつ伏せひつ組んで打取るべし、或は渦卷千騎が中、駈け破りさし通し、十方無盡のすて刀、さつとひゞいては、互に言葉をかけかはし、是ぞ軍の花盛り、吉野龍田の花紅葉、嵐につるゝ青侍、逃ぐる奴原追つさま捨切り、向うてかゝるは空竹割、らんぴらんぐわい虎走り、まくのさうだてさうのこて、蜻蛉返しに水車、磯打つ波のまくり切り、貫き捩首人飛礫、死人の山をつかん事、只とる山の時鳥と、勇みに勇みし有樣は、めいほく太子はく

た王、我が朝にては將門純友、入鹿の荒れしもかくやらんと、恐れぬものこそなかりけり。

㉓四　山居之僧

荒木與次兵衛

歌　歌餘りに山を遠く來て、雲又我が里を埋む、皆これ人間妄執の雲霧の、ひきは返さじ梓弓、安からぬ身の假の世を、思ひ棄つるに身こそやすけれ、我はなまじひに弓馬の家に生れ來て、かごうを捨ててぞもんに入る、月を東に里を見て、岨しき山路なければ、岩根に取りつき〳〵〳〵、苔路を踏んで薪をこり、水音凄く底深く、谷に下りて水掬び、その雪山の昔を問へば、唯一心の置所、背かば正に三惡道は逃るまじ、多き地獄の其の中に無間地獄の苦しみは、ねんねつたる炎の中に、眞逆様に落つる事は三羽の征矢、下より猛火吹き上ぐる、譬へば數千丈の谷よりも、まくりたて〳〵、吹き廻す嵐に等しく、科は上より落つれば、さあ〳〵さつ〳〵と吹き上けて、隙なく苦患を受くる故、無間地獄と名づけたり、あら恐しや〳〵、阿鼻大地獄の苦しみは、鐵石を立つ事一由旬四方にして、劍をひつしと並べ、科ある者を追ひ上し苛責する、罪人科を歎くと雖も、叶はぬは地獄の習ひにて、岩石背に結ひつけられ、劍の峰より突落され、骨は微塵に碎かれて、歎き悲しむあさましや、苦樂の境は說くも說かれず言ふも言はれず、風吹けば吹け我が庵の、佛の照らす絕えぬ燈火。

㉓五　名馬揃

竹島幸十郎

本調子あつぱれ御馬ざふらふや、よき馬の吉相や、をつさまむかうよこはたばり、肉付骨節よめのふし、おゝ作りつけたる如くなり、尾は千反の布をはへて、百丈の瀧の落つるに異ならず、右の眼左の眼、振分髪にちらり〳〵ちらと〳〵鞭はなに〳〵紫竹寒竹唐竹若竹、本から末から根から葉から、竹のきり〳〵なきり〳〵きんきりよの、やれ溜り水、澄まず濁らず出ず入らず、人の心もそれによそへて、何も柳にさらり〳〵ともやらせて、輕いがよござんす、重いはづぶりづぶ〳〵とも、沈んださ何がさ。

㉓六　柴刈風流

上村今吉
袖島市彌

本調子山襤の薪を折て數々の、思ふまゝには言はれぬや、殊更風を厭ふなる、柴に櫻を折り添へて、柴かる女の賤しき身にも〳〵、沈や麝香は持たねども、匂うて來るは焚き物、ちやうりやうふりやう、ひやらにひやらろ、ひやらろにるろう、るりちやるろ、戀といへる曲者〳〵かんな、身はやつれそろ、憎や〳〵辛や怨めしや、月には雲に花には嵐、嵐つれなやよぎて吹け、忍ぶ夜の嵐、さても〳〵いや〳〵、山田におりし早乙女の、しかも近江のなりよい笠を、しやんと着ないて拍子を揃へ三下り〳〵田植ゑるは面白いが、ぐる〳〵まはりがうかない、さあうかない、十七八は寢ごいもの、梅の木のさがりの枝を枕に寢りたか、寢り申せさあいよ〳〵〳〵え、このえ〳〵、しよんぼり〳〵と植ゑた袖、よその袂は田植に濡るゝ、誰故濡るゝ我が袂打ち眺め、あゝ賤の女の重荷の柴も苦にやならぬ、歩むほどなき道すがら、とある所に著きにけり、

㉓七　近江八景

水木辰之助

本調子舟を出しやらば夜深に出しやれ、えい〳〵帆影見ゆれば懐しや、戀にはのんえい、それ若枝もいよえい、えいや〳〵と入るや矢走の渡し舟、波は舳板を叩き上け、叩く白波荒男波、靜かに漕けやそろ〳〵押せよ、急いで漕けや、さつ〳〵と押せよ、浮きぬ沈みぬ行く舟の、汀を見れば瀨田の橋、漁村の夕照まのあたり、往來も絕えぬ旅人の、上れば下る、間の土山雨が降る、謠ふ小歌のから尻に、乘り打ちさせぬ關所なり、足も止まらず行く舟の、次第々々にそのさきは、如何なる所と尋ぬれば、あれは堅田の落雁ぞや、いざや名所を語るべし、下りてしばし濱遊び、上らせ給へ人々よ、入江々々の蘆の葉に、そよろ〳〵と吹き來る風は、夏の導か凉しさよ三下り〳〵磯に下りゐる雁金の、己が友呼び遊ぶにぞ、ねらひより追うて廻れば、はつと立つや、ひら〳〵〳〵と群れゐる雲に、竿に成つて通る、後なが先へ、先なが後なら、笄取らしよ〳〵、是ぞ平沙の落雁と、語りて舟に乘り移る。

なう如何に船頭殿、此方に高き御山は、いかなる所なりけるぞ、あれこそ比良の暮雪とて、これよりは冬景色、峰に降り積む白雪の、ちらり〳〵と降り來る雪に、四方のな梢もなうよ白妙に、枝も撓むやしつはりと、積れる道を踏み迷ふ、木樵山樵柴刈が、笠も薪も埋れて、寒さうにござる、火桶遣りたや炭添へて〳〵、頃も師走の暮なれば、穂長譲葉門松を、召せ〳〵召され候へと、商ふ風情實に誠、これ江天の暮雪なり、向ふを見れば、堅田の浦の蜑小舟、釣して歸る有樣を、見るに我が身も營みの、釣の糸さへしなへてもつれて、竿持たずに引くは〳〵〳〵、引いてしやくる所を、釣つた所の面白や、入日の影ともろともに、風に任せて帆を擧ぐる、この召されたる舟こそは、遠浦の歸帆もまのあたり、あれ唐崎の一つ松木調子ｳﾁ老若貴賤布引の、引分けられぬ宮詣、如何なる上手の筆なりとも、是には如何でか勝るべき、日もはや西に入相の、提灯とぼす小夜嵐、吹き來る雲に雨起り、村雨頻りに降り來れば、濡れに濡れたる形裝も、しつぽりしつたり、わにの岬に舟止めて、苫洩る雫もろともに、涙で明かす舟のうち、これや誠に瀟湘の、夜の雨とも言ひつべし、やう〳〵晴れる雲切れに、苦押し除けて見上ぐれば、あれ石山の秋の月、湖水に映り明らけき、須磨も明石もよそならず、これや誠に洞庭の秋の月、此處に移して湖の、更くるも知らず眺め入る、更けゆく鐘の音きけば、飽かぬ別れの鳥は物かは、鳥も鳴き鐘も聞ゆる三井寺の、時を違へず撞く數は、はや明六つの明け渡る、東近江や西近江、大津の町もとく起きて、己がさま〴〵手業する、是ぞ山市の晴嵐と、夢の樣なる其の内に、四季折々の戯れを、今目の前に見する事、これ龍神の惠みなり。

㊄　狂亂

荻野澤之丞
西國兵五郎

木調子狂人に物問はう〳〵、薄化粧に柳顏、髪はおどろに亂したれども、花紫の由緒あり、風情ゆかしき物狂、如何なる人にてましますぞ、問うて何しよ、お問やつて何しよ、我は親より子故に迷ふ、まだ父知らぬ撫子の、花は根に歸る〳〵雁がね、それは越路我は又、東から出て、焦れ〳〵、焦るゝ子故に狂ふがをかしいか、なんのをかしかろ、をかしゆはないが、我も御身に逢ひたうて見たうて、そつく〳〵と、尋ねじ國は何處〳〵、せんやうだうに山陽道、音戸の瀬門に播磨灘、舟路遙かに紀伊の路や、玉津島吹上、かいつくばうてひつつくばうて、尋ね〳〵歩いた、我らも狂ひ廻つた、いとし我が子の目に筑波嶺の、みねど知らねど筑紫の果々迄、踊り出で走り出で、國々里々伊勢の津尾張の津、近江に大津草津今津海津鹽津、とつ〳〵〳〵攝津の國には大物の、尼が崎から尼になれと文よこいた、彼方此方と狂ひ廻りて、人目も知らで尋ぬる我を、なんだろつよのひこたろつよの、そのよな事聞きや、きん〳〵氣が悪い、りんとはねられ、しやんとゆてたもれ、曉の烏はん鳴かいで、垂木の端をしつかりてう、えいやつと踏まいた名殘、なさけなの世の中や。

㊅　三つの車

大和屋甚兵衛
淺尾重次郎
筒井吉十郎

二上り三つの車に法の道、火宅の門をや出でぬらん、夢か現か朧夜の、月毛の駒に片手綱、引き止むれば春の雪、解けて亂れし我が思ひ、あまりて憎い此の人を、誰に添はせん嫉ましや、袖に流るゝ血の涙、色と情のふた思ひ、深き心は常々に、語り明かせし戀草の、萠え出で初めし面影に、縋りつけば八重櫻、風に亂れし亂髪、ゆひがひなくも殺されて、身は仇し野の露霜と、消えにし事の恨めしと、泣くより外の事ぞなき、咲いた櫻になぜ駒繋ぐよの、えいさ、駒が勇めば花が散る、勇めば駒がよの、えいさ、駒が勇めば花が散る、あゝあさましや堪へがたや、煩惱邪淫の身の苦しみは、鐵石立つ事一由旬、仇と情の心の鬼、上れと責むる劍の山、くるり〳〵くる〳〵と、追立てらるれば岩根に取付き、〳〵上りて見れば、下より猛火吹き上る、こは情なや悲しやな、助け給へと夕暮の、月は霞にかき曇り、聲ばかりして失せにけり。

㊆　時雨の松

大和屋甚兵衛
芳澤あやめ

二上り同じ浮世にかけて賴まん常陸帶、取交したる二世の帶、三重に廻るも戀の瘦、身は陽炎の有るか無きかに捨

てられて、泪の時雨松が枝に、見えつ隠れつ戀の闘、迷ひ〳〵歩くも誰ゆゑぞ。逢はんと思ふ我が男、人に逢はれて愧かしや、戀に痩せたる二重の帯三重廻る、二重の帯が、二重の帯が三重廻る、さりとは交す誓紙の血汐の文字、猛火と成て、思ひの絆切つても切れず、離れもやらぬ我が思ひ、しめつゆるめつ、ゆるめつしめつ、二人寢の夢ばかりなる手枕に、伏して形はなかりけり。

㊃ 思ひの繪姿

賀茂川野鹽
山下才三郎
高島尾上

三下り世の中の人の心は、移ろひ易き物と知れ、君と我とが長枕、夜毎に交す睦言の、人こそ知らね神かけて、あしき心はあゝしんき、ないにてんと怨めしや、あゝまゝならぬ君二上り〽様はな久しやいつ逢うたまゝぞ、おれもな忘れた、逢うた夜さを忘れた、おれも〳〵な忘れた、逢うた夜さを、思ひ出づれば懐かしや、まだ肌馴れし移香の、二人寢顔のつや〳〵〳〵と、撫子今は答へかね、君の御禁しかと取り、これな怨めしや、我に死ねとの御事か、死ねなら〳〵、いつそ死ねなら死にましよか、彼方へ靡けば此方の怨み、思ひと戀と、車の〳〵兩の輪になる、くる〳〵〳〵寢もせで迷うた、やんれありつる姿は繪にかける、我は轉寢うつゝたゝよの。

㊂ ふみこと葉

高島尾上

二上り一筆と書き初むるは懐かしさのまゝ、問はせ参らせゐべくゐ、別れより程あらずゐへど、思ひ寢にする獨り寢は、心も澄みて目も冴えて、煙草戀草伽となる、閨の內、變る色なく御暮し、やがて逢はうぞや語ろぞや、筆に任せぬ物思ひ、只逢ひまして〳〵、殘る言の葉かへすがき。

㊁ 定家怨霊

高島尾上
竹中藤三

三下り淺ましや涙は生死の海の波、死苦みを受け重ね、暗闇より暗きに赴く恩愛の、薄き契りの袂には、涙を包む春雨に、つほめる花の水離れ、離れもやらね愛念の、添寢の床に夢もなく、二人が中の涙川、繋がぬ舟は止まれども、誰か止まる人もないぞよ、夢の世に假寢の母が手枕よ、乳房をしほり獨り詫ちし有樣は、見るに袂も濡れぬべし、又起き上りて走り廻りてつまに取りつき、なう悲しや、もはや別れのあれ堪へがたや、刃の罪に修羅の太鼓、さらばと言へばしばし止むる、袖ふり離せば目にこそ見えね、踏む足許は猛火の煙、こは悲しやと又行先も、炎の煙にむせんで恐ろしや、我は邪淫の流れの憂き身、汲み流す酒は三途の大河となり、起請神罰冥罰當つて此の身を碎く、弔ひ給へお僧さま。

㊃ 地搗踊

山下座

二上りやれ追ひかけ囃さぬか、さア〳〵さ追ひかけ中の綱、締めて見よ、よいやさ、やれ我が戀は〳〵、細谷川の丸木橋、踏みかへされては、濡るゝんるゝ袖かや、追ひかけ中の綱、締めてよ、揃うたやれ中の綱はえ、えや〳〵えや〳〵、このさんさのえ。

〽鳥に恨みは逢ふ夜の時よ、歌へ今宵の獨り寢に、さんよえ〳〵。

〽あのや小山に戀風が吹くとの、身をも投けかけ搖らば落ちよかの、さてもつれなのあの君や、ふるやこ妻はかはいよえ、えいや〳〵えいやえ、このやこのさんのえ。

〽難波入江の米舟を見たか、えいとんな、えいえいえ、えいとんな、あゝ播磨の米が千石、淡路の米が千石萬石、舟方が納めた、月の夜走りにや、下の〳〵下の關の睦言も忘れた、あゝえいとんな、えいえいえい、えいとんな、開いてさ、追風でさ、おも梶とり梶難波入江の繁昌え。

有馬の藤狐會右水木辰之介所作、松の葉に見えたり、此の集にのするにおよばず。

寶永庚寅七年九月吉祥日

書林　ゑづゝや庄兵衛　板
　　萬木治兵衛　行

第五新投節

三味線
間之手付

新なげぶし

並ニかゝぶし入
付々霧あいの山

〽月やあらんと。かこちしなア君も 間の手 今は昔。になア業。平の やん 間の手 昔になア今は 間の手 今は昔。になア業。平の やん 間の手

〽辛き人には。憂き戀なアさせて 間の手 思ひ知らす。るなア神。もがな やん 間の手 知らするなア思ひ 間の手 思ひ知らす。るなア神。もがな やん 間の手

〽昔戀しや。見染めてなア つらや 間の手 今の思ひ。はなア人。知れぬやん 間の手 思ひはなア 今の 間の手 今の思ひ。はなア人。知れぬやん 間の手

〽思ひかけたは。無下にはなア せまい 間の手 石に立つ矢。もなアある。ものをやん 間の手 立つ矢もなア 石に 間の手 石に立つ矢。もなアある。ものをやん 間の手

〽逢ふ夜短し。逢はぬ夜なア長し 間の手 心からと。はなア言ひ。ながらやん 間の手 からと。はなア心 間の子 心から。とはなア言ひ。ながらやん 間の手

〽明けもせぬ夜に。はや君なア返す 間の手 狐はめが。ななアあの。鳥をやん 間の手 はめがななア狐 間の手 狐はめが。ななあの。鳥をやん 間の手

〽鳥に恨みは。逢ふ夜のなア事よ 間の手 歌へ今宵。のなア獨り。寢にやん 間の手 今宵のなア歌へ 間の手 歌へ今宵。のなア獨り。寢にやん 間の手

〽我が思ひは。磐手のなア山の 間の手 谷の埋れ。木なア朽ち。果つるやん 間の手 埋れ木なア谷の 間の手 谷の埋れ。木なア朽ち。果つるやん 間の手

〽行くも歸るも。忍のなア亂れ 間の手 限り知られ。ぬなア我が。思ひやん 間の手 知られぬなア限り 間の手 限り知られ。ぬなア我が。思ひやん 間の手

〽別れゐる身は。夢こそなア頼め 間の手 うつな妻戸。のなア夜。の雨やん 間の手 妻戸のなア うつな 間の手 うつな妻戸。のなア夜。の雨やん 間の手

〽思ひ寢覺めの。そのあかなアつきは 間の手 鳥もはらは。らなア我も泣くやん 間の手 はら〳〵なア鳥も 間の手 鳥もはらは。らなア我。も泣くやん 間の手

〽亂れ亂るゝ。あの黑なア髮は 間の手 わきていはれ。ぬなア我が。思ひやん 間の手 いはれぬなア わきて 間の手 わきていはれ。ぬなア我が。思ひやん 間の手

〽思ひ染めたよ。濃きくれなアなゐの 間の手 袖は血潮。のなアなみ。だかなやん 間の手 血潮のなア袖は 間の手 袖は血潮。のなアなみ。だかなやん 間の手

〽見たぞ八幡。後ほどなア御見 間の手 されど此の身。はなア籠。の鳥やん 間の手 此の身はなアされど 間の手 されどの此身。はなア籠。の鳥やん 間の手

〽戀はせまじや。貌はなア窶れ 間の手 人の見る目。もなア恥づかしややん 間の手 見る目もなア人の 間の手 人の見る目。もなア恥づ。かしややん 間の手

〽怨みながらも。またうちなア眺む 間の手 月は由緣。かなア憂き。人のやん 間の手 由緣かなア月は 間の手 月は由緣。かなア憂き。人のやん 間の手

〽起きも寢もせで。在られぬなア時は 間の手 涙ほかに。はなア文。ばかりやん 間の手 ほかにはなア涙 間の手 涙ほかに。はなア文。ばかりやん 間の手

〽秋の竟夜。隈なきなア月を 間の手 獨り見る夜。はなア怨。めしややん 間の手 見る夜。はなア獨り 間の手 獨り見る夜。はなア怨。めしややん 間の手

繁き戀路の。その道なア芝に［間の手］とめて宿貸。せなア
海人。小船ゃん［間の手］宿貸せなアとめて［間の手］とめて宿貸。
せなア海人。小船
ゃん［間の手］
初音ゆかしや。
身はほとなア
す［間の手］八聲諸と。
もなア泣き。明かす
ゃん［間の手］諸共なア
八聲［間の手］八聲諸
と。もなア泣き明か
すゃん［間の手］
徒な契りに。浮名をなア立ちて［間の手］人目恥づか。し
なア今。暫しゃん［間の手］恥づかしなア人目［間の手］人目恥づ
かしなア今。暫しゃん［間の手］
思ひ遣瀬の。身は捨なア小舟［間の手］せめて宿貸。せなア
漕ぎ。とめてゃん
［間の手］宿貸せなア
せめて［間の手］せめ
て宿貸。せなア漕ぎ
とめてゃん［間の手］
何の因果に。山
谷のなアすまひ
［間の手］消えて曲
輪。になア隅田川
ゃん［間の手］曲輪に
なア消えて［間の手］消えて曲輪。になア隅田川ゃん［間の手］
うき身恨めし。慣れずばなア か程［間の手］物は思はじ

なアさり。とてはゃん［間の手］思はじなア物は［間の手］物は思
はゞじなアさり。とてはゃん［間の手］
月は山谷の。西へもなア入るが［間の手］我は夫なき
なア床。に入るゃん［間の手］夫なきなア我は［間の手］我は夫な。
きなア床。に入るゃん［間の手］
幼けれども。山路のなア蔦は［間の手］君が小褄。になア這
へ。かゝるゃん［間の手］小褄になア君が［間の手］君が小褄。
になア這へ。かゝるゃん［間の手］
辛きうき世に。存へなアあるも［間の手］一つ思ひ。のなア
有る。故にゃん［間の手］思ひのなア一つ［間の手］一つ思ひ。の
なア有る。故にゃん［間の手］
哀れなりけり。親はらなアからの［間の手］爲に沈みゝし
なア戀。の淵ゃん［間の手］沈みしなア爲に［間の手］爲に沈み。
しなア戀。の淵ゃん［間の手］
怨みながらも。又なつなアかしや［間の手］辛き言葉。のなア末。迄もゃん［間の手］言葉のなア辛き［間の手］辛き言葉。のなア末。迄もゃん［間の手］
君と諸共。死に度やなア我は［間の子］命ありて。もなア添は。ぬものゃん［間の手］ありてもなア命［間の子］命ありて。もなア添はゞぬものゃん［間の手］
夢に見てだに。別れはなア憂いよ［間の手］實の時に。はなア如何。にせんゃん［間の手］時にはなア實の［間の手］實の時に。はなア如何。にせんゃん［間の手］
わんざくれ〳〵。通ひてなア來るも［間の手］命一つ。のなア徒。者よゃん［間の手］一つのなア命［間の手］命一つ。のなア徒。者よゃん［間の手］
立つる錦木。甲斐なくなア朽ちて［間の手］添はで年經。るなア身ぞ。辛きゃん［間の手］年經るなア添はで［間の手］添は

で年經。るなァ身ぞ。辛きゃん 間の手
紅葉ふみ分け。奥山なァ見れば 間の手 鹿訪。れてなァ秋。
を知るゃん 間の手
訪れなァて鹿 間の手
鹿訪。れてなァ秋。
を知るゃん 間の手
恨あれ共。語り
はなァせまい 間の手
若しも緣あ。りなァ
添は。ん時ゃん
間の手 緣ありなァ若
しも 間の手 若しも
緣ありなァ添は。ん時ゃん 間の手
濡ぐまいもの。形見のなァ小袖 間の手 慣れし香ひ。の

なァ散る。ものをゃん 間の手 香ひのなァ慣れし 間の手 慣れ
し香ひ。のなァ散る。ものをゃん 間の手
外の時雨は。皆
我かなァ涙 間の手
心からと。はなァ
思。へどもゃん
間の手 からとは
なァ心 間の手 心か
らと。はなァ思へ。
どもゃん 間の手
朝の歸りに。君
にはなァ別れ 間の手
床は涙。でなァ浮く。ばかりゃん 間の手
床は涙。でなァ浮く。ばかりゃん 間の手
逢へば思ひの。せき來るなァ故か 間の手 何とばかり。
のなァ膝。枕ゃん 間の手 ばかりのなァ何と 間の手 何とばか
り。のなァ膝。枕ゃん 間の手
君の見るべき。文ぞとなァ知れば 間の手 我が身なから。
もなァ恥づ。かしやゃん 間の手 ながらもなァ我が身
我が身なから。もなァ恥づ。かしやゃん 間の手
風に任する。花ぢやとなァ儘よ 間の手 せめて一夜。は
なァとま。れかしゃん 間の手 一夜はなァせめて 間の手 せめ
て一夜。はなァとま。れかしゃん 間の手
君の姿を。譬へになァ取れば 間の手 花や紅葉。はなァ
ならぬゃん 間の手 紅葉はなァ花や 間の手 花や紅葉。はなァ
數。ならぬゃん 間の手
月と入ろとは。皆いつなァわりよ 間の手 君と入ろや。れ
(は)切ら。んなァ我が。戀はゃん 間の手
雨の降る夜は。一入なァゆかし 間の手 いつに疎か。は

ろや。れなァ山。の端へゃん 間の手
君を思ひに。うき身をなァ焦がす 間の手 我は澤邊。の
なァほた。るかなゃん 間の手 澤邊のなァ我は 間の手 我は澤
邊。のなァほた。るかなゃん 間の手
我が死したら。墓に捨てなァ置けよ 間の手 若しも我が
き。みのなァ南無。の一聲ゃん 間の手 我が君のなァ若しも
間の子 若しも我がき。みのなァ南無。の一聲ゃん 間の手
初音ゆかしや。まだうちなァ解けぬ 間の手 君は彌生。
のなァほと。とぎすゃん 間の手 彌生のなァ君は 間の手 君は
彌生。のなァほと。とぎすゃん 間の手
思ひ切れとは。氣儘のなァうき世 間の手 誰かは切ら。
んなァ我が。戀はゃん 間の手 切らんなァ誰かは 間の手 誰か
(は)切ら。んなァ我が。戀はゃん 間の手
雨の降る夜は。一入なァゆかし 間の手 いつに疎か。は

なァ無け。れ上どもゃん 間の手 疎かはなァいつに 間の手 いつに疎か。なァは無け。れ上どもゃん 間の手

上ふし 君の心に。吹く秋 なァ 下風は 間の手 賤が身にしゝむなァ思ひ上かなゃん 間の手 賤にしむなァ身が 間の手 賤が身にし。むなァ思ひ。上かなゃん 間の手

島原加賀節

辛き別れと思ふも知らで。いつも上ながらの鳥の聲。とは思へども告げ渡る。鳥も勤めの身ぢやほどに。

さ夜ふけがたに君待ちうけて。語る間も上なき短夜に。はや明け方の響く音は。別れの鐘か恨めしや。

君を蟋蟀名を松虫に。姿玉虫夜もすがら。音をこそなかね憂き勤め。兎角つ上らいは轡虫。

濡れて疎かはなきものを。まして上勤めの身ぢやものを。とは思へども我が心。濡れぬ昔がましぢやもの。

光源氏の思ひの螢。包むともなき契かな。上その玉葛たまさかに。包むともなき契かな。

阿波の鳴門に身は沈むとも。君の仰せは背くまい。とは思へども世の中の。人の心の飛鳥川。

頼むまいぞのつらきの君を。仰せ〳〵に變る身を。とは思へ共是もまた。君の情に戯れて。

いとど淋しき寢覺の床に。涙な添へそ時鳥。昔を忍ぶ我が胸に。涙な添へそ時鳥。

勤めつれなく逢瀬も絶えて。今はたより の文ばかり（以下闕）。

夕霧間の山並ニ替り間の山節

花は散りても。春咲きて。鳥はな古巣に歸れども。行きてな歸らぬ死出の道。間の手

夕べ朝の。鐘の聲。寂滅。爲樂と響けども。聞きてな驚く人もなし。間の手

野邊よりあなたの。友とては。胎藏。界の曼荼羅と。血脈。一つに數珠一連。是かな冥途の友となる。間の手

夕 朝の。三味の聲。唐。和國の連彈きを。聞きてな勇まぬ人もなし。間の手

春は吉野に。花咲きて。薫なゆかしく思へども。行きてな止まらぬ戀の道。間の手

野邊より揚屋を。見渡せば。小太夫な高橋金太夫。野風なおとめの河内殿。投節。一つに迷ひ來て。是がな戀路の種となる。間の手

九月吉日

新投節 終

第六　大阪音頭

六 大阪音頭

目次

一 大工惣兵衛 油屋おたね はやりおんど
二 阿波の海賊甚九ぶし
三 大阪廿二社廻 上
四 浪花廿二社巡 下
五 おさん茂兵衛
六 櫻づくし
七 那須の與市
八 伊勢參宮 熊野ぶし
九 山田のつゆ
一〇 盃まんざい
一一 花角力
一二 ゑびす笹
一三 魚づくし
一四 紙づくし
一五 五輪くどき
一六 謡づくし
一七 牛兵衛 青物づくし
一八 闇の夜のからす
一九 櫻づくし
二〇 京都名所づくし

一 大工惣兵衛 油屋おたね はやりおんど ひやうごくどき くまのぶし

天滿橋詰油屋咄、家の御普請柱の根つぎ、一寸俎しらけるのまで、惣兵衛殿より外にはほんに、雇ひませんと御縁の後は、惣兵衛々々々と家内が賞める、内の娘にお種といふが、杉の丸太かほつそりすわり、色と愛とに日の出の娘、それに惣兵衛がうち込む繋は、間がな隙がな口説いてみんと、思ふ折ふしなう惣兵衛さん、後の休みに此の爪錐を、利いでやいのと笑をば含む、笑ふ笑顏に惣兵衛がとんと、穴のあく程顏見つめきり、やはりそろ〳〵揉手をなして、煙草片手にとん〳〵口説く、時にお種が申せしやうは、お前きのみかわしや眞實ぢや、たとへ搾木でしめ合ふとても、憎いなぞ〳〵差金ほども、乾く間もなき墨壺の底、締めつ締められそのね油が、積り〳〵てお種がおなか、人の目に立ちや親々たちは、誰が細工と吟味をすれば、これは此の頃惣兵衛さんの、器用な細工とあら〳〵かしく。

二 阿波海賊甚九ぶし ひやうごくどき はやりおんど

濡手で捉む、阿波の海賊彼の十郎兵衛は、慾のいり譯探して見れば、自體心が惡所に御座る、庄屋勤めて居るとはいへど、奢り者なり放埒者で、見掛けばかりで內はすり切りよ、されば手下に惣兵衛というて、大阪通ひの船乘なるが、それが女房は阿波一國に、その名ふれたるよい女房と、誰も思ひはあの內儀なら、如何なしんども構はずにせう、これに十郎兵衛思ひをかけて、大阪通ひのその留守の間に、折もよしとて彼の十郎兵衛は、そつと遊びに行き合ひければ、茶をば內儀は沸かして居るが、傍へそろ〳〵寢轉びかゝり、咽喉も渴かぬ茶をがぶ〳〵と、飲むが汐なり咄の種と、何どお內儀嘸留守の間に、枕一つで淋しはないか、流石內儀は名人者で、活けず殺さずあへんどにのり、不斷一つに寢もしませねど、留守も思へば淋しさどうも、言はれませぬとほやりと笑ひ、時に十郎兵衛今宵の首尾は、もはや三國一ないことと、知らで惚れたと思ひの底を、とんとうち明け口說けば內

儀、ほんに今宵の冗談咄、人が言ふとて吟味も共に、意見しさうな旦那ン殿が、わしらづれなる女房を捉へ、譯も無い事あら厭らしや、たとへ此樣金銀瑠璃で、のべた小袖のなりからわしを、目をば亂しておかんすとても、不甲斐なけれど惣兵衛と言うて、りんと主ある此の身ぢや者が、何ほ此方の仰せぢやとても、そんな見舞はいぢやほんぢや、そこで十郎兵衛恥かゝされて、何と言はうも泣く〳〵立つて、去ぬる出しなのその惡口に、器量よいとて根性か人か、思ひ知らしよぞひきさかれめと、ぶるしやり去んだはな汐がないさ。

三　大阪廿二社廻　上　はやりおんど　ひやうごくどき、くまのぶし

されば名高き浪花の宮居、二十二社あるその御神の、道の案内手に手をとりて、行けば川崎第一番に、是は東照八幡樣よ、詣る人々武家町人の、我も我もと群集の中を分けて二番は天滿の社、寺屋子供がお百度參り、願も成就菊屋の飴を、買うて戻りに植木屋團子、わしは旦那の第三番は、土產堀河お蛭子拜し、次の四番は北野に於て是も本社は天神樣よ、五番々々とうつ拍手は、かいてうもてくる神明の社、次の六番曾根崎に置き、女名前はならぬと言へど、命の名題お初が森よ、孫が土產は鐵槌煎餅、行くなはまるなこつぼり町か、蜆川をば南へ越えて、人も寄り來る相場の濱か、心浮き〳〵大江橋越えて、淀屋橋をば扨て南へと、行けば七番御靈樣拜し、津村百軒御堂を眺め、羅生門にて功名ありし、筋は渡邊次八番は、是は、座摩宮浪花の社、前に築山紅杜鵑の盛り、それをうち過ぎ九番の稻荷、これは本社が仁德樣よ。緣も長堀うち渡りつゝ、位十番三津八幡宮、參り下向も花やかにさ。引

四　浪花廿二社巡　下　はやりおんど　ひやうごくどき、くまのふし

行けば程なく色夷橋、戀の手習是いろは茶屋、芝居數々さてこれとかや、やがて向ふに難波の畠、あれがお藏か十一番に、何を廣田の明神樣よ、十二番には商賣神の、耳は遠ても願へば聞きやる、合邦出てから十三番は、上り安居の天神樣よ、十四番目は左手に高き、勝鬘坂なる毘沙門樣よ、四天王寺の御門の中に、第も十五で十五社の宮、昔姉さん今馬場先の、孫が手を引き十六番は、是は北向八幡樣よ、第十七番生玉本社、手鞠祭文輕口咄、菊や牡丹やよい作り花、角は金子の伊賀饅頭よ、坂を東へ十八番に、此處へ高津の仁德天皇、坂の上から西をば見れば、連れは先にてはや松屋町、第も十九が是、天狗神子かやつい一飛びに、二十番には繪馬堂の舞臺、子供集めてよい森の宮、あの子抱きたや十七八と、二十一番玉造にて、是は稻荷か浪花の社、二十二番は內平野町、神明樣にて神樂をあげてヨイトナア。

五　おさん茂兵衛　色里はやりうた　くまのぶし

戀といふ字は迷ひの淵よ、こゝと積りて大經師おさん、ありし昔のその有樣を、さらば曆の言葉で申そ、自體おさんは都の町で、器量自慢で情も深く、如何な奧方大明日の、御前樣にも恥づかしやないが、如何な緣かや以春が方へ、鬼宿日なり嫁取よしと、親に委せて來ごとは來たが、夫の以春は心に染まず、兎角男の間日をば盜み、手代茂兵衛とちん〳〵血忌み、戀の齒固め藏開きよし、閨の中こそ黑日となして、待つぞ必ず着衣始よし、やがて彼岸の入にもならば、お寺參りにやまた逢ひませう、何と茂兵衛殿どう思はしやる、若しも此の事十方暮と、知れて浮名の辰の日ならば、遂に以春も聞こ往亡日、兎角こちから暇とる思案、八十八夜も過ぎたる後は、梅雨の入かや土用の業か、月の障りか、月食などと、作り病で唯ぶら〳〵と、二百十日も寢て居るならば、如何な男もはや秋風で、兎角復日去られて後に、二人歲德惠方棚吊りて、家建竈塗味噌漬もよし、世帶しましよと約束したが、男騙したその金神が、鬼門崇りか甲斐現れて、浮名天一天上までも、ひかれ出づれば都の町で、知るも知らぬも皆節分に、午乘初めぢやとな名の立つにさ。

六　櫻づくし　ひやうごくどき　くまのぶし

されば世上の、のせて歌ふやほのはやり文、戀の金箱さる分限者の、ずんど大切のその御寮人、內の子飼の金松といふが、負うて退いたの傾けて去たの、言ふが眞實か

其の娘子の、姿伽羅きし櫻にとりて、名はお花とイヨ申すなり、自髷金松角前髪の、小姓上りの若木の櫻、誰も見とれる稚兒櫻ぢやが、何時の緋櫻二人が仲は、よれによれたる糸櫻なり、彼岸櫻の僻事なれど、淺葱櫻が後には一重、二重櫻と契を重ね、側に附き添ふ姥櫻さへ、知らぬ佛の普賢象櫻、或る夜座敷の庭櫻にて、聞けばお前は來る花の春、嫁入なさるゝィヨ筈と聞く、あゝら恨めし徒花折つて、胸を焦すや鹽竈櫻、もはやこれ迄緣薄櫻、髪を下して墨染櫻、お江戸櫻か山櫻へも、ひゝや籠りて佛に花と、言へばお花は袖引き止めて、扨ても其方は花車ほど、心にしやるさらゝわしは、外に花やる心は無いに、一層此處をば連立ち退きやと、言へど金松虎の尾櫻、龍の髭ふるィヨ心地して、都方へと散る櫻花。

七　那須の與市

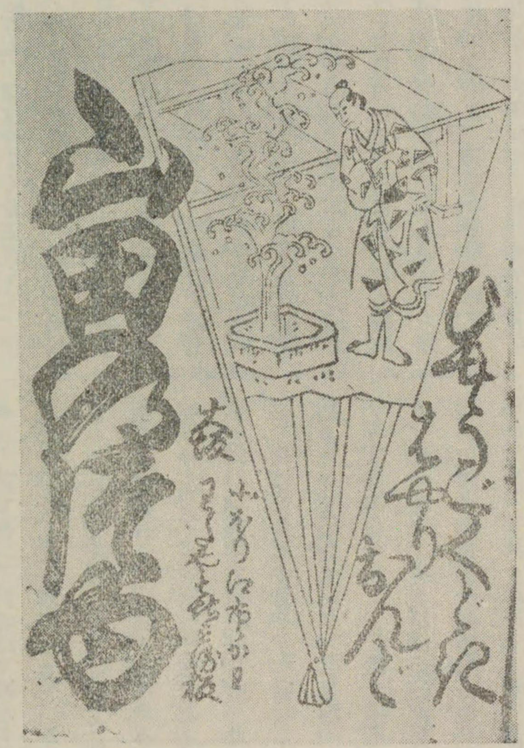
其の名ふれたる下野の國、那須の與市が譽の次第、なりは小兵に御座れども、引積るその年十九歳にて、矢をば一手に名を萬天に、上し給ひし所は何處、四國讃岐の屋島の磯で、源氏平家の御戰ひに、平家方より沖なる舟に、的に扇を立てたる時に、九郎判官此の由御覽じ、那須の與市を御前に召され、與市御前に相つめければ、時に判官曰ふやうは、沖に立ちたるあの扇をば、矢頃遠くと射落して、敵や味方に見物させよ、畏つたと御受けを申し、御前をこそは立ちにけれ、與市その日の扮裝見れば、褐赤地の錦を召され、白糸威の鎧着て、弓は重籐切斑の矢をば、柱肩裾襟かき合せ、黒駒ひき寄せゆらりと乘りて、小松原より波打際へ、しんづゝと歩ませければ、風は烈しく波荒くして、的の扇も定まらざれば、射つべきやうは無かりけり、與市暫らく眼をふさぎ、南無や八幡那須明神と、力合してあの扇をば、射させ給へと觀念深き、れいの鏑矢うち番ひつゝ、切つて放せば扇の的の要際をばふつつと射切り、海に沈めば扇の的は、揉みに揉まれて海へぞ落つる、射たり與市と賞めにける、沖の平家は舷叩く、陸の源氏は箙を鳴らし、何れ功名は品々あれど、戰半ばの見物事は、那須の功名はなよいものぢや。

八　伊勢參宮熊野ぶし

お伊勢參りは皆駕拔けよ、拔けて御座らばはせごへ御座れ、大阪出てから黒門口よ、深江村にて菅笠買うて、三里歩めば連れ松原よ、焦れ登るや暗がり峠、手引き袖引き追分も過ぎ、尼ケ辻かやはや奈良へ行き、是は猿澤春日の本社、三笠山かや大佛殿の、實な女郎衆に帶解地藏、在原寺のな一本薄、三里歩めば是丹波市、三輪の女郎衆に袖引かれつゝ、山を本社と拜んで通る、長谷で必ず松屋が留り、とろり〳〵と臙脂鐵漿つけて、男蕩しの化粧坂越えて、負うて登ろか萩原の宿、雨は降らねど赤埴上り、股のまたぢやが乘る氣はないか、馬に乘ろにも鞍取坂よ、裸馬には乘らぬがましよ、乘らざなるまい足うち痛や、そろり〳〵とかい坂で御座る、御座りやひつ坂下りは樂な、そなた樂なかわしや草臥れた、晩の留りは田口か多氣か、石の不動坂山がす峠、名所殘すな是屏風岩、月は十五夜扨て又花は、櫻峠か一本松よ、力餅なら大石へ御座れ、つるの渡しも首尾よく渡り、身をば清めのあれ宮川よ、伊勢の山田の振袖樣が、五ちん〳〵お手うちがひて、宮廻りして、やれ戻りにも御緣御座らばまた間の山、お杉お玉は皆伊勢女郎衆、心やらずと錢ならやりやれ、貰て喜ぶ子供の踊、編木すり寄り唯とろ〳〵と、袖にすがりて放さぬ比丘尼、つかみづらなる彌宜衆は內宮、外宮合せて百二十末社、凡そ世界に三千餘社の、神の中でも大神宮とて、諸人尊み歩みを運び、天の岩戸へ燈明上げて、下り朝熊へ三里の道よ、下馬で暑けりや水餅食やれ、朝熊本堂虛空藏菩薩、此處で煙草をのむ其の時の、景は千金萬金丹を、本家なるぞや買ふ氣はないか、廻り〳〵て追分も過ぎ、二見浦へは三里の道よ、そろり〳〵と刻みにかけて、子供土産に錢貝求め、行けば程なく二見の浦よ、身をば清めの汐垢離を取り、遙か向ふの霞の中に、海に獅子岩飛岩もあり、烏帽子岩かや緒を括り島、所々の神々禮拜しまひ、足も輕々下向の空は、都方ぞやァゆるりとやれさ。

九　山田のつゆ

緣は不思議なものにて御座る、父は横萩豐成公よ、姉は當麻の中將姫よ、妹白瀧二八の姿、一の妃に備はり給ふ、榮花甚だ限りなし、爰に津の國山田の谷に、理左衞門とて賢き男、內裏白洲の夫にとられつゝ、塵を拾うて勤めて居たに、簾の戀風吹きまくりつゝ、一の妃の白瀧樣の、局丸寢の御姿をば、一目見るより早戀となり、今日か明日かの病となりて、もはや勤めに出でざりければ、彼方此方にもれ聞えつゝ、遂に內裏の御耳に入り、慈悲は上より召し下されて、汝戀するその志、扨ても優しや殊勝な者と、戀は日本天竺までも、高きいや低き隔てはないぞ、一首遣ねよ



歌詠むならば、望叶へて得させんものと、直に御盃の有難や、そこで男と白瀧樣と、兩方互の智慧競べにて、やがて百首の歌詠み給ふ、末の落句に白瀧樣の、詠ませ給ふは雲たにの濁りかゝらぬ此の白瀧を、心なかけそ山田の男と遊ばしければ、其虎で男も先づとり敢へず、水無月の稻葉の露と焦れつゝ、山田に落ちよ白瀧の水と詠みあげければ、君を初めて公卿大臣も、扨てもあつぱれ御名歌やと、上下ざめき賞め給ふ、時に君より御褒美にて、いとし盛りの白瀧樣を、理左が女房と名を付け替へて、連れて歸れと召し下さるゝ、家の寶は彼の薄墨に、守り刀は鞘引出物、位授かる御卷物を、今に不思議は湧き出る露の、今の世迄も山田の殿と、なんぼう目出たのな若松よさ。

一〇 盃まんざい

戲れ遊ぶ目出たさは、初春の千代萬歲くれ、おひの調緒に、紫檀皷を手に持ちて、これは東南三郎兵衞が當年の初遊び、廓色里通ひ來る、色にひかるゝ、柏木や三國に隱れあらがねの、諸手と言ひし名盃を、一杯には三千歲や、二杯濁らぬ酒の泉や、三杯には山王權現、四杯に式部靜かにて、つぎ目押さへて目をせゝる、白と黑との石も亂れて、五杯には半太夫節、歌ひし土佐や吾妻の美事酒、六杯には六しんきやう、七杯には七福延命よい仲に、子ふじ儲けてみ吉野や、八杯には派手な姿も晴るゝ雲、九杯に廓の名殘酒、十杯には十年の、苦界離れて廻る奧州、契る越前目出たき春の千代とや、あの若衆に見惚れとられて茗荷のこ、のこ〳〵鹿の子紅鹿の子、けに世の中の色盛り、目出たや〳〵。

一一 花角力

來て見よう、咲きくらべたる花角力、花壇を直ぐに土俵入、四本柱も花の名も、四本々々と呼ぶ人に、招き寄せたる寄方は、角力取草若草も、今年すみいれ名代者、伊勢の濱荻角目立、難波の蘆も踏んで出で、兩方共に評判の、よしや其の名も殘し勝ち、我も來ぬかと爭ひて、舌皷うつ蒲公英の帶とけい草畫顏の、中入前に取上けて角力は花とぞなりにける、中にも西の石竹は、小兵なれども手取草、相手を問へば小車の、引けども兩面、おうせつ四つ手に組んで、入るは下手に俯けば、顏の色さへ紅つかせ、肩透せから胸櫓、釣り花活の投入は、是今日の千番に一番、菖蒲づけにも褌迄、千草木賊の杜若、水際見せて蛙掛け、得手に掛けたる八橋の、背高が足のつかみ投け、杖つく菊の老角力、我が弓張の腰車、持つて廻りてこりや〳〵〳〵、まつさうくわん草程もさし上けて、牡丹とこそは投けにけり、皆鷄頭と押しこんで、新手と替る鬼薊、突く事ばかり得手者で、細工角力と夕顏の、花

やすゞしの下帯は、五尺手拭一度に懲りず起き上り、ぬつと出づるをひき止めて、手合ばかりをにほひなみ、蘭は固よりさうこうの、安達がかどの東方、行司も代る藤袴、手を振袖ととは目出たし〳〵。

一二　ゑびす笹　はやロうたせ

春の初の羽根つき手鞠一二三四、九や十日の初夷、攝津の國西成や、今宮の森茂りたる御社は、蛭子の森の御鎭座なり、氣も若夷商人の、貴賤老若別ちなく、踵をついで參詣に、千代万代の竹の葉や、笹に附けたる品々は、直なる御代に大判や、小判は色をいや増して、上なき寶是なりと、一歩自慢に附けらるゝ、丁銀箱のなか〳〵に、包み並べし勢あり、次は錢箱繋ぎ錢、その青紬の青々と、米の俵を積み重ね、代々に益々栄掛に、命の秤限りなき肱を張口天秤の、釣の拍子や合ひぬらん、けに商人の習ひとて、賣り買ふ物にしなつけて、年中嘘の皮袋、言うても神を敬へば、親の代より子は大福帳、つきせぬ家の白鼠、見一無當作九の、一厘二厘爭ひて、算盤の玉あられ、油斷は神の科ならず、稼げば世にもゆで蓮の、猶いつまでもよろこんぶ、緑の袋の品々は、風に嫋へてしいはしは、嵩い人でもそれ〴〵に、けに信心の時なれや、めれたし〳〵。

一三　魚盡し　木やりおんど　はやくち、うたせ

いでその頃は淀鯉三年、鮫鰊天皇の事なつしに、龍宮魚中の都には、菊の節句の吉例とて、江河の魚類殘りなく、鮒に出仕あれば、奏者の役人鱧長門守陸奥守、玄關の口に出で迎ふ、はれ師こそ聞えける、あつばれ美事やおめで鯛、尾鰭の勿體大様に、丸からず長からず、よいころ鯛のむかふつめ、色櫻鯛はなおれ鯛、茅渟鯛甘鯛木の葉鯛、鯛の一門眞先に、比目魚かしてぞ通りける、赤鱏の錦はまつらどう、うは鰯とて名も高き、小兵なれども小癪者、鯉も魚の交りと、脂ところりの若者や、續いて出るは丹後の國、目白はまちやつばすが親父、一番鰤の判官とて、春の儀式の主役に、鰈を祝ふがうの者、諸士の出入りをすまし役、昆布が仲よし大鰹の五郎又は、いけよき伊達衆と知られたり、鹽の目黒の舌たるく、室君の流れを汲む、潤目鰯と見えし女こそ、その名も高し天滿屋の、おはつと言へる名にも似ず、どんたいなりと嫌はれて、大和の國へ月切に、身を切賣のしこなしに、肋は玉の浮くばかり、勤め鰑の哀れさと、鱒の袂も悄れけり、濡れにぞ濡れし面差を、見るに思ひが鱒の魚、派手な藻魚の振袖が、鰯々ほや〳〵川鮎らし、鱚子の前や後帶、腰元糸縒仲居の鱶、下女のお河豚に乳人のおこじ、ひき連れだちて車海老、腰も二重の髭親父、實盛とこそ白浪を、噴きたてふきたて出でたるは、鯨と言うて七浦に、隱れもあらぬ大金持、海月の馬にくま引の、あかり虎子皮の投げ鞘、金魚作りの太刀魚佩き、のし〳〵とのり出すは新羅源氏小鰆の後胤　鰆の十郎鯏、烏賊物作りの鮫鞘は養魚のの鯖口廣、けに艶いたる鰹節、金頭と見えしは如何に、我幼少のその時は、鰯の介とて川にて育ち、海底に到つては、烏鮹の小二郎こざらしと申せしが、今の鰯は鰯衞門うす持と、はねちらしてこそ入り酒や、作り立てたる若者は、鱸の三郎同じく弟鮴之介とて、色白魚の優若衆、お伴にと續く奴の〳〵、紺のだいなし振り出すは、泥鰌が兄分鯰のぬら藏、ぬらくら仲間の鰻の泥牛、ぬめり廻りし二日醉、鮒々しやると飯蛸が、その叔父分は壺入住僧、蛸の僧正ほて長の疣々院とて、齒ごたへのある出家也と、鰺鮴よりのもてなしに、引張蛸にするとかや、我も〳〵と、寄りもの雜魚、御代盤臺と壽きしは、腥がりける次第なり。

一四　紙づくし　當世はやりしやうが　はやロいうたせ

先づ正月は夷紙、實の紙を寄せけるが、大高小高五色紙、先づ今日の御酒宴は、身分に對し小杉原や、段々口上のべ紙や、七九寸を横たへて、是こそ我等が合口と、廻らぬ口上捻り紙、扨て又奥には獨り武者、奉書紙か珍らしや、我が美濃紙知り抜いて、昵懇の仲折紙、又々御用紙候はゞ、又後程に青礬水と、薬袋紙をぞ盡さるゝ、酒にせんと言ふまゝに、長柄の銚子蜻蛉結びを、地黄紙にて水引を飾らせば、つぎても堅き石部紙、受ける心は吉野紙、肴は黄色の小半紙や、漆漉し程あやかりたいと、身

をもみぬきの澁紙や、班女が閨の紙帳紙、これにても面白からず、舟遊びにいたさんと、湊紙へぞ歩まるゝ、はやさし寄する雨障子、生漉の半切歩みにかくれば、人々舟に乘らせ給ふ、追手に任せ帆を卷紙、向ふを見れば松葉紙、皆山の手は鼻紙や、千歳の榮華仙過紙、心樂しむ折紙や、はや寺々にかねの紙、今日も暮れぬと塵紙や、菊に桐の戸襖紙、開く扇の地紙まで、短册紙の色紙だい、由來を述べて細川の、やがて湊へ着きにけり、人々舟より上らせ給ふ、復の御見とたち別れ、土氣離れぬ鳥の子の、青きまにあひ物事を、唯岩國の小倉半紙や、よい〳〵のよいとな。

一五　五輪くどき

天神七代地神五代、治まる御代こそ目出たけれ、神代の昔を尋ぬるに、伊弉諾伊弉册の御神は、天よりあま下らせ給ひけり、逆矛下させ給ひつゝ、その一雫が島となり、島の始が淡路島、國の始り大和の國、郡の始が宇陀の郡、寺の始が橘寺、國は成就したれども、未だ人間廣まらず、

さあらば氏子を廣めんとて、天照皇大神宮は、白張裝束花やかに、立の烏帽子の緒を締めて、紫檀の矢立を腰にさし、畳面に向はせ給ひ、男子女子といふ文字を、六十六遍遊ばされ、北と南に投け給へば、南の方より有難や、男子一人現はるゝ、扨て又北の方よりも、女一人現はるる、さるによつて女をば、北の方とも申すなり、馴れ合ふ所は何處なるぞ、丹後と但馬の境に、成相の觀世音に、切戸の文珠と申すにて、妹背の契り淺からず、扨て人間の五倫五體と申するは、岩を碎いて骨となし、土は肉風は息、草を結んで血脈となし、始まる所は有難や、髪は藏王の形にて、額は八幡大菩薩、眉毛は鞍馬多聞天、さて兩眼は日月よ、鼻は普賢菩薩なり、さて唇は智慧文珠、齒莖は二十五の菩薩、舌は金胎兩部なり、出で入る息は、阿吽の二字に表すなり、耳は彌勒の菩薩にて、肩に蓮の蓮花あり、背中は九品の淨土なり、肋四十八枚を阿彌陀の御經と表すなり、さて又親骨子骨合して、三百六十四枚をば、天の日數に表すなり、乳は母の讓りにて左手の腕は有難や、父の讓りと候ひて、七百餘寸金剛界、

又右手の腕をば、母の讓りに候ひて、五百餘寸胎藏界、十の指は十羅刹、爪は蓮花の落葉なる、臍は藥師の瑠璃の壺、扨てその下は觀音の御作なり、さて兩足は地につかず、よい〳〵よいやな。引

一六　謠づくし　はやロ　木やりおんど

煩惱あれば菩提あり、菩提あれば衆生あれ、衆生あれば山姥も蟻通、遊行柳は綠花は紅、さて人間の遊ぶ所は、或る時は西行櫻の下にして、邯鄲ほにたけを煖め、采女の盃取々に、酒宴をなして盛久や、日もはや吳服におよびつゝ、誓願寺の鐘響く聲、聞くに心を取直し、兎角鵜飼の殺生石、芦刈とや思ひけん、佛の原に到らんと、自然居士をば思へども、あゝ扨てしん氣や年寄るまじ、老松杖にすがつて、よろ養老と、檜垣格子にとりついて、問へど口說けど君はつれなや、鸚鵡返しの返事なく、脇へつうと賴政、安宅百萬弓八幡、頭の鉢の木割らんとて楊貴妃折つてかゝらるゝ、如何にや〳〵老人や、通盛もなき事を、聲高砂に言はんより、咸陽宮を遊ばされ、そ

れ程腹が龍田なら、晩に必ず夜討曾我に來られやと、小袖曾我をば控ゆれば、嘘か眞實か白髭の、晩に必ずどち枕さ。

一七　おちよ　半兵衛　青物づくし　ひやうごくどき、くまのぶし　はやりおんど

蕗は蕎麥とも何かは苣の、菖蒲の鬼灯色藜にて、木瓜致し身は甘海苔に、芥子まきうば皆かくとだに、ま荷かやがそれ三島海苔、思へば半茸虫乾菜でも、まさな〳〵に鳥蕗の薹、流石八百屋の木の芽うどとて、芹やはなゆに、分葱買りまぜ、是なう蕗よう木耳の、いしそ〳〵と今革茸に、ついでに青豆そりや隱元豆、わりな初茸氣を土筆、松露との言ふ事とナ、一つに木耳黑胡麻がない、心玉章て芋苗いてたも、胡桃やこゝのな身のほうこ草、おのみも無うては藥苞ぶそや、むめなう芹では水菜けれども、それにさへ名の陰乾もあり、必ず撮菜三十一文字と、すぎ菜燒鹽まぶせぬものよ、所の眞桑をどう瓜と、思ひ赤葉の菜は要らぬもの、お栗さんをばり絲瓜させ

て、添うて其方の午蒡と茄子、いとしい姫瓜その身のひじき、一文苣のな睨みをうけて、其方御根葉よ水迚といふ、またたび昆布や此の身を忍び、胡麻同然に身がなるとても、嫁菜何の手柄ぞや、世の山の芋とは皆違うてある、十の芋から小芋に育ち、豆腐屋こい八百屋へ走り、珠芽呼んでおぢや身の薑よ、唐辛種まで皆預けたは、小さい芥子の我が梨蜜柑、分葱のやうにわしや思はれて、よい石榴がなつい出世させ、けんの一つもつまゝせたいと、思ふはいすらばかりかは、皆親芋はこりや同じ事、分葱も無い事また椎だして、獨活めを見せてたんくゝほゝや、筍よい事まあるならば、今でも海髪一寸呉れと言や、蓬はなれたやあこれ生薑、損と言うても若根の事よ、ふ銀杏めを見よかと杏子、案じ過しがせい黄草ぞや、思ひも寄らぬ五加をかけて、必ず長芋見せたもんなや、殊に大根の兩親たちに、憂き事木の芽のかのやうにしや、棗も聲もこの白瓜も、殘るはだめのあの恩の程、蕗は蕪菁をえゝあけもせず、唯青々と榮えしは、

野邊のつくりとヤレしやらしや。

一八　闇の夜のからす　風流、はやりおんど

掘らぬ井に、たまらぬ水の湧きけるを、影も形も無き人ぞ汲む、浮世をないと見る人も、その掘らぬ井の湧かぬ水、形も無きと見る目こそ是ある故のすさみなれ、塵塚の塵文車の、文にも書きしあだ事を、またなき事に言ひかへて、我を樂しむ今宵しも、夜に情の港なる、わけ村といふ遊女町に、彌須左衛門と優しくも、廓に隱れ在原の、今業平といふ女郎に、徒名を立てゝ通ひ來る、若草と言ふ男あり、雪に冷酒夏火燵、その扮裝の花やかさ、茶縮緬の足袋はいて、こひ格子の皮頭巾、石割の編笠にめせき駄を履かれたり、顏に三里の灸をする、踵を毛抜で抜きたてゝ、額に大きなあかぎれの、跡方もなき空耳や、鼻の下疳の苦しさの、左の足がかんだにて、臍はすつきり金擊、金襴の印籠に、分銅めの紙入を、かるた結びに入れられて、御影堂の脇差に、鮫鞘の扇持ち、今朝明方に宿屋入、廓に花を唉かせける、扨て又太夫彌須左衛門、鹿の子の脚布を蹴まわして、絣縮緬の直垂に、小

櫻威の鎧着て、鼈甲の房帶に、名古屋の櫛をさしも草、上翡翠のとりなりたをやかに、嬋妍たる腰つきの、髪に白粉絕えさず、顏には伽羅の油なり、お馬添には遣手の市彌、八十八のますかきに、まちつと足らぬ禿なり、さて又揚屋は隱れなき、權大僧都又右衛門、紺のだいなし、五條袈裟、たばね大根の如くなる、指のまたにてこりや旦那、家の名物生諸白、初昔と名に高き、伊丹茶壺の口切つて、餅を茶漬けにさらくゝ、魚の燗する有樣を見るも語るも浮世川、油煙の筆にまかせつゝ、茶漬の墨の黒々と、くろめて渡る嘘の川、流れくゝて澄む水の、さても涼しき浮世え。

一九　櫻づくし　當世新はやりおんど

口三味線に、のする一節彼の流行歌、戀の金箱さる分限者の、すんど大切のその娘御を、內の子飼の龜松といふが、奪うて退いたのかたけて行たと、言ふが眞實かその御寮人は、姿揚貴妃櫻をとりて、名をばお花と申すなり、自體龜松角前髪で　小姓上りの若木の櫻、誰も見惚れる

稚兒櫻なり、彼岸櫻のひが事なれど、何時の緋櫻二人の仲は、繻れに繻れたる糸櫻なり、淺葱櫻が後には一重、二重櫻と契を重ね、側に附き添ふ姥櫻さへ、知らぬ佛の普賢象櫻、或る夜座敷の庭櫻にて、聞けば此方は來る花の春、嫁入なさるゝ筈なれば、あゝら口惜し徒花折りて、胸を焦する鹽竈櫻、もはや是まで緣薄櫻、頭削げて墨染櫻、西行櫻と戀路の修行、お江戸櫻か山櫻へも、引きや籠りて佛に花と、言ふにお花は袖ひきとめて、扨ても其方は花車程、心廻しやるさらくゝおれは、外に花やる心は無いぞ、いつそ此處をば連れ退きやと、言へば龜松虎の尾櫻、龍の髭をば踏む心地して、這うて拔け出で九重櫻、都方へと散る櫻花、もはや此の上親々たちも、遂に二人を呼び返しつゝ、花の女夫となし添はせつゝ、交す枕はなどち枕さ。

二〇　京都名所盡　當流はやり口、うたせはやりおんど

ヤアさらば都の名所をば、語り申さん聞き給へ、抑都の始まりは、桓武天皇の御代とかや、いとも畏き宮造り、

東山には吉田の社、日の本の御神を、勸請ありし靈地なり、左手に名高き御山は　和國無雙の比叡山、傳教大師の開基にて、唐の天台山をうつされたり、中堂講堂戒壇堂、麓に山王殿を並べて立ち給ふ、右手は黒谷眞如堂、若王神社永觀堂、東下りの道越えて、祇園の社清水寺、地主權現の花盛り、音羽の瀧の白絲を、くり返しつゝうち眺め、大佛殿は廬舍那佛、歌の中山誓願寺、今熊野をもうち過ぎて、いつも秋にはあらねども、東福寺とて名も高き、通天紅葉稻荷山、咲き亂れたる藤の森、鶉鳴くなる深草山、伏見の竹田淀鳥羽曠、扨て又巽は宇治の里、八幡山崎寶寺、松尾桂梅の宮、御室に近き小鹽山、嵯峨や高雄や愛宕山、太秦北野紅の森、加茂川貴船鞍馬寺、岩倉芹生八瀨の里、戴き連れた大原木や、薪に花を折り添へて、いともかしこき賤が業、吉野初瀨の花までも、都ぞ春の錦なり、けにや眞に九重は、法華經八軸を地に敷きてありとかや、けに有難き王城の地を、一度にても踏むならば、極樂世界に生るゝとある、有難き君が代の、由來を述ぶるも目出たさ。

大阪音頭　終

第七　濱荻

濱荻の序

抑旨官の和國にはえある事や、光孝天皇の皇子雨夜の御子と申せしが、御目のしひさせ給ひし故に、諸の盲人を哀れませ給ひしその御あとを慕ひて、洛陽清聚庵に春秋二度の大會を設けて、妙音菩神を祭るなるは、辨天日吉を此の道の祖神と尊ぶならし。まことにさゞ波や鳴てる海のほとりに跡を垂れ給ふは、琵琶の縁とも云ふなるべし。祭終れば壽きの聲を揚げて、鳥羽の湊に船が着くと同音に唱ふなるは、そのかみ、日向の國に旨家の采地ありし時、稅務の米を大船につみて、山城の鳥羽の津に着けし事ありし、今はその事無しと雖も、猶もその名殘を慕ひて、祝の詞を述ぶるなり。されば諸の音律を考へ、數の樂器をうつして、今三味線と和らけしその初まりより、此の業に名を得し人の數々は、色替へぬ松の葉や、大幣の彈く手數多の言の葉に記しぬれば、今更同じ事云ふべきとにはあらず。爰にその二卷の選びにもれし赤木の何某と云ふ人は、吉備の前つ國にありて、まゝ此の藝に妙を得、聲色に塵をとばし、撥さきに神を泣かしむるのみに非ず、此の蘊奥を極めん事を心にしめ、あらたに二五の組を綴りながら、假にも私の言葉を交へず、伊勢物語の歌數二百九首をもて、是が唱歌とし、中にも終の八首は十組の外に、許の一組とたてゝ、本調子二上り三下りの三つを離れ、別に一つの調子を調べ出し、筑摩の曲と名付けて、是を平家の大祕事になぞらへ、又第六の露のやどり、第十の龍田川、此の二組を小祕事にかたどり、それのみならず、長歌の數々を述作し、その中に木枯と云ふ曲、手向の沈と云ふ曲も、同じく祕事の中にいりぬ。さればこの數々の祕曲の言の葉を、都鄙の數奇人に示さんとて、今此の濱荻の一冊とはなせしぞかし。是をもて是を思へば、世に謂ふなる、田舍に京とはこれなるべし。あなかしこ、此の書を見ん人、鄭の俗のと卑み給ふべからず。假にも此の曲を奏する時は、心をすなほにしてよこしまを思はず、その容を正しくして糸筋を亂らず、此の藝を傳ふる人をば、普く導かんと思ふ心さゝば、神の惠み、聖の教へ、佛の誓ひにも叶ふべければ、

此の勾當の勳の、世に數なきを感するまゝに、さしもしはがれたる聲うち添ふる小夜千鳥の、さしでがましと人の笑はんも省ず、濫りに筆を添へぬるは、序と云ふべき程の事にもあらず。備陽國府鷽巢軒のうちにして、俳士知義是をしるす。

濱荻目錄

(初) やまと歌組箇條

一　試撥　二　春の鶴
三　花見曾我　四　雲間
五　春の夜　六　手鞠
七　年越曾我　八　端居
九　船遊び　十　短夜
十一　うつし繪　十二　月の園
十三　恨の庵　十四　矢矧の露
十五　茸狩　十六　蟲盡し
十七　朝の閨　十八　小野の夢
十九　雪の亂酒　二十　山の落葉
廿一　木枯前歌　廿二　思ひの四季
廿三　よい仲　廿四　手向の沈
廿五　衣の夢　廿六　香寄
廿七　吉備獅子前歌　廿八　貝盡し
廿九　蟬折　三十　垣間見曾我

卅一　磯景色
卅二　寢屋
卅三　象棋
卅四　簾の御見
卅五　旅寢
卅六　こひめ
卅七〳〵寢覺曾我
卅八　京問答
卅九　投入
四十〳〵裾野曾我

㊥ やまと歌組箇條　伊勢物語引歌

第一　若　紫　春日野の若紫の歌より
なか〳〵に戀に死なずばの歌迄
二十首

第二　鷄（くだかけ）
夜も明けばきつにはめなての歌より
忘れ草生ふとだに聞くの歌迄
二十首

第三　牛　飼　忘るらんと思ふ心の歌より
などてかくあふこかたみにの歌迄
二十一首

第四　花にあかぬ　花にあかぬ嘆きはいつもの歌より
名のみたつしでの田長の歌迄
二十首

第五　我住む里　いほり多きしでの田長の歌より
思はずばありもすらめの歌迄
二十首

第六　露のやどり　我が袖は草の庵にの歌より
さりともと思ふらんこその歌迄
二十首、此の曲祕事也、是まで
表組なり

第七　徒（いたづ）らに　徒らに行きては來ぬるの歌より
あかねども岩にぞかふるの歌迄
二十首、是より裏組にて傳授の
時神文あり

第八　千　尋　我が門に千尋あるかけの歌より
わだつ海のかざしにさすの歌迄
二十首

第九　おほかた　おほかたは月をもめでしの歌より
白露はけなばけなゝんの歌迄
二十首

第十　龍　田　川　ちはやふる神代もきかずの歌より
形見こそ今はあだなれの歌迄
二十首

別曲　筑摩の曲　近江なる筑摩（つくま）の祭の歌より
終（つひ）に行く道とはかねての歌迄
八首、極祕事なり、八首の調（しらべ）と云ふ
る遠山松（とほやま）の相ノ手調べ豐（ゆたか）に聲打添へて、歌ふも舞ふもこの
宿に、榮え行く世のためしとて、くめば九獻（くこん）の數々に、
誘へる色は春ながら、かくこそ秋の紅葉（もみぢ）して、皮の鼓の
扇さへ、拍子しどろに結びては、ながぢ三つ四つ何（いつ）時迄
か、盡きせぬ君が惠（めぐみ）唯、盡きぬは君が惠。

㊀ 試（し）撥（ばち）　本調子

なほ幾春の壽（ことぶき）を、思ひ續けて書き初（そ）むる、硯の海も若水
の、清き心をそのまゝに、向ふ鏡の影ならで、霞こめた

㊁ 春の鶴　本調子

八重霞、たち止めても故郷（ふるさと）に、歸（かへ）さ嬉しき雙鶴（もつづる）は、尙千
代ませと今日こゝの相ノ手空を紛（まが）はで呼ばうなる、聲もう
らゝに照る日影、もれなばもれむ空燻（そらだき）の、簾（みす）にくだけて
誰（た）が軒に、香（にほひ）やつるゝ風かせ、吹きな拂ひそ紫の、ゆか
り求めて袖毎に、摘むや垣根の菫草（すみれぐさ）、濁らぬ御代に幾春
か、なれてはえある色をこそ、唯賴め唯賴みても、かひ
ある濱の眞砂（まさご）にぞ、たぐへて歌ふ壽（ことぶき）を、翼につげば唐（もろこし）
の、人も大和やしのぶらん。

㊂ 花見曾我　本調子

のどけき四方（よも）を見渡せば、千里（ちさと）の外（ほか）も曇りなき、空に任

せて虎御前、同じ勤めの思ふどち、花咲く方へいざさらば、かの君たちを伴なはん、先づ文してと上書に、曾我とは古し宛字かも、知らで書いたら笑はれん、よしそれ迄よかさね様、四つ一つ様二人より、参ると書きし玉章を、見るより早く編笠に、深く忍びて我が宿を、同胞連れて來しものを、遅かりしとは此方こそ、恨と云ふも盃の、縁の言葉や酌む酒に、相ノ手幕をひたしてしらけ飲、神ぞと云へば我も亦、神かけ吉田の花よりも、紅葉よりも、戀しき君が御姿、また會ふまでの形見ぞと、叩く背中の音にもや、花の散るらん花や散る。

㊃ 雲　間　本調子

幾重たちそふ白雲の、峰も厭はず分け登り、花の在所は何處ぞと、求めわびぬる我が袖を、しゝも蛙も過ぎぬれば昨日は今日の昔にて、移ろひやすき若草の、色にやめでぬ世の中の、人の心は飛鳥川、流れて早き今日の日も、はや入相の鐘に散る、花をしるべと今暫し、行くも歸るも戀の山

㊄ 春の夜　本調子

兎角願ひは多かんめれ、梅が香とめて青柳の、花に眺めは如何ならん、戀しき人に會ふ夢の、覺めず此の身の朽ち果てど、如何に嬉しきものとかは、知るも知らぬも逢坂の、關には空音はかるとも、今宵は鳥も心せよ、あひのて情一つを百千に、割りて碎きて微塵になして、その一つさへ言葉さへ、交す間もなき春の夜の、明け行く空を汝ばかり、知つたればこそ鳴く鳥、なに、それがつらくば何故に鳴く。

㊅ 手　鞠　本調子

けにも年月日のはじめ、數へて三つを味はへる、いとも畏き君が世の、春を待ち得て常盤なる、あひのて松の綠も一入に、色を含みてつく羽根の、爲には重き振袖も、手鞠の宿によいものと、あだなき言葉數多く、こちやちよど百ついだえ、そりやよい事と友どちの、數を憎みしせき色や、もれて霞の艶ならん。

㊆ 年越曾我　本調子

百千鳥、囀る春は物毎に、改まれども替らぬは、二世とかねたる妹背山、峰に霞の薄々と、たなびく今朝の壽を、曾我にて共に祝はんと、うち連立ちて大磯や、禿も後から小磯の森、居眠りしたらあの堂の、地藏にとんとはずまうと、戯れ行けば君と我、切つても切れぬ中村や、曾我の屋形の初夜の暮、おむらの頭は袮經よ、さて柊は和田親父、あの髭顏で、あの髭顏の厭らしさ、それさへあるにつけざとは、はこりや又何たる御託宣、かのかんざぶで受けつけぬ相の手お歳男は流石なも、外へ外へと鬼王が、うつ炒豆はばら〳〵〳〵、ばらり〳〵と音すれど内へは福の入りかねし、今年の松の内とても、身揚り好きの虎さんと、人に言はする氣の毒の、山時鳥なく音さへ、忍ぶ習ひの世ぞつらき、さはさりながら七轉び、八起きと聞けば頼もしき、五郎も禮に來るべし、報復早くその後は、蓬萊山とぞ祝ふなる。

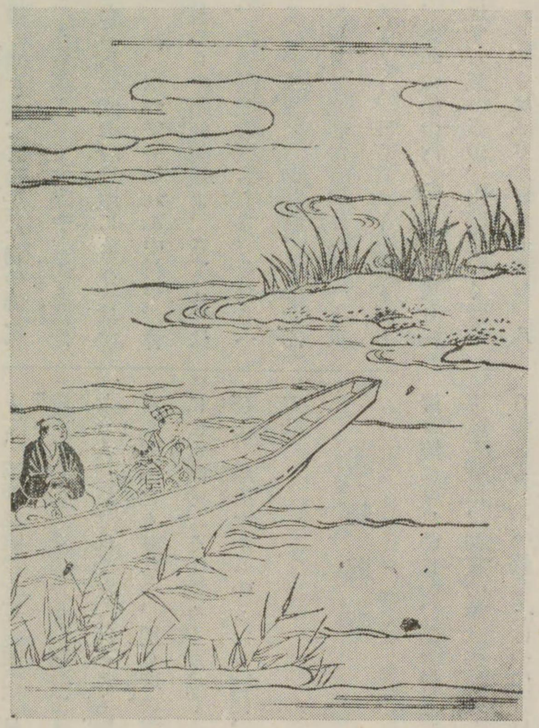
㊇ 端　居　本調子

朝な夕なに、慣れて我が手に重からぬ、扇の風もしん氣とて、浮かれ眺むる夏の夜の、月も戀路のあればこそ、誰が住む山の柴の戸を、明けて入るさをさりとては、情なき人に見せばやな、何それも厭か、はてどうかえ、ほんに問へども答なき、獨り現の言の葉は、なごとの歌書によむ歌の、その數々も及ばじと、思へばいとゞうちわびて、端居ながらのうたゝ寢に、夜は明けもせよ暮れもせよ。

㊈ 船遊び　本調子

清き流に今日の日の、憂き暑さだに水無月の、空に忘れて涼しさに、初夜の鐘さへ妬ましや、のほせとなるかならずとも、一つ飲めとはやつこけな、逆ぶりながら憎うない、此の川風の思案に、船さし止めていざさらば、此處に暫しは漁火の、二上り影に照り添ふ笄の、蒔繪はそれと見えねども、髻にこほるゝ梅が香は、誰が植ゑ置き

て時ならぬ、花の梢も、手折らば手折れ散らぬ間に、折らば疾く折れ散らぬ間に、ばつと散りしも又をかし、漕ぎくる船も面白や三下り二上る糸の繰返し、歌ふは確か肱の杖、膝や枕につや〳〵と、女偏には日偏もわかで、見るは糸偏唯一筋に、思ふ心の我が玉偏は、君が袂に有明月の、宿る景色はさりとは〳〵、てんと水の面白やな。



㊉短夜

本調子

行き暮れて、木の下蔭を宿とせば、寢られうものか短夜の、鳥の憎さもいとしさの、餘り程なき契りにも、去なんせ〳〵と幾度か、言うて別れてかこち寢の、ひじき物には移り香の、而も今様長振袖は、替らぬ色ながら、涙にぬれて自ら、打悄れたる染入の、花の外には誰訪はん。

㊉うつし繪

本調子

一度社參の輩は、諸願成就圓滿すと承れば、賴もしうこそ候へとて、小舟に乘りて供人を、うち連れ潮路渡り得て、彼處に上りこの島の、目離れぬ景色何にかも、たぐへて言はん方も無し相ノ手波は鼓の音に寄せ、松はすが搔く琴の手に、浮世の塵も吹き拂ひ、捨てゝも捨てぬ戀の道、誘ふ嵐のあるならば、都の空に傳言せばや、妹背の仲と人毎に、云ふ甲斐もなく隔つ身は、此處にありとも知らでさぞ、うき寢の夢やつらからん、よしそれとても我が君に、通ふ心のいかでかは、後れじものと梓弓、ひき直したる琵琶の湖、その名にめでゝ調ぶなる相ノ手上原石上の名曲には、宮の内も澄み渡り、まことに面白かりければ、感應の色袖に見え、その喜びを書き記す、九十九三の言の葉は三下りつきせぬ御代に心ある、人こそしのべしのぶとも、名のみ長柄の橋柱本調子朽ちても朽ちぬうつし繪やこれより掛合それは　（以下三丁缺）

の調子は自ら、しめやかなりし一間の内、障子明くれば星月夜。

㊉五茸狩

本調子

しやんと裳裾を結びとめ、その抱帶緩むれど、女子力もそれ〴〵の、譯には强き槻弓も、ひかば靡かん風俗を、棘がとめてどうするぞ、さあゝ、放さねば根引ぞと、俯く方に藍茸の、二つ三つ四つ何時の間に、野邊も色なす紅茸や、兎唇濕地に布引の、瀧にはあらで茸の名も、げに色々と手を折りて、數ふる袖や秋風の、吹くに嫋へて柳茸、その青柳のいとせめて、一つは飲めと椎茸の、うつりや思ひ酒の名に、聞きな紛へそ桑榎、なべて老木の朽つるとも、人に情なく見せじとや、生ふるか茸のそれ其處に、白く見ゆるは如何にぞと、童に問へば猪茸の笛に寄邊を松茸や、とりて隱して我一人、狩の譽を岩茸の、世は憂きふしの繁くとも、流の末を堰き止めば、又革茸も幸の、折に任せる徒事に、日もはや西に傾けば、何故暮すぞや暮すなと、伴うち連れて惡戯の、無理をかへさの、戯れ道。

㊉六蟲盡し

本調子

荻萩薄亂れ合ひ、露なめらかに風通ふ、野邊は今はの蜻蛉虫、己が時とや樣々に、聲の綾織る機織や、糸縒りかけてさゝがにの、蜘蛛の氣色に我が背子が、來べき夜半ぞと松虫の、心一つに蟋蟀は、なく音もらさじ空蟬や、言はで焦るゝ螢火に、燃えて哀れや夏虫の、言ふには勝る思ひ草あひのてとても情なき仲ならば、我からとんと螽蜥、とばかり賴む戀衣、御手洗川に禊して、宜禰が袂に

鈴虫も、神は受けじやそれとても、勇む習ひと奉駒の、轡の音はりん〳〵〳〵、はいと打つたる武士の、彌猛心の鎧虫、和歌に和らぐ一諷や、水の蛙も假初人の、眺めはほんにかはゆらし、荷の露のそれよりも、濁りに染まぬ玉虫に、光爭ふ黄金虫、よしや胡蝶の夢の世に、夕を待たぬ蛉の、無きかと見れば、蟻のすさみの事繁き、憂き蓑虫の習はしは、袖に涙の實虫、なく音尋ねて暇なき、月を友とや夜半の床。

㊦ 朝の閨　本調子

露も亂るゝ、薄も亂るゝ、はしたないぞや小夜嵐、妬む心かよい仲を、隔て隔つる籬がもとに、誰松虫の聲までもあひのて見ゆるたぐひの心地こそすれ、月の前、忍ぶその夜は憂かりしに、あらまし洩れて覺られて、今は嬉しき戀の山、もとの麓ひぢ積らずば、峰もあるまい登りもせまい、昔をましと眺めつる、歌は情なき琴の音の、いとも微かに誰が宿に、誰が調ぶらん、や、天つ風かあひのて二上り それかあらぬか海遠き、波の音にもたぐへては、茶の湯楽しむ人もまだ、袱紗捌きのかたくなに、初心な風もかはゆらしあひのて三下り それで寢もせでしな〳〵に、思ひくらべつなしてみつ、暮し暮せし秋の夜も、明方近き鐘の聲本調子待つに急ぎて別れに怨み、我はそれにはひきかへて、戀しき方の傳にもや、なりてしがなと徒らに罪を重ねてまくらせば、朝の閨に結ぶもの、夢の科ともなりやせん。

㊧ 小野の夢　二上り　怨靈

あだと情と思ひ寢の、夢は怨みの夜な〳〵に、通ふ枕の柴の戸を、嵐か時雨か、問へど答へも徒らに、鳴戸の沖に立つ波も、船漕ぐ人は厭はまし、厭はぬ野邊の雪霜も風が拂へば、薄が散らす、雲が隱せば、月の光も星はなほ、あらまづ嬉しいま二夜、一夜通りしその甲斐も、無き身となりぬよしそれはあひのてさもあれ百夜通へとは、つらき言葉の花も散り、螢も去りて秋の野に、露ばかりさへ哀れとも、思ひ知らずや思ひ知れあひのて知るや知らずや怨みの木魂、胸に響きて尚肌近く、夜の衣を明け行く空に、夢は跡なくなりにけり。

㊨ 雪の亂酒　本調子

賤が屋も、富める軒端も今朝見れば、隔てぬ四方の白妙に、降りつむ雪の梢には、年の內にも咲く花の、春や立ちぬと、思ふばかりの景色かな、一人眺めの惜しまれて、友呼びかはし歌と詩の、當座も過ぎて酒の燗、弱きを憎む寒さだに、今は忘れて數々とあひのて廻り廻れる盃や、差す手を取りて、參れ〳〵參らずば、腕を捩ぢて參らせん、さりとは御免今日の日を、酒に暮して此の顏の、色を見給へ御覽あれ、げに御色を拜するに、金平くうとも言つつべし、いで色の赤い尉殿に、さらば御酒を參らせん、然しこゝらは相生の、松の若葉の色好む、酌樣おあひお酌樣、そりや〳〵逃すな、どつこいしつかと、初心な、酒が嫌ならえいわいの、かく迄しゆんだ御座敷、興が覺めたら何とせん二上り我等は固より皆樣一人も、去んなんすんなん、えいわ大事か今夜は留らんせ、御見なす迄は、御見は何處に入り給ふ、何を言ふやらすつきと覺えぬ、御亭主覺えぬ、はてさてさうした事が目出たい。

㊩ 山の落葉　本調子

峰も尾上も木枯に、紅葉の錦散り敷きて、名のみ聞きにし臺の床も、妥やあらんと尚奥深く、行くも惜しまれ歸るはいとど、つらき山路を踏みわけかねて、いつそわざくれ印籠の、鞘には重き瓢箪と、紅葉と我と糸かけぬ、三つの調べの色較べ、思へば〳〵林間に、酒煖めて飲まんには、けに紅葉を燒くと云ふ、詩の心こそためしとてかき寄せ〳〵面白や、あら面白の夕や。

㊪ 木枯前夜　傳授

筏師よ、待て言間はん水上は、如何ばかり吹く峰の嵐ぞ、如何ばかり吹く峰の嵐ぞ、亂れ〳〵て紅葉葉流る、此のあとうちかへにて、一挺にては謂べざる曲也。

上終

㊂ 思ひの四季　本調子

春は花見よ夏はまた、岸根の涼み秋の夜は、月に照り添ふ紅葉葉も、ちり〳〵ばつと、誘ふ嵐も吹き絶えて　後に降り積む白雪の、よし積るとも積る我が、憂き思ひには及ばじなぁひのて言はで焦るゝ面影ならで、その折々の色深く、つくす眺めも何にかは、那須野の原の石よりもあつき人目を破りかね、忍びかねつゝ手枕に、袖うち添へてせめて唯、夢を頼みの明暮。

㊃ よい仲　本調子

何時の間にやらつい早苗、取りて交すとよい仲になろぞ、隔つな秋の田の、苅穂の別れ今よりは、涙かましき折々に、やがて衾の朝まだき、手も見て拭きて笑はゞ雪に、こんこ〳〵と云ふ程も、まだ節季候の年越えて、去年のかへしの墨つけん、あだも情の花の春。

㊄ 手向の沈　秘事三下り

さなきだに、淋しき秋の終夜、そぼ降る雨に虫の音も、うち濕りたる聲々は、餘所の哀れを己が身に、思ひ較べて泣くやらん、げに露の身は草の葉の、重きは先に落ち初めて、とても消ゆべき玉の緒の、絶えなば絶えね存へて、忍びわびしは頼みある、戀にぞあらめ我が袖の、涙は徒に亡き人を、思ひ出でつゝ今は世に、あるに甲斐なきはかなさも、我のみならぬ習ひぞと、道理知らぬつらさぞや、せめて手向の香は消え、樒も色の移ろひて、また挿し替へる花活の、水に濕して唯沈の、煙は風に靡くとも、香やは冥途に香ふらん。

㊅ 衣の夢　三下り

袖漬ぢて、掬びし水の氷れるは、春立つ風に解くれども、とけぬ涙は墨染の、袖の氷柱のつらき世を、頼む心は一筋に、南無阿彌陀々々々々、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛とうちねぶり、ねぶり〳〵てはかなやな、擅木の枕

うつゝとも、夢ともわかで物具の、外に勝れて見えしよ
り本調子土佐ぶし　返させ給へ返せとて、招く扇の恨めしや、
駒の足並引き返し、とある磯邊にうち寄せて、共に爭ふ
力草、葉に置く露は變らねど、まだきに落ちて敦盛は、
命惜しまぬ御様子、見るに我が子の年齢容貌、かくもあ
りしと痛はしく、思へば夢の覺むるにぞ、いとゞ絶えせ
ぬ法の聲。

㊆ 香寄　本調子

古の、奈良の都の蘭麝とも、いさ白梅よ若菜摘む、野邊
は霞に山蔭の、奥ある筆の跡訪へば、彼の楊貴妃の影う
つすぁひのて芙蓉の黛、月影の、花かと餘所に三吉野や、
薄紅に紅の、花の宴てふ花筐、般若武藏野初瀬山、
つなぐ上馬もなづむらん、眞菰にそふる菖蒲草、蜘蛛手
に見ゆる八橋は、二人が仲の中川よ、誓らで〳〵七夕の、
その初秋をまつかねよ、寢覺淋しく明かすらん、霜松風
の、二葉の千代に須磨明石、野分烈しく雁の、鳴きて渡
ると夕時雨、枯木水楢に老梅も、ほころび初むる寒梅は、

㊇ 吉備獅子前歌

秋風々々、今宵ばかりは除ぎて吹け、草の葉毎に置く白
露の、玉やこぼれてあたら夜の、月の恨となるまいもの
か、はて、月の恨となるまいか。

㊈ 貝盡し　本調子

人目恥づかし波間より、もれなば誰か海松に、昔戀しき
法螺に又、鮑淺蜊に赤にしき、折焚く柴の煙絶え、潮吹
く風になさばけに、うきよなきその蜆貝、千々に碎くる思
ひをも、忍ぶとすれど姫貝の、色香も深き梅の花、散る
な散らすな櫻貝、拾ふ袂にしをらし優し、かはい小波の
虚背貝、榮螺たひらぎ簾貝、掛けて結びて幾夜かも三下り
契る友どち、蛤踏みに〳〵蛤々文の傳さへ久方の、空な

時雨そさりとては、不破の關屋のいたら貝、月の名殘の惜しまれて、暫し夜半をや馬蛤となん。

㈨ 蟬折　本調子

若君は、夢も結ばず憂き旅の、閨より出で、星の名の、覺えしだけを數へみて、籬にふれし手枕に、過ぎし昔の事をのみ、偲ばせ給ふ折からや、妙なる樂のほのかにも、聞ゆる方の何處ぞと、疑ひ尚も分け行けば、小夜の戸鎖しに隔つとも、洩れては近き數々の、音に一つの無かりしは、一節の節を厭ふかや、よし〳〵我も埋木の三下り春秋知らぬ蟬折は本調子關守る人も許せとて、樂に合せて吹く笛の、音色や深き戀の淵、渡り初めぬる橋ならん。

㈩ かいま見曾我　本調子

恨みつわびつ疑ひつ、此のしなみつのわけならで、頼む方なき歳月を、經ぬるつらさの我身とも、知らでや人に大磯の、慰み深き色酒は、憂きが仲にも樂と、羨ましくもかいま見て、祐成此處にありやとも、思ひ出づるや思はずや、禿が銚子替へるその、傳だになくて內の首尾、問はれもやらで袖をのみ、うちしほりては立ち添ひて、格子を算に數へても、あはぬ情なさはかなくも、曾我の里へとかへるさは、はや横雲もひき渡り、心一つの別れぞや。

㈠ 磯景色　本調子

寄せくる波はどう〳〵、さつと引きては岸に又、波待顔に見渡せば、けに際涯なき海原を、心一つに、取梶おも梶ようそろと、戀ひ戀はれ行く舟人のあひのて旅の假寢の情さへ、振り捨て難き涙こそ、風待つほどの形見ぞと、しほる袂に月影の、宿りも薄き夏衣、きて見よがしのえきて見よ〳〵はてだんない事も、包む振袖老のみも、我が住む里のつとにやは、拾ひ爭ふ數々は、甲斐も渚の蟹小舟、蟹の焚く火か螢火かあひのて戀する人のたま〳〵に會ふと見し夜の夢覺めて、恨みられたり或はまた、友として戀ふる松風の、音は磯邊に吹き落ちて、夕日や琴を調ぶらん。

㈡ 寢屋　本調子

ほぞんかけたかかけぬのと、あな嘘しやそれよりも、戀しき人に會うたかと、鳴いてくれぬか時烏、はて理もなやつがもなや、かうした無理の在所をも、戀なればこそ厭ふ氣も、なき名を立てる世の中に、君戀ふる身と知られぬも、憂いぞつらいぞ寢屋枕。

㈢ 象棋　本調子

蟋蟀、何故終夜なき明かす、待つか別れか恨みかさては、稀に會ふ夜の睦言か、我も世に住む數なれば、おかしきのみの事ならで、人目を忍ぶ袂には、涙の色も包むにぞあひのて唯中空に住む心地、人の話もそこ〳〵に、返事せぬのを叱られつ、笑はれながらさす象棋、王手と云ふが嬉しさに、負けてやるとの輕口も、我が身一つの眞實とは、人こそ知らね沖の石、かはいや乾かぬか〳〵。

㈣ 簾の御見　二上り

八雲立つ、出雲八重垣妻ごめの、神の惠のてすさみに、緣は結びて心は解けて、隔てぬ仲の壽に、色香を添へつ筆染めつ、思ひ續けて書く文に、節面白く、開く扇の、折目けだかき立姿、あひのて難波女の〳〵、かづく袖笠ひぢ笠の、雨の蘆邊も亂る〳〵かたを波、あなたへさらり、あひのてこなたへざらり、ざらり〳〵、ざら〳〵ざつと、風の上げたる簾のひまより、ちらと御見は、しんぞ御見は、忝けなくないぞえ。

㈤ 旅寢　本調子

雨は降る〳〵客衆は通る、風呂をしまへば火燵の火をも、炭置き繼ぎて今日迄の、旅の疲れをはらせとや、身振さがしき女童子、一間々々の戸鎖せしは、けに諺に慣れて揉まれてしをらしく、欲しからぬ茶も閨の伽、一つと乞へばいへもはや、しまひやしたとすんとして、閨に居るかも白糸の、瀧の音にはあらねども、絶えて久しき故郷の便りもがなと思ひ寢の、その枕さへ閨をさへ、夜毎にかへて寢られねば、夢も結ばぬ朝ぼらけ、そともに騷ぐ駒

の鈴ぁひのて鴛籠が肩する枚音も、いしだけさへて氣もさえて、今日の壽に、それ酒の燗盃よ、いざさゝんあけませぬ、さらばくだりも此の宿と、世は情ある人毎に、共に名殘ぞ惜しみける。

㊻ 乞　目　　本調子

月も更け行くいざよひの空、雲に切らるゝ黑白の、さはられまじとつくる間に、しゆざんの六つの鐘近く、更くるも知らずでつくりと、四三でと言ふ聲共に、後は乞目の數々と、十二のけいも一飛びに、五六と言へばでつちらし、細い目をして汐らしくぁひのてどうも言はれぬ置石の、長明法師が樂しみも、かりのおりはや追ひまはし、坐るよどみのじやう六ノ〳〵や、どふむの別れそれながら、五四しうじいやおいで、具してと聞かば主從の、緣もとめん我とても、さんみちさんに焦れつゝ、握る手石を命にて、うち戲れし一間ぞや。

㊼ 寢覺曾我　　本調子

お目が覺めてか覺めてかと、顏撫づる手に空薰の、ひあいの香殘るらん、今宵は何故に寢もせず、何やら書いてばかりぢやと、問はれて虎もうち怡れ、されば身內の某の、心をつくし此頃は、千束に及ぶ文ながら、一度返しもせざりしに、その腹立か難題を、詠めとの傳言に詠まれずば、我が名を下す高瀨川、流の身とて笑はれん、先づその題は、會うて會はざる戀とかや、はて仰山な事ばかり、何のそれをと祐成は、思ひ續けて書き記し、この詠み方は何と〳〵、思ふ人思はぬ人を隔つれば、會うて會はざる戀もありなん、けに面白し〳〵、我が言の葉に言ひなして、返事と言ふも厭らしき、方におくらん嬉しやと、燗冷めながら飮む酒の、醉や朝にこえてなん。

㊽ 糸問答　　本調子

十二の調子それ〴〵に、そなはる御代のゆたけさを、誰が謠ひそめ彈きそめし、三つの調べの道廣く、問へども末の果ぞなき、とある一間に撥音の、洩れてゆかしき玉簾、隔てながらに訪ねばや、まづ一糸の音は如何に、さ

ればにや、程も遙の海の面、ざあざつ〳〵どう〳〵どつと、寄せ引く波のすさまじく、またしん〳〵と物凄き、音に類へて殊勝なりぁひのて二の糸の音は何と、吳竹の世々を重ねて、延びつる枝の葉を茂み、積る初雪、寒き嵐も厭ひなく、飽かぬ景色の風情なり、それは眺めはてその心かの、糸の音色になして見ば、何疑のあるらんやぁひのて木うちかへさて其の次は如何にぞや、什麼生か是春秋の紅葉、千々の色かも三下り此の糸の、音に及ばじ及ばねど、引かば靡かん言の葉に、皆人笹の露とて浮き名、龍田川に、さつと流してきさんし、冴えし音色も面白、けに面白の調べや。

㊾ 投　入　　本調子

松風の音波の音、りよがんむせいと滾り聲、湯も揉かにたをやかに、うちやうさたんの投入も、かりそめながら心ある、人の手すさみ是やこの、倭み國の例とて、數奇をそのまゝ歌の會ぁひのてかなと願ひつ吹き流しては、反るてにはやとはと止め、かみを疑ひらんと彈ね、つゝと重ねし短冊も、かき集めたる藻鹽草、もしやねぶりも疎ましと、強きひあいを白菊に、うつすすがりも憎からじ。

㊿ 裾野曾我　　本調子

我は其方をか程まで、思ふと思ひ其方には、我をかく迄思ふとの、餘り〳〵に恨みられ、恨みし段はとんと早、過ぎて生野の道遠き、代々を重ねて女夫とは、我かそもじか何方やらが、言ひ初めしより此の仲に、なつたわいなうなりやした、お前は今宵仇をや、うつゝのやうにお二人の、御物語聞きしもの、ようも我等に罪深く、包みたまひし恨めしとぁひのて涙は袖に瀧つ瀨の、音にな立てそ今宵かの、祐經討ちてその後は、としてかくしてどうしてと、實ばかりなる囁きの、角を憎みし盃も、明日は裾野の露雫。

赤木勾當の房の三つの調の、世の人に勝れりけるは、鶺鴒巣軒の序の文につまびらかなれば、今更言ふにも及ばず。然あるのみにあらず。敷島の道に志ありて、平常これを執行へる故に、和歌組唱歌にも、伊勢物語の全部の歌二百九首を、そのまゝにて用ひられ侍るは、奥旨ある事とかや聞え侍りぬ。さるを、心あらん人々の賞美し給へる心にや、和歌一首づゝを給はりけるが、皆三味線に心引きての歌ども也。かゝるかしこき人々の深意も、此の集を企て侍りし故に設けたる事にし侍れば、徒に止みなんも本意なければ、この濱荻の奥に、書きつけ侍らではと思へる心と見え侍りける。人々の賜べける折節ごとに書きしるし侍るなれば、四季戀雜神祇等の差別さへ無く、うち交へてしるし侍りぬとぞ。まことに目に見えぬ鬼神をも哀れと思はせ、男女の仲をも和ぐる道なれば、荻の葉すぐる風の音に、諸人の伏し靡かん事をさし入れぬ。

于時享保第十六辛亥の曆春三月上旬詞翫苑の花の露を硯にうけて厚和染筆

藤原俊直

音聞けはいとも勝れり四つの緒に一筋足らぬ調ながらも

源義風

手枕に通ふ調の糸の音はわが獨寢の心ひくらん

源成直

糸にしも音を移して君にいざ見せんとさぞな心ひくらん

源正慶

糸筋に心ひかれて春は花秋は紅葉の色々の聲

源秀村

聞くにその調は三つの自ら琴の音にだに劣るべきやは

源伊仲

樂みをうるまの國の傳へ來て代々に絕えせぬ三つの調は

橘康直

色も香も知る人あらば我が宿の梅の花笠見せんとぞ思ふ

源忠房

心ある人にしもいざ見せんとて深き惠をのべし言の葉

藤原正信

珍らしな玉の小琴に類へても音は勝れる糸の調は

藤原經忠

徒然をいかに慰みせんかたも無しとは言はじ調添ふ聲

源忠清

世の人にいざ見せんとてうつし置く調の糸の筋な違へそ

藤原正昌

ひけば猶うかるゝものよ人心三つの調の糸によるらし

源章堯

松菊の淋しき國にひきかへて糸も三筋の道ぞ賑ふ

雜躰堂梅員

花妻に心ひくらん糸萩の三筋によるの小男鹿の音は

源元忠

諸人の勇みとなれる三つの緒の心の花の色をうつして

菅原氏女

限りなき和歌の浦回の藻鹽草見せんと誰かかき集めけん

權大僧都法印蓮水

いさみせんいと草深き松の戸の花の色香を人も訪へかし

權大僧都法印眞水

筆に盡き詞に餘り戀をいさ見せんたよりの道尋ねばや

權律師俊海

いざみせんたけきもいかに敷島の道に和ぐ心なるらん

橘正武

都まで駒ひく人も來れかしさやけさ見せん望月の空

源惟清

山深み人は梢にはし鷹のみよりの翅見せんとぞする

源正幸

掬ぶ手の涼しさ見せん友もがな波の花散る瀧の白糸

源高良

青柳の糸なかりせば何にかものどけさ見せん春の初風

源清香

いざ見せんとへかし山の奥までも春にはもれぬ花の夕映

老女　源氏圓子

何事をいさ見せんとや老の坂誘ひて急ぐ月日なるらん

源氏寶子

夕闇の野路を照して誰が爲にいさ見せんとて螢飛ぶらん

源氏榮子

山の端にうき雲かゝる月影の入るさ見せんと拂ふ秋風

第八　琴線和歌の糸

藤原氏薫子

散らぬ間に手折りて君にいざ見せん今日を盛りの花の色香を

橘氏村子

くりかへし思ふ心も勇むかないつか忘れん糸の調を

平知胤

つれも無き人に幾度書きすさみせん方もなき戀ぞ苦しき

大口姓方矩

いとゞ增すものうさ見せん待人を忍ぶにもるゝ闇の月影

在原久精

駒並べていざ見せんとや芳野山奥ある花の果し無ければ

源成春

露むすぶ柴の庵に人も訪へ哀れさ見せん秋の夕ぐれ

源吉氏

聞くもいざみせん調の糸の音に憂きも忘れて千代や經ぬらん

源陳祐　十四歲

昨日今日降りしく庭の紅葉ばをいざ見せんとて人ぞ待たるゝ

源姨子

掛けきつる玉づさみせん人しもや鳴きてぞ過る天つ雁

平氏女

小夜更けて宿をもわかず遠方の調ゆかしき獨寢の床

赤木勾當觀勇子

恥づかしさ嬉しさ身にぞ三つの緒によりくる人の玉の言の葉

此の濱荻にもと思ひよそへて神風に普く靡くを神祇の心に詠み侍りける

詞翫苑厚和

なべて世の高き賤しき神風にそれさへ靡く伊勢の濱荻

濱荻終

京　山村半右衛門

享保十六年五月吉日　江戸日本橋　小川彦九郎

序

夫絲管の道に三味線ほど律に入り易きものなし、取捨は時の風雅に適ひ侍らん、詞賦詠歌みな樂の根元なり、樂器は枝葉なり、根元の歌辭を失ひ、枝葉ばかり殘れり、世に流布なす唱歌數ふるに盡きず、松の落葉の散り積り濱の眞砂の盡きせじな、今三味線の上田に撥を以て耕し本手端手長歌端歌二上り三下り新曲數品の苗を植ゑなば又音律の二葉も出で來なんと、御代も豐かに壽長う和歌の糸と題し、五の木々に卷きとめ畢んぬ。

寛延四辛未年仲春

三味線濫觴

夫三味線の濫觴を尋ぬるに、往昔阮咸といへる唐人銅を以て丸胴に作り、月琴と號け音律を悟らしむ、其後琉球國に於て銅胴を木を以て作る、時に吾朝人王百五代後柏原院の御宇に梅津の少將とて音樂の達人あり、應仁の亂の頃物騷がしきとて長門の國に移り、大內良隆の所に居給ふ、門弟多く出來、一人の達人と成り給ふ、此時陶

氏と故有つて少將殿を闇討にすべきよし、門人聞きつけ少將殿へかくと告けて、早く立退き給へと諫めければ、少將殿驚き良隆に告け給へば、良隆殿より毛利元就殿方へ移し給ふ、此時難風荒く少將殿御舟吹き流され琉球國へ着き給うて、何某の娘と契りを結び給ふ、此娘月琴の名人なり、少將殿月琴の秘曲を傳受し給ひ、夫婦とも月琴の名人と流布す、時に琉球國の王聞しめし、夫婦を召し國王の御前にて月琴の曲をなし給ふ、則王位を賞して歌を作り諷ひ給ふ、今の琉球組是なり、王秘曲を感應し給ひ、少將の故郷の事覺しめし、嘸懷かしく思ふべし、早く日本へ歸るべしとの仰せによりて、夫婦ともに豐前の國石田村へ渡り給ふ、此所にて一子誕生あり、名を石丸と號す、晩年の頃兩眼盲し給ひしが、父より月琴の秘曲を受け繼ぎて其形を物數奇あり、丸胴を角胴に造り給ふ、今の三味線是なり、然れども月琴の心を以て、海老尾の所に月の形を殘し給ふ。其後石麻呂を石村檢校と贈官し給ひ、今の世まで琴三味線の元祖と仰ぎはんべるものなり。

琴線和歌の糸卷の一

本手新組

正　月　子の日

△引き初むる子の日の小松なほ數添ひて、君ぞ見るべきのどけさは、今日ぞ千歳の始めなる。

△佐保姫の霞の衣たち重ね、八重咲く梅の、立枝に宿る鶯の、聲うらゝかに春はきに。

△若菜摘みつゝ萬代を、祝ふ心の道直ぐに、神の惠みぞ深かりき。

二　月　久方

△君が齡は久方の、光のどけき春の日に、花の散るべき風もなし。

△草葉も聲も春の野に、あさる雉子もおもしろく、君がみゆきの古道の、名は千萬も限らじな。

三　月　三千年

△長き例と三千年の、花てふ花の紐解きて、開き初めけり御代の春。

△治まる御代の春の風、枝を鳴らさぬ絲遊に、雲の雀も時を得て、上る聲さへのどかさよ。

四　月　葵

△朝な〳〵や日に向かふ、色も變らでいつまでも、世々を重ねて二葉なる、加茂と日吉の葵草。

△聞く度に珍らしければ時鳥、いつも初音の心地こそすれ、橘の香を懷かしみ絕えず訪へかし。

五　月　水鷄

△忍ぶ戀しも逢坂の、關の戸さゝぬ御代なれば、叩く水鷄も愛でゝ聞く。

△曇りなき世の影見えて、水も滿ちけり足引の、山田の早苗とり〴〵に、民の仕業も賑しき。

六　月　みそぎ

△草深く繁る夏野も大君の、道狹からぬ惠みにて、往來の人も賑しき。

△川波の音も靜かに千歳まで、神やうけひく夏祓ひ。

七　月　初秋

△治まる御代に來る秋は、松風の音も靜かに、降る雨も晴れ潤ひて、四面の景色ぞおもしろき。

△天の川逢瀨も代々の爲に立つ、七の夕の、星の妹背の、契りはなほも久方の空。

△賤が門田も色附きて、野も山も生ひ滿ちにけり今日よりは、稻葉そよぎて〳〵秋は來ぬ。

八　月　名月

△野田も山田も八束穗に、滿ちたる君が惠みも廣く、田面に落つる初雁も、澤邊に遊ぶ豐かさよ。

△今宵は秋の最中ぞと、竹の葉の露酌む影も、曇らぬ御代は久方の、月の光も增鏡。

九　月　重陽

△九重の秋を重ねて、世の中よしと菊の酒、酌めや〳〵御藥を、君の爲に捧けん。

△流れ絕えせぬ山川の、影も匂ふや何時までか、汲みしは昔今とても、老を延ぶらん菊の下水。

十　月　時雨

△何時の世に時雨初めけん今もなほ、道直ぐなれや僞りの、無き世なりけり神無月。

△冴え初むる今朝の初霜、幾千歳をや〳〵、鶴の毛衣重ぬらん〳〵。

十一月　神樂

△萬代や千歳と歌ふ朝倉の、聲澄み渡る君が代を、神も久しく〳〵守るらし。

△遍き大御慈み、八洲の外の浦々も、眺めえならず幾千代も、豐かに住める友千島。

十二月　御幸

△面影の何時までも、變らぬ色に降り積る、梢はけにも豐年の、例なりけり雪の花。

△春を隣りのしるしとや、まだきに梅も咲き匂ひ、心のどけき君が代は、幾久しさも限らじな。

右十二ケ月の新組野崎事深草檢校の新作也此新曲相傳の時師へ一禮の法式あり。

琴線和歌の糸卷の二

新長歌目錄

一　岩根の松　市川撿校作
二　若松　野川撿校作
三　子の日　同人作
四　靍鶴　藤林撿校作
五　朝歸り　市川撿校作
六　思ひ葉　玉井撿校作
七　關づくし　藤林撿校作
八　貴船　同人作
九　常磐木　連川野崎事撿校作
十　夏景色　深草撿校作
十一　泉川　同人作
十二　千年の秋　同人作
十三　冬景色　同人作
十四　松の雪　同人作
十五　村時雨　同人作

十六　春の夜　同　人　作
十七　夏の夜　同　人　作
十八　秋の夜　同　人　作
十九　冬の夜　同　人　作
廿　新子の日　同　人　作
廿一　あけつげ　同　人　作
廿二　淺　茅　蓮川撿校作
廿三　淺茅生　深草撿校作
廿四　大和琴　同　人　作
廿五　葉　櫻　蓮川撿校作
廿六　名　月　深草撿校作
廿七　忍ぶ山　同　人　作
廿八　誰が袖　同　人　作
廿九　片　糸　同　人　作
卅　東景色　同　人　作
卅一　池づくし　同　人　作
卅二　外題づくし　同　人　作
卅三　六段れんぼ　岸野次郎三郎作
卅四　いさゝめ　今川勾當作

卅五　八重霞　繪橋撿校作
卅六　如　月　同　人　作
卅七　難波獅子　同　人　作
卅八　東窓　深草撿校作
卅九　明の鐘　同　人　作
四十　つゝじ　藤林撿校作
四十一　四季の文　吉村撿校作
四十二　しをり

一　岩根の松

君が代は天の羽衣稀に來て、撫づとも盡きぬ岩根松、常磐の色も春來れば、今一入に增鏡、曇らぬ御代に住み慣れし、土の車の我等まで、豐かに住める武藏野に、月の入るさの山もなし、草より出でゝ草にこそ、入間の郡み吉野の、田面の稻葉數積みて、民の竈も賑ひて朝な夕なに煙立つ、霞が關を洩らさねば、名は假初に白眞弓、弓は袋に有明の、月のどかなる玉川に、晒す手作りさら〳〵に、絶えせぬ御代こそ久しけれ。

二　若　松

百夜通ひの春立つ霞、四方の山風いと靜やかに、枝を鳴らさぬ高砂の、松の綠も今一入に、色も若松、野邊の小松を引連れて、歸る山路に鶯の聲、朝な〳〵に慣れてぞ來ゐる、梅の花の手岸の姫松千歲の春に、逢はぬ契も今日解くる、氷に代へて結び松、身は老松の雪を頂く翁草磯憤松の葉散り失せずして、柾の葛永き日も、飽かぬ色かな君が代は、年の數をも白砂の、渚の眞砂や敷島の、和歌の浦浪面白や。

三　子の日

千代兼ねし常磐の松は、猶も御代をば仰ぐなり、君の手が代の治まる國や四つの海、岸打つ波ものどかにて千歲を過ぐる雛鶴の、すむなる枝に巢をくひて、惠みも深き玉川の、流れに住める我等まで、心浮木の龜は又、萬代までも幾千代と、二上りけに治まれる時津風、君に引かるる松が枝に、立ち寄る影のいつまでも、老いても朽ちぬ常磐木の、誰の手か言ひけん瑞垣の、久しき代々を祝ひ初め、高き屋に登りて見れば煙立つ、民の竈も賑ひて、治まる御代のめでたさよ。

四　雛　鶴

雛鶴がその枝々に巢をくひて、君も豐かに我も豐かに、住める御代とて久方の、光のどけき春の日に、靜心なく花や散るらん、手に散ればこそ〳〵、いとゞ櫻は目出

度けれ、散らぬを待たぬ春霞、誰か忍ばん鶯の、間の手谷より出づる聲冴えて、野の末山の奥迄も、同じ恵みに逢ひ竹の、齢千年の松もなほ、君に引かれて萬代や經ん。

五　朝歸り

朝歸り、猶夜嵐の名殘とて、局の樞立ち籠めて、なほ睦言や殘るらん、上る繩手の横霧に、橋場大路の家遠く、瓦營む薄煙、南に高く巻き上り、草追ふ駒の嘶くは。牛の童が聲高く、宵に結んで朝に覺む、土手の番すが身は安し、それ次弟人皆かくの理や、沅湘日夜流れざる、河に瞬く早小舟、間の手いづれの人の移り香ぞ、蒲團いぶせくうちかぶり、泣きみ笑ひみ物語り、戀の友どちうち寢もやらで、いつか見附に着く舟の、二上り明け行くまゝに人白く、旅立つ馬の鈴の音、今朝も逢うたよ淺草橋で、なねつそれたよやよや〳〵舟越しに、間の手木調子或は深く寢迷ひて、日も早遙かに關け上る、鬢はしたなく青ざめて、目もとまばゆき笠の内、簾にとつゝくふときちが、呼び出す〳〵さりとは呼び出す思はくに、歸るさ遲や心誓文幾千度、行きて歸りて又急ぐ、迎へば變る人心、いづれ戀路は果しなや。

六　思ひ葉

紫の色に出でにし我が思ひ、忘れもやらぬ言の葉を、待つはつらいぞ待たるゝの、心ばかりに疊みこむ、閨の扇の逢ふことも、あふさきるさに物思ふ、身は唐崎の一つ松、つれなき袖に降る時雨、それかあらぬか音信か、通ふ心の夢をだに間の手驚き歸る衣打つ〳〵間の手砧の響狹の上風物さびて、萩の下葉に間の手置く露は間の手解けてほどけて零れて結ぶ、結んではもとの雫と思へども、招く尾花のほのかにも、君が姿は陸奥の、勿來の關を今こゝに、まゝにならぬは誰が身にも、ありとはいへどなか〳〵に、玉の緒は、絶えなば絶えよそれ次第、戀といふ字が大切。

七　關づくし

人知れぬ、我が通ひ路の關守は、宵々毎にうちも寢て、戀の流のしがらみに、慣れて人目の關しけく間の手しのぶの山の露涙、かゝれとてしも烏羽玉の、夜々毎に仇枕、獨り片敷く衣手の關　夕々に盥人の、濡れて刈り乾すわたづみの、海松を逢ふにてやみてたゞ、間の手それとばかりに勿來の關よ、霞が關の、かごとにも、秋風ぞ吹く白河の、關路の鳥は計るとも間の手よに逢坂の關の戸を、開けてなか〳〵許さねば、餘る思ひは我ながら、猶せきかねて胸は富士、袖は清見が關なれや、煙も波も、立たぬ日ぞなき間の手戀に品々障りがござる、忍ぶその夜の月影一つ、別れ遲しと鳴く鳥の聲間の手逢はで立つ名や、逢うての浮名、いづれ思ひの種ならん。

八　貴船

蜘蛛の網に、荒れたる駒は繋ぐも、二道かくるその人を、いかで頼まん仇し野の、仇し好みのまゝにはならぬ、月日程經て昔の譯を、思ふも濡るゝ我が袖の、港に絶えぬ仇波の、夜々ごとに立ち出でゝ、ふりさけ見れば大原や御室に近き小鹽山、紅の森の木の間分け、通ひ車の黄昏見れば、車の〳〵黄昏見れば、包むつらさの袂に餘る、譯を友禪左の腕、股にすけ様命と彫りし、その睦言もいつしかに、變る淵瀬と嘆いた、海人の捨船我一人、焦れ〳〵て行く水の、影さへ清き加茂川や間の手二上りやつれ果てたよ我が顔かたち、かくは見棄てそよしなやな、三尺袖も年が寄りなば、何振らうぞしやうがいな間の手振れや振れ〳〵ふる妻いとし、我ふる妻はあとにみぞろが池波に、ひよ〳〵〳〵と、鳴くは鵯、小池に住むは鴛鴦間の手濱千鳥が、ちりゝんな〳〵、ちりゝや〳〵りゝりとしてさて又ゑりくりゑんじよの、岩間々々を傳ふ、あしや千鳥足、西は田の畦危ない〳〵〳〵、危てならぬえ、細道畦道を、くゞりくゞつて、松の嵐に颯々と、漲り落つる鞍馬川本調子戀の淵瀬と身はたどれども、猶も思ひは丑の時、撞き出す鐘と諸共に、貴船の社に着き給ふ。

九　常磐木

松は常磐木、色添ひ増る若緑、千代を爭ふ友鶴の、雌雄の翼に養はれ、梢に巣立つ雛の聲、雲井のどけき春なれや、よもうらゝかに庭の面、池水に東風の吹き誘ふ、小

波寄する汀には、幾萬代を經る龜の、壽き盡きぬ君が代は、正に三笠の時津風、枝を鳴らさぬしるしにや、惠みになづく民草の、數も繁みて限りあらじと、あふぐ扇の末廣み。

十　夏景色

豐かなる、御代に住む身の嬉しさは、樂み繁る夏山の、松にかゝれる藤波の、うら紫に咲ける色、青葉交りの遲櫻、初花よりも珍しく、眺めも飽かで千早振る、加茂日吉の葵草、そのみ祭の頃ほひは、所々に若竹の、代々を榮えん例にや問の手又五月雨になりぬれば、早苗取るなる早少女の、よごれぬものは田歌かな、けに面白く潔や、香も深き花橘に、引かれて慕ふ山杜鵑問の手なほ遠近に訪れて、過ぐる景色や又の日は、あふさきるさの道の邊の、中に茂れる柳影、清水流るゝ涼しさに、しばし問の手とて汲む盃の問の手廻れる程は久方の、空も曇らぬ水無月の、夏越の祓清くして、千歳の命を延ぶぞめでたき。

十一　泉河

見渡せば、綠の若葉茂りつゝ、夏來にけらし白妙の、卯の花垣や問の手結ぶ手涼し遣水の、風情ありける小石巖となりて苔のむすまで、生きの松千枝に榮えて、長生殿の月日も遲く廻り來て、汲めども盡きぬ泉河、波さへ立たぬ御代ぞめでたき。

十二　千年の秋

千代松蟲の音も盡きじ、いつまで草のいつまでも、變らぬ御代は久方の、月の夕や紅葉の朝問の手常磐の松の影深く、眺めに飽かぬ山の景色、麓に近き道の邊の、霜かと見ゆる白菊の、花をかざして誰も皆、千年の秋をや送るらん。

十三　冬景色

あら面白の夕暮や、北の山邊に宿とりて、夜すがら鳴らす絲竹の、調子とり〴〵盃の、廻れや廻れいつまでも、變らぬ友や友千鳥、聲も冴えける小夜風に、ちり〳〵ちらと雪降り積り、峰も梢も白妙の、花に消たれぬ冬景色問の手春を隣のしるしと匂ふ、並ぶる常磐の松の風問の手琴の調べや竈釜の滾り、音も一つにうちこみて、變らぬなかこそ久しけれ。

十四　松の雪

萬代の聲も雲井に聞ゆらし、山路に遊ぶ山人も、齡ゆづるの慣れきつゝ、千歳や千歳君が代に、いつも變らで住吉の問の手住吉の夫婦と現じ數々を、守る榮えは鶴の子のその玄孫の末かけて問の手白妙の雪を頂く相生の、契盡きせずなほも又、若えて千代の春を松が枝。

十五　村時雨

なか〳〵に、契らじものを仇人の、憎からざりし言の葉を、思ひ初めしも世の中に、我ばかりかは白露の、消えよ消えなん身は厭はねど、君はよそにや逢坂の關、行くも歸るも忍ぶ身は、せめて情の糸による、ものなら別れありもせめ問の手なにを思ひにや焦れて燃ゆる、野邊の狐火小夜深けて問の手衾士の焚く火か筑紫の舟か、我も焦れて夜となく、晝とも分かで今はたゞ、思ひ絕えなんとばかりを人傳にだに岩代の三下り松はつれなや村時雨、染めても染まぬ常磐木の、春の若葉も哀れをかけよ、君はいつしか秋風の、吹きしく野邊は葛の葉の、霜に朽ちなん名こそ惜しけれ。

十六　春の夜

逢ふと見し、夢も短き春の夜の、覺めてはもとのつらさにて、枕流るゝ憂き淚、待たぬ夕や增ならん、情のまじる僞に。來ぬ夜更け行く我が袖の。怨みにしめる燈火も、薄き契と思ひ草問の手三下り煙の數に小夜更くれども、枕一つはそのまゝに、捨てゝも置かれず、よしやよし交す心と並べてみても。物言はぬこそァ、しんきァ、しんきやと、獨言いひ、待ち焦れたる折節に、梅が香散らす春風の、妻戸ほと〳〵訪れて、それかとばかり出て見れば、如くものぞなき朧月、獨り見るこそ物憂けれ。

十七　夏の夜

夏の夜は、臥すかとすれば時鳥、たゞ一聲の訪れに、はや明けぬると言ひおきし、人の言葉もあるものを、いでや今宵は更けぬ間に、過ぎし別れに殘るなる、その睦言を岩代の、濱の眞砂の數々は、盡きぬ情の下紐を、解けて心の奥までも、うらなく見せん薄色の、絲の衣をうちはえて、二上り煙管にくゆる煙さへ、積る思ひの類かと、思ふもさすがかた樣に、常ならなくに飛鳥川、もしや逢瀬の變りやせんと、うしろめたさの我が心から、よその直ぐなる心をも〔間の手ひきてみる氣は憎からじ、よしや思へばまゝならぬ、つらい勤めはいつまで朝のいつまで。

十八　秋の夜

秋は常さへ物寂びしきに、雲井の雁の四つ五つ、告げ渡るにぞ憂き事も、折しも四方の小夜更けて、妻戀ふ鹿の聲につれ、いとゞ思ひの增りくる、それさへあるにそよ〳〵と、荻の上風訪れて、誰そや砧の音せはし、せめて

聞洩る月だにも、暫しは宿れ誰がせかぬ〔間の手かれ〳〵すだくきり〳〵す、なほや彼方を忍び音の、かこちてもよし何かせん、いつそ枕も投げ捨てし身を。

十九　冬の夜

鳥も聲する萱が軒端の月影、さすがこの程、逢はで過ぎにし夢語り、盡きぬ思ひに弱る身は、淺茅が庭のきりぎりす、涙ひまなき床の上、拂はぬまゝに塵泥の、積る怨みは荒磯海の、濱の眞砂の數々を、言ひもはるけず起き別れ二上り又も訪へかし訪ひこんと〔間の手かたみに袖をしほりつゝ、末の松山波は越させじ、變らじと例をなかの誓言に、殘る燈火影消えて、心細くも立出づる、誰があとつけしたな橋の、霜いと白き冬の夜は、河瀬の千鳥泣き別れ、共に哀れを添ひぬらん。

二十　新子の日

今日は子の日の遊びといへば、思ふ友どち皆連れだちて、行くや小鹽の道々見れば、賤が仕業の暇と見えて、こゝ

に羽根つきかしこに手毬、玉やぶり〳〵春めき渡る、誰が垣根も床しく見えて、枝垂柳のいと青やぎて、風にたよ〳〵波よる影に、あをち山雀鴨頬白、おのがとり〴〵調子を分けて、聲ものどかに囀る音に、永き日影も暮れ方近し、いざや歸らん我が宿へ〔間の手二上り春は越路に歸らん頃を、いつの年より賴みやおきて、かゝる盛りの花咲く頃の、心のどけき都の春を、捨てゝ幾重の波路を分けて行くは怨めし飛ぶ雁の、なかに少しは都の空に、名殘惜しくもあるかと見えて、十や十一十二や三や、おのが樣々群れ行くなかに〔間の手聲もかはゆく遲れて飛ぶに、暫し休らへ文ことづてん、やがて紅葉の照りそふ秋に、聲をほにあけ皆連れだちて、渡れ都の池水に。

廿一　あけつげ

ほの〴〵と、鳥の八聲に明け渡る、霞に匂ふ朝日影、光りうらゝに治まれる、御代の春とて民草も、賑ふ宿の壽きは〔間の手龜の尾の山を頂く蓬萊に、群れつゝ田鶴の遊ぶなり、小波寄する浦島が、齡を磯に拾ふてふ、かひある

春に百千度、萬代までも相生の、松と竹との色深く、染むる柳や花櫻、藤山吹の風ものどけし。

廿二　淺茅

松を時雨の染めかねて、眞葛が原や淺茅が原、昔忍の岡とかや、その綟摺の摺衣、若紫の里出でし、光源氏の古言葉、なほ捨てがたき名殘とて、今紫のゆかりある、年新玉の初紫、誰が通路の道の末、若菜摘みけん土手の草〔間の手二上り春の名殘か櫻花、なけの情をかけて知る、橋場に立つや藻鹽燒く、蚊遣火ふする夜も深く、尾上の鐘の〔間の手三下り曙を、吹きや散らせし秋の風、契りことなき我が思ひ、積り〳〵て白雪の、いつか解けなん戀の山。

廿三　淺茅生

忍ぶれど、餘りてなどか戀ひしさの、昨日はあれど袖の露、色に出でなん小夜更けて、おき所なき蟲の音に、怨みながらも又うち向ふ、月はゆかりか憂き人か、とてもこの身はァかひなき憂き身、花の曙紅葉の夕、移る眺め

もあるものと、末の契りを思ふにぞ、つらき命が惜しまれて、住むも果敢なき同じ世に、せめて頼むは夢ばかり。

廿四　大和琴

初秋風の草枕、ゆふしの山の木の下に、落つる一葉の夕露も、身にしむ頃の宿訪ひて、まどろむ夢に誰としも、知らで見えくるたをやめの、思へばありし古に、聞きつる桐の大和琴、猶も思ひは朽ちずして、現れけるか　間の手　いかにあらぬ日の時にかも聲知らむ、人の膝の上我が枕せんと、一首の心をのべたりし、やがて返しの言葉にも、言問はぬ木にはありとも美はしき、君が手慣れの琴にしあるらし、　間の手　それは幾年古ることを、めづらしや定家卿の、戀の心に寄せ給ひて、昔聞く君が手慣れの琴ならば、夢に知られて音にも立てまし　間の手　これだに今は遠き世を、猶語らんと言ふがうちに、秋の夜長き假寢の床　間の手　桐にしたゝる軒の雨、琴の音にやと聞きなせば夢は昔に覺めにけり。

廿五　葉　櫻

つく〴〵と、思ふ夕の葉櫻に、雨の音せし寂びしさの、憂きを問ひくる時鳥、鳴く音比べん我が涙、枕の房も露含む、夢さへまかせぬ面影の、猶懐かしき移り香も、深き情の數々に、いつを誓ひて結びてし、指の紙縒もしどけなや、憎や似けなき柴の戸に、風の薫りし花菖蒲、その古のわけ人も、名のみ殘りし月の影、庭の木賊の冴ゆるにも、君待つ程の物憂さを、かこつかたなき閨のうち。

廿六　明　月

春の夜の、朧月夜に如くものぞなきと、歌にはよみぬれど、湖水にうつる秋の月、影澄み渡る波間より、四つの調べの音添へて、名にし近江の琵琶の湖、又も類ひは嵐吹く、三諸の山は遙かにて　間の手　二上り　峰より晴るゝ夕霧の景色えならぬ折からに、紅葉を分きて出づる月、錦に包む鏡山、曇らぬ空に飛ぶ雁の、數さへ見ゆる今宵ぞと、月に友をば待宵は、千夜を一夜になせりとも、言葉殘りて鳥の音も、八聲の外は聞き捨てよ、捨てゝもよしや後朝に、殘りてうつる月影は、四季の月には荒磯の、波の寄る瀬の涙川　間の手　三下り　せき止めかねつこの頃は、色にぞ出づる紅の、あからさまなる月見ぞと、その言の葉を書き送る、筆に任せて隅田川、東の月はいかばかり、都鳥に言問はぬ、名所の月は多けれど、草より出でゝ草に入る、その月こそは武藏野よ　間の手　本調子　四海山水野邊の月、千里の外の月とても、同じ雲井の月なれば、いかで變りはなきぞかし、怨みられつゝ怨みし人も、共に消え行く露の身と、知れどもさすが又の月、思ひ出すは世の習ひ。

廿七　しのぶ山

言へばえに、岩もる水の湧きかへり、落つる涙をせきあへず、袖の柵人間はゞ、何と答へん白雲の、消えもはてなで晴れやらぬ、思ひをかくも須磨の浦の、沖にたゆたふ友なし小舟、こがれ寄邊も波の上　間の手　浮かれ心のいつかはと、頼む妹背の山になど、なかを隔つる吉野川の藻にうづもるゝ玉柏、現れてしも脈はじと、思ふはこの身、脈ふ浮名は君が爲　間の手　とは思へども仇にのみ、何時まで月日過ぐさまし、なほあやにくに尋ねみん、忍ぶの山の奥の通ひ路。

廿八　誰が袖

人知れぬ、逢ひ見しことの積りては、淵となる積むかみなの川、移る月日の末さらに、つらしねたまし心なき、岩にせかるゝ浮波の、割れて今はた物思ふにも、ありし私語の眞ぞならば、語りあふ瀬も程なきものと、暫し心を靜めはすれど、あたゞしん氣や僞りの、なき世ならずと知れど又、さすが思ひの數さへ添ひて、涙は胸に湧きかへり　間の手　なほせきかぬる曉を、さぞとも知らばその人は、又誰が袖を濡らすらん。

廿九　片　糸

八重の潮路を隔てゝ住めば、かはす間もなき憂き枕、解

けぬ心のあやにくに、名殘ぞまさるいとゞ猶、潮なれ衣かた敷きて 二上り 思ひ寢る夜の夢にだに、その面影の見えもせで、包むにくゆる藻鹽草、焦れゆく身の慕はれて、よその勤めも大切に、見せつ見られつ暇なき、心の糸の一筋に、かけし誓ひは仇し世の、移ろひ易き花の色、外に散らさぬ言傳も、禿が袖にしのばせて、見し嬉しさもいつしかに、我のみ思ふ片便り、まつにつれなき秋の風。

三十　東景色

飛鳥川淵は瀬となる人心、澄むも濁るも波風も、聞かぬ山路の奥住居、とは思へどもまゝならず、こりぬこりきにたきつけられて、よきもわるきもみな浮木ぞと、見ながす川の寄る瀬を頼み、こゝに木屋町忍びて住めば、人の心の良い裏座敷 間の手二上り 誰にか見せんあれ宮川の、銚子取る手も見えすく景色、月の眺めは陀羅尼の鐘や、かう高臺寺子安寺、あれは大佛ゆみいのだう、八坂はこゝに清水や、こゝは丸山祇園町、伊達を四條のはしたなく呼はる木戸の寄太鼓 間の手三下りつれて憎きは石垣傳ひ、かにがずしより出づるもあり、本調子なほ夕暮の町景色、柳櫻をこきまぜて、都の錦色々の、けいはくこゝに留りて、やらうかたなき盃は、やんしうをかけて聲々に、騒ぎたつるも面白や、また三味線の音に立てゝ、娼の一節色深く、戀の白無垢、現ながらにしら〳〵と、有明月の夜すがら、我身の夢も醒まされて、餘所にこがるゝ高瀬舟。

三十一　池づくし

池水の、底の玉藻の水隱れて、靡く心を誰にかは、寄せん堅田の獨寢の、鴛鴦の妻戀ふよるかの池に、姿鏡のかほの池、うつる日數も長井の池と、思ひ益田の澪標、忍び逢ふ夜はたまさかの池、憂きを猿澤清澄の、積る思ひをいはねの池と 間の手二上り 二人雙の池の面、憎くや鶏なほ鐘の聲、聞かず顏なる耳梨の池、またの逢瀬とその後朝の、袖に涙をおさへの池よ、かゝる緣は飛鳥の淵と、變る心や消息もとをち、脇へ生田は一見をかけし、から人のつらや我が身の秋の池、時しも月の照り添ふに、曇る心のあぢきなく、蘆間を分けて鳴く鴨の、已が友呼ぶ昆陽の池、まして緣の池よりも、末長澤の池までと、いつか手池に不忍の、夢になりともまた大澤と、夢になりとも大澤と　枕ばかりの手遊に、獨りいぶせき閨のうち。

三十二　外題づくし

高麗唐土の二十五を、十の三つ緒に日本の、琴の絲すぢ道直ぐに、琵琶の四つの緒三つの絲、引く薄霞東雲の、初梅づくし盡きしなく、なほ幾春も久方の、月も朧に春日野や 間の手若草青く吹き分くる、春風の聲水の音、波の文なす絲竹の、節にいづれか洩れざらん 間の手二上り 貫之の雪散りかゝる梢の櫻、土筆とる、袴の色か小紫、春草もやゝ夏草も、たけ行く君が年月に、晴るゝ間もなき繼衣、名をさらしたる玉結び、思ひ懸籠を筑紫潟、浮寢の筆は藻鹽草、はかなく送る心根は　一夜手枕波枕、現も夢も小夜衣、返しあるかと待つ長さ、頃も砧の更けわたる、 間の手空も秋草置く露は、我が涙の玉筐、蓋なき閨の姿見に、寫せばさてもやつれしな、身は冬草のかれ〴〵に、小櫛亂れてちら〳〵と、菊に尾花に時雨咲き、焦るる末はうち靡き、四季にめでたき妹と脊と、二人結ぶや數へ歌。

三十三　六段れんぼ

松の枝には雛鶴巢立つ、谷の流れに龜遊ぶ、流れにな、流れに谷の、谷の流れに龜遊ぶ 間の手沖の石とは愚かの沙汰よ、乾く間もなき袖の海、愚かのな、愚かの沙汰よ、乾く間もなき袖の海。

しんき篠竹伊豫すの簾、かけて思ひをいつまでも、思ひをな、思ひをかけて、かけて思ひをいつまでも 間の手戀ひ暮し戀ひ明し、松に時雨を眞葛が原と恨みしも、今は嬉しやな、靡き逢ふ夜の飽かぬ契りは千代も變らじ。

三十四　いさゝめ

筑波嶺の、峰より落つるみなの川、戀ぞ積りて淵となりぬる、積りて戀ぞ、戀ぞ積りて淵となりぬる。

三十五　八重霞

八重霞、たち隔たれど來つゝ鳴く、聲はまがはぬ春の鶯

問の手花に名殘は惜しけれど、歸らうやれ夕暮。

三十六　如月

かざしゆく、道行く人の袂まで、櫻に匂ふ如月の空問の手

飽かぬ眺めの夕暮、つれかへる鐘の音。

三十七　難波獅子

君が代は、千代に八千代にさゞれ石の、巖となりて、苔のむすまで立ち並ぶ、八つほの椿八重櫻、ともに八千代の春に逢はまし問の手高き屋に、上りて見れば煙立つ、民の竈も賑ひにけり。

三十八　東窓

逢ふ時は、語り盡すと思へども、數々殘る言の葉を、思はでつらき、鐘の聲々聞ゆなる、それのみなるか鷄の

まだきに鳴きて夜も明けば、狐に食めなど託ちつゝ問の手

三下りあふさきるさの物思ひ、とかく逢ふ瀬の涙川、袖のしがらみせきとめん、なほも思ひは增り草、葉末に置ける露の身が、もろき命は知らねども、又いつ〳〵と言ひかはす、言葉のうちに後朝の、別れを急ぐ東窓、明けて悔しき玉手箱。

三十九　明の鐘

起き出づる、袖の別れは今までの、心づくしも何ならず、憂き鳥の音もいつかまた、逢ふ夜の床に厭はせじ、人も名殘を慕ひてや、指櫛とりて鬢なでゝ、言ひし情のひと言葉、いかなる世にか忘れめや問の手二上り傾ぶく月のさやけさに、あと見返れば君が住む、宿の梢の末葉さへ、なか〳〵つらく懷しき、その面影は身に添ひて、歩めど戀の後髪問の手ひき戻されてしよんぼりと、たちやすらへばこゝかしこ、門守る犬のかしましき問の手聲を防ぎに打つ飛礫問の手三下りやう〳〵過ぎて行く先の、東の山もほの〴〵と本調子明けなんとする鐘の聲、よそ目をよけていと

ゞなほ、心苦しき道芝の、露も涙を爭へり。

四十　つゝじ

さなきだに、春風ゆかしみ吉野の、里に流るゝ櫻川、花とは見えじ谷々の、雪こそ見ゆれ紅しぼる、八重紫や小紫問の手二上りゆかりの水の吉野川、朧の月のひま〳〵にせめて一本をりいりて、花の情のその奥を、尋ね〳〵て奈良坂や問の手兒手柏のふた面、とにかく物を思へとや、岩根の山の岩躑躅、嵐の山の峰の高松問の手時雨にさへも染まで幾年過ごす身を、けに春毎に咲き初むる、を霧島や小霧島、牡丹躑躅の色遠く三下り薩摩せんよの花盛、夏山かけて問の手薫りくる、その花車愛らしく、いと紅に飛び入りまんよ、籬躑躅の花の露、手にや結びて我が袖に、暮れ行く春をしばしとゞめん。

四十一　四季の文

消えあへぬ、雪の下草打拂ひ、誰み吉野の、若菜摘むより霞む空、山わけ衣はる〴〵と、暮るゝも知らで山の端

に、眺めを殘す夜半の月、朧なりとて恨みもあらじ朝の花の盛りには、誘はれて來し鶯の、羽風にさへや散りなんと、心も空にあくがれて、降る春雨に名殘なく問の手つれて散り行く花の香の、袖にしばしはとまれかし、二上りその花染めの袂をも、今朝脫ぎ更へて靑葉のみ、又卯の花に時鳥、短き夜半をうら紫の菖蒲草、假寢の草の枕結ふ問の手小田の少女子早苗とる夕暮ごとの風待ちて、岩洩る水の淀みなく三下り流れて桐の一葉より、うたゝ寢覺に袖濡れず、荻の上風萩の露、心盡しの數添ひて、峰の嵐に鹿の聲、うち寢る夜半の蟲の音に、夢も結ばぬ手枕を問の手さし入る月や我を訪ふ、影さへいとゞはづかしの、森の木枯露霜に、さしも染めてしもみぢ葉を、などかは誘ひ捨てつらん本調子はや池水も面變り、氷れるひまに共寢して、明くるを鴛鴦の音に立てゝ、玉藻の床や別れ憂き、蘆間に消えぬ玉霰、今朝は積れる遠方の、峰は雲間に現れて、降り積む雪に路もなし、尋ねても來よ見せまほしけに時につけ、折に觸れ、變る眺めぞ哀れなるいつを、いつを果とも驚かで、知らぬ翁になりはてん、鏡の影ぞ

いとも恥づかし。

四十二　しをり

あやにくに、移る思ひの上なき花よ間の手忍捩摺我ながら、怪しきばかり亂るゝ露も間の手桐のひと葉や間の手散らす秋風身にしむ暮に、かけてし言はゞ薄紅葉間の手殘る血汐の色深き、戀の山路しをりもいらじ、しをりもいらじ心ぞしるべ人は問へ。

琴線和歌の糸　巻之三

本調子端歌目錄

一　島臺　二　玉づさ
三　奥座敷　四　うつほ舟
五　里景色　六　狐火
七　嵯峨の秋　八　社口說
九　しがらみ　十　もろこし
十一　三瀬川　十二　松のうち
十三　寛濶一休　十四　こんきやうじ
十五　どうらく天　十六　芥子人形
十七　昆布道成寺　十八　惡所八景
十九　田螺　二十　八丈曾我
廿一　つとの雪

一　島臺

處千代座せ島臺に、けに共白髪尉と姥、常磐の風に、枝も榮ゆる松と竹、鶴と龜とが舞ひ遊ぶ、萬よろこぶ壽は、げにものどけき春風の空。

二　玉づさ

眞に文は聞の友、いよし御げんと書いたるは、絆の種か花薄、ほんに誓文いとしさに、幾夜の夢を結文、かた樣參る梅よりと、思ひ參らせ候べくの、分の盃色見えてわきていづみのおもはくは、たゞ逢ひまして逢ひまして、またの御げんを待つかしく。

三　奥座敷

ほの〴〵と、雀囀る奥座敷、燈火消す男共、屏風一重のそなたには、まだ睦言の聞ゆなり、我は見足らぬ夢を裂き、さらば〳〵の、聲もしどろに引き結ぶ、帶隱さるゝ戲れも、憎うはあらぬ移り香の、また盃の數ふれて、三の切れたる三味線も、引かるゝ程は引きみん、仇し心の仇枕、交さぬさきもあるものを、去なば去なんせよしやたゞ、獨り憂き身を數へんと、ほんの涙の色香にも、我が魂ながら魂なくて、投節死なざ止むまい我が思ひ。

四　うつほ舟

朝の雲夕の空、まつほの浦のうつほ舟、身をなきものに思ひ絕え、命もがなと、人を誠に大幣の、ぎゝの社の木綿襷、かけて縋るゝさゞめには、どうで末まで遂ぎやさんすまい、私が勤のまゝならぬ、宵々ごとの亂れ髪、そら恐しや氣に染まぬ、殿を添寢の枕には、鳥も鳴けかし鐘も鳴れ、投節嬉し東雲朝酒に、憂きを忘るゝその風情、恐い夢見し心なり、かうしたつらい月日にも、指折り折りつゝかた樣に、逢ふが嬉しうてうか〳〵と、どうしたことの緣ぢややら、忘るゝ暇はないわいな、深き思ひは床の海、波は越すとも末の松、變らぬ色を賴む身は、君と結びし下紐を、獨りは解かじ玉の緒の、絕えぬ嘆きはありともと、沈みはてにし敷妙に、二人が袖をや絞るら

ん、

五　里　景　色

更けて廓の裝ひ見れば、宵の燈火背き寢の、夢の花さへ、散らす嵐の誘ひ來て、間の手闇を呼び出すつれ人男、よそのさらばもなほあはれにて、埒も中戸の明くる東雲、送る姿の一重帶、解けてほどけて寢亂髪に黃楊の間の手黃楊の小櫛もさすが、涙やばら〳〵袖に、零れて袖に、露のよすがの憂き勤め。

六　狐　火

限りある身の限りを知らで、かひもなき世を打嘆き、何の因果に娑婆に來て、生きて添はるゝ身でもなし、加賀節月を見ばやと契りし人も、今宵袖をや絞るらん間の手何を思ひにヤ焦れて燃ゆる、野邊の狐火小夜更けて、思ひにヤ焦れて燃ゆる、野邊の狐火小夜更けて間の手仇し此の身をヤ煙となさば、せめて廓の里近く、廓のヤ廓のせめて、せめて廓の里近く。

七　嵯　峨　の　秋

嵯峨のあたりに、爭ふ秋の數々、蓬生に啼くきみ蟋蟀々々、蟋蟀鈴蟲松蟲機織、紅くくる小牡鹿、雲分けて雁、琴柱に落つる荻の葉、穗に出て招く花薄、捨てがたの夕や間の手通ふ千鳥の須磨の浦、怨みの數々淺茅生に、泣く袖かけじやかけじや、音に聞くさへうるさや仇波、枕も知らぬ獨寢、くみわけて訪へかし、潮干の石のいつしか、それともわかぬ思ひは、捨小舟こがるゝ。

八　社　口　說

月も入る入る匂かぬ別れの東雲、さらば〳〵の聲も絕えゆく小田の原、送り返せば、比叡の山風身にしみて、菜種の花の裏風、

同じく

戀の初風身にしむ程も懷かし、頃は文月誰が通はせの文月、七の夕の星も幾瀨の思ひ川、鵲橋をかけうよ。

同じく

ありしつらさに懲りぬ心のいつまで、憂きは玉の緒絕えぬ思ひに吳竹、幾夜伏見の夢も流れて涙川、しがらみかけてせかうよ。

九　しがらみ

絕えて絲はずと文をば通へ、文は妹背の、〳〵なかとなる橋となる、宵々濡るゝ我が袂。

同じく

あひは近うて逢はせはせいで、千賀の鹽釜、〳〵身を焦がす〳〵、宵々濡るゝ我が袂。

同じく

假の寢衣に焚物すれば、よしやわざくれ、〳〵色となる戀となる、後朝濡るゝ我が袂。

同じく

絕えぬ思ひと人には告けよ、今は難波の、〳〵みをづくし身をつくす、宵々濡るゝ我が袂。

同じく

朽ちてかひなし名にのみたちて、憂き身ながらの橋柱〳〵宵々濡るゝ我が袂。

十　もろこし

月を見んとて薄雲見れば、空に知られぬ深雪の降るはェ、櫻散りしく花紫のェ、色も深き小紫ェ、靡くは青柳、胸の煙に焦がるゝは玉葛、其の名高雄の唐土までもェ、唐土までもェ、

同じく

花に戲れ又時鳥、月に愛でぬる時しもあるにェ、年の名殘と降る白雪はェ、いづれあはれさりとはェ、移ろふ浮世ェ、長き例の松さへも朽つとの、扨ては千歲も一夜の夢かェ、はかなの此の身ェ。

同じく

憂いぞつらいぞ此里馴れて、染むも染まぬも逢はねばならぬェ、いつか思ひの八重霧晴れてェ、せめて夢になりともェ、わけある方へェ、まゝにならぬは誰が身にもありとの、それを賴りに憂き身を送るェ、此の年月をェ。

十一　三瀬川

西は堀河、中小川沅湘日夜東に、流るゝ水の賀茂川や、妾が爲の三瀬川、けに〳〵橋も三本木、頃は卯月とゆふしでの　ほんでん凄く立つ空の、こうやの燈火消え殘る影を賴りに踏み迷ひ、かしこゝよと定め得ぬ、いつそ二人が中の島、隱れ行く身の今更に、忘れぬ顏を今一度、見つゝ見られつ薄月夜、暫は映す水鏡、川を隔てゝほの聞ゆ、撥もしどろに引く三味線の、てうし〳〵と言ふ聲聞けば、飮み白けたる風情にて、夜も早いたく更けぬらん、わけと鳴き行く時鳥、誠冥途の鳥ならば、地獄の有樣語れ聞こ、聞くともいかで變らめや、今宵限りの憂き命、ひしき物には薄羽織、はおらで敷くも短さよ三下りどしおり帶の長枕間の手おきて見さんせな、後の世もあるに、今暫ぞや又寢の床、又寢の床には濡るゝか袖木調子東が白む、むら〳〵鳥の告げわたる、羽を交さん例には、褄と褄とを引き結び、共に假寢の夢すがる。

十二　松の內

新玉の空靑みたる曙の、常聞く鳥も若々と、若水早き車井の、廻りくる〳〵年の朝、去年のまゝなる亂髮、零れかゝれる指櫛や、誰結べとかしどけなく、しどけなりふり品定め、仕附苧殘る繻衣、どの袖引かん移り香の、峰に一掃夕霞、二日は茶屋に亥の日にて、手まづ遮る羽子板に、軒より傳ふ三下りつく羽根の笹に絡まれ、裳裾に毬が〳〵袖くゝる、手取に一つ袂に二つ間の手戀ぞ積りて何時の間に、丁度百ついた毬の數、木調子とんと落ちなば名や立たん、どこの女郎衆も下紐を、結の神の下心、かねて聞きたし問はまほし、三日は客の着衣始、抱いて子の日と一焚の、藁ほのめく奥座敷、君が千引と丑の日や、憂しとや言はん我が思ひ、何時か止みなん懲りずも通ふ、土手に明けたる身ぞつらき、大磯の鐘も七つ七戻り、寅に逢ふとて裾はつゆ、こづまあらし松風、けに君が代の繁榮は、虎も梶みなん千本の竹、梅恥しき磯の香に、まだ靑陽の暮寒く、假着の袂千早振、神も思ひのあ

ればにや、何時しか今日は後朝の、沅湘日夜東に、雨戶ち早く明くる日の、締めて寢ないん七草は、御行田平子、佛座、菘清白芹薺、君が爲とて若菜摘む、千種の色こそめでたけれ。

十三　寬濶一休

もとより此身は本來の、一物もなき假の世に、抖擻行脚と身をなして、始めて此處に紀の路なる、高野山にぞ入り給ふ、堂塔門院古事古蹟、拜み巡りて其の後は、花にも痛し首の骨、あら面白や小空腹や、けに本來のくうの字は、食にぬさきより見證の、悟りの眼ちら〳〵と、目ほしの花も散りかゝる、とある朽木に腰をかけ、疲れをはらさせ給ひけり、かゝる處へどだらくさんの大山伏、無性頰髭不人相、こくその紅を塗散らして、しまはんからのけ鬘、たぶの衣の尻括け、銅金卷の大鍋憂、尾頭かけて五六尺、金剛てつきの八角棒、だじやく無法に突散らし、一休和尙に立ち塞がりて、づこう不思議の似せ口上、これ御坊修行は法師の業と聞く、修行成就致いての、利

得は如何にと申しける、一休は聞召し、それ三界の大導師、釋迦如來の古は、檀特山に籠りゐて、阿羅々仙人を師と賴み、三十成道遂げ給ふ、愚僧なども修行を遂げ、さて成佛の道とほる、かたぐ〳〵の如くなる、山伏たちは何時が峰入り、五月六月盆の頃、腰に法螺貝びつ付けて、金剛杖を押立てゝ、力に任せておせささ、おゝささ、酒々六盃飮んだら煮しめに初茸こんごう蒟蒻、ふし汁千盃大食上戶、一食一菜何しよにやたいじかさあ、えいや〳〵役の行者の後を繼ぐ、大峰葛城釋迦が嶽、霞を潛り霧を分け、雲に起き臥す兜巾も外れて、ころり〳〵やつころりと轉けの行、跛ひき〳〵金峰山、木の根に取付き取付き探りつき、捩らすどつこい腰を捩らす檜笠、一の覗きの裏壁谷、喘り峠や探り坂、探り探つて頂上へ、登り着いたる行者なり、なか〳〵御坊の如くなる、新發意小僧の晝念佛、物の數にはあらねども、欠伸勝ちなる春の日の、眠り覺しに生灸、いで行くらべ致すべし、一休は聞召し、祈りて行のその驗、見せ給へと曰へば、いで〳〵さらば祈らんと、嚴多角念珠を押揉んで、一祈こそ

は祈つこり、ほうえい〳〵、えい神のお前にやれ井戸堀れば、水は涌いで金が涌く〳〵な、やれこりやそつくりそく〳〵と、いんなんしんなんおんなんあいりう、はうりやうりつていを、是にて驗もなきならば、七の夕の星祭、鹿島三島諏訪熱田、貴船は五社大明神、高きお山は愛宕山大權現、鮫馬の山には僧正坊、讃岐に金毘羅飯綱の三郎山々の大天狗、只今行力見せしめ給へと、責めに責めてぞ祈りける、やあら不思議や晴れたる空より、大雪降つて山々嶽々押並めて、皆白妙とぞなりにける、一休は御覽じて、是べきの小雪を捨てうとも捨てうべい、そびくともそびくべい、是べきに引いてくりよ、えいや〳〵えとうな、扇を颯と開きつゝ、はら〳〵と拂ひ給へば、さしもの大雪、朝日に霜とぞ消えたりける、山伏大きに怒りをなし、こゝはくさりの一盃入り、續きの奇特を見せ給へ懺悔々々六根罪障、おしめにはつだい金剛童子、うななぜおしめにはつだい金剛童子、叩き出された倘も行力見せ給へと、赤手のこつほう摺剣き〳〵、へべにへべてぞへべたりける、かゝる所へ不動の尊體、花火の仕掛けで現れ給ふ、是見たかさいどうな、一休拂子振上げて、汝不動け汝不動け、かつかかつからかの喝と唱へ給へば、不首尾しまひに不動は目黒へお歸りさばえ、手練かな山賣かな、けゝらけいわん手てんがう、今時その手を食ふべいか、さあしゆつとも言つて見ろ、山伏ほつきと我を折つて、只平蜘蛛と見えければ、一休すこし人柄にて、こは現銀なる御慇懃、かやうに申すも拙僧本意にあらねども、けふの釋迦の御弟子と思しめせ、みす〳〵某は佛菩薩の化身とて、諸々の嘘の八百吐き散らし、此の後ならず沙汰なしと、笑つて左右へぞ入りにける。

十四　こんきやう寺

さるほどに、こんきやう寺のこんきやう門きやう法印が、座の眞中につゝと出て、こんきやう寺のこんきやう門きやう法印が、法力をあらまし御目に掛け奉る、御寶前にやがて壇をぞ飾りける、百八の燈明の油には、白胡麻からやら、黒胡麻からやら、眞胡麻からやら、犬胡麻からやら、胡麻から胡麻からひ胡麻から、眞胡麻からの油を立てられたり、さて入木には珍らしや、一反へぎ長へぎ干生薑、木天蓼つみ蓼粒山椒野撫子野石竹、きく切りきく切りみきく切り、是を併せて六きく切り、切つて掛けたる幣帛は、大奉書中奉書小奉書、さて又本尊に掛けられしは、のら如來のら如來三如來六如來、これを併せて十二のら如來、又それを併せて二十四のら如來の眞言に、向ひの長押の長長刀は、誰が長長押の長長刀ぞ、兵部が前を刑部が通る、兵部が屏風を刑部が持たずば、坊主に買はせてしやうぶが坊主の屏風にしよ、向ひの山のつる〳〵〳〵〳〵鶴頸は、白鶴頸か藍鶴頸か、眞黒黒々鶴頸をひつ立て振立て祈れども、少しも驗はなかりけり、僧は大きに赤面して、重ねて奇特を見せんとて、袈裟も衣もおつとり置いてな、殿樣の長袴、若殿樣の小長袴、武具馬具〳〵三武具馬具、これを併せて六武具馬具、お膳箸百八十膳天目百盃茶百盃、棒八百本立並べ、責めかけ飲みかけ祈れども、されども驗はなかりけり、僧は大きに怒りをなし、けに我とても上方僧、書寫山社僧の惣名代今日の奏者は書寫ぢやぞ〳〵、しよざいも世帶も之まで

かと、錫杖がら〳〵さゞ〳〵と、振りかけ〳〵祈れどもちつともそつとも驗もなし、いで法華經にて祈らんと、妙法蓮華經陀羅尼品第二十六祈りける、けに御經の功力にや、大願成就有難しと、僧は潛り難い潛り窓潛つて、裏の古胡桃の木の古切口の古枝の、引拔き難いを引拔いて、新茶立てう茶立てう、あゝ茶立てう茶立てう、粉茶立てう茶立てうと、はつおのしよらちはらりるれろ。

十五　道樂天

白樂天の末葉に、道樂天といふ唐人、長崎の丸山にて、羅紗猩々緋虎の皮、人參までを打込んで、幾度どらを盡せども、それにも懲りず氣を變へて、都朱雀の色里へも、當つて見んと、思ひ立つこそ殊勝なれ、西の海八重の潮路を漕ぎ過ぎて、急ぐ心か一くちに、都の地にも着きしかば、一貫町へ尋ね行き、おろせが門に立寄りて、しきん一けんしやくはん〳〵と申しける、何事かは知らねども、大方それと推量して、此方へ御入りと言ひければ、樂天つつと內に入り、兼ねて用意やしたりけん、唐人衣

裳脫ぎ變へて、みせば角袖一つ前、無紋の羽織投頭巾、深網笠を引被り、出口を指して急ぎ行く、孱けなくも我が朝は、神國の驗にて、さみよしたいゆう神假に端女郎と現はれ出で、何處へ行かんす唐人す、遙々ようも御座りんと、聲かけられて唐人はつと思へども、さはらぬ體にてけんだりしんそんかんごんこんとぞ申しける、はて唐言葉は聞きたうない、此方へ御出でと手を取りて、奥の座敷へ連れ行きて、やがて酒宴ぞ始めける、唐人四五盃飲みかけて、いけぬ一節はり揚けて、歌ふ小歌のをかしさよ、ちんへいからきんにや、さつからすつてうさつこうき、はつてもとぞ歌ひける、女郎禿に至る迄、さつても奇妙な小歌やと、皆々笑ふばかりなり、唐人大きに腹を立て、折角歌ひし肴歌、何故笑ひ給ふぞや、いで眼前の景色を、詩に作りて聞かせ申さん、僧は醫者にて絹羽織の如し、侍油斷して丸腰にて廻る心得たるか女郎。成程私等が色歌もその心に通じやす、黒衣着たる坊様はさもなくて絹まちの衆の不粹なるかなと、卽席の和韻に唐人横手をてうど打ち、かくいち速き風雅をなせり、況

にや揚屋の座敷には、如何なる手管や候ふらんと、狼狽廻れば折節比叡山の方よりも、黒雲一叢拂ひ下り、唐人を捲き上ぐれば、廓の色風吹き添へて、虚空に還納なされける、げに神國の不思議ぞと、見る人聞く人鹽嘗めて、茶飲まぬ者こそなかりけれ。

十六　芥子人形

玉子のふわ〳〵の闘なれや、鳥の空音は計るとも、許さぬものは大晦日、もはや師走も廿日餘りのことなれば、何處を見ても物思ひ、もうし頼み入り候、何方よりの御出でぞや、菱屋の者にて候なり、内々申せし黒羽二重の代銀を御濟せ給はれかし、女郎は籬に凭れしを〳〵と、何とぞ〳〵年の内、御待ちあつて給はれかし、商人大きに腹を立て、とやかくとのたまふ中、はや七年に罷りなる、此頃聞けば伊勢町邊りの大盡に、御逢ひ初めなさるる由、女郎重ねてのたうまく、大盡には逢ひぬれども、内大臣にて候故、金銀は賜はらず、芥子人形只二つ、是にては合はぬなり、商人重ねてまつた承れば、和泉町の

役者に御逢ひなされつゝ、紫の調べを貰ひ給ふと聞く、女郎聞いてのたうまく、調べは貰ひ候へども、宿の亭主に取られつゝ、蚊帳の釣手と罷りなる、とてもならぬに春まで待ちやれ、質の流れの身とて憂やつらや、さほどに難義し給はば年の内は待ち申さん、春は早々濟し給へ、何かさて〳〵、さらばおさらばさんさらば、もはやうち着いたに、ばつと鹽水はつ〳〵、また頼みましよ、何方よりの御出でぞや、いや最前の者にて候、さて〳〵諄き人かな、年の内は待ち給へ、いやさにては候はず、雪駄が變り申したと、二度の物思ひにはつと鹽水はつ〳〵、うち治まるぞめでたき。

十七　昆布道成寺

自と申すはそも、誰ぢや、其方が爲には姉公路の昆布ぢや、何故にござんした、何故とは曲もなや、怨みたらば出直してやりかけよ、及ばぬ戀を瀨多にかけ橋、ばつと立つ名が浮名のおきにサ、網引く〳〵妓たちは、やんれ可愛らしやの、えい〳〵叡山のお山は、腐れ伊達者ぢやないか、やれ雲の帶、鹿の子斑に雲の振袖、ゆに〳〵江天のほつとり者、志賀の唐崎〳〵代參り、引つ連れだつてつい連れだつて、參る女は、男欲しさに宿願かかか掛けたえ、利生を待つぞ一つ松、その木の下でさすぞ盃

昆布、忍ぶむぢ濱誰故に、つらき人をば松前昆布とは思へども、なほ湧き返る心の水、酢に入り鹽に溺るゝも、前世定まる宿緣なり、瞋恚の海を泳ぎ越し、何處までもつき纏ひ、くるりくる〳〵巻昆布や、食ひ裂き引き裂き刻昆布、怨みを晴らさで置くべきかと、言ふ聲ばかりは火鉢の底に、響き渡つてほむらは猛火と燃え、五德鐵炎金火箸、思へばこのかね恨めしやとて、又灸子にぞ入りにける。

十八　惡所八景

なんぼ堰きやるとも逢はなけりやならぬ、嫌だと言やらば出直してやりかけよ、及ばぬ戀を瀨多にかけ橋、ばつと立つ名が浮名のおきにサ、網引く〳〵妓たちは、やんれ可愛らしやの、えい〳〵叡山のお山は、腐れ伊達者ぢやないか、やれ雲の帶、鹿の子斑に雲の振袖、ゆに〳〵江天のほつとり者、志賀の唐崎〳〵代參り、引つ連れだつてつい連れだつて、參る女は、男欲しさに宿願かかか掛けたえ、利生を待つぞ一つ松、その木の下でさすぞ盃

やつこりや〳〵、飲めさ嫌ださ、ぞめき騒ぎし有様を、見たか平沙のらく遊び、禿遣手に太鼓持、瞽女や座頭に按摩取り、扨ても惡所の晴らいやと、ばつと言うて番衆々々ばんばんしゆ、雨も降らぬに高足駄、簑着て笠着て棒突いて、行燈提けてどんがらり、どんどと鳴るは夜店仕舞の太鼓持、どんがらり何者ぢや、あれは遠寺の番太郎、さつては別れの涙こそさつさ、濡れてしつぽと濡れたが、瀟湘の夜の雨にもまさるべし、明る日は二日酔の作り病で、親兄弟の見る時は、眞らし氣に洞庭の、ああきの月とも謂ひつんべし、いかい呆痴のなれの果、うかりひよんとぞ見えにける。

十九　田螺

さるほどにさんちや村の田の畦に、舊りたる田螺候ひしが、頃しも三月半なり、畦道に駈け上り、日向ぼこしてさんさおはしけるよしなの思ひ、かゝる所へ恐しや、千住戻りの烏奴が、此の由を見るよりも、時分は良きにせしめばやと思ひつゝ、田螺の胴中引銜へ、元の椙に上りける、田螺心に思ふやう、早出の烏奴に食はせては適ふまじ、騙さばやと思ひつゝ、歌祭文にて見知らしけり、拂ひ清め奉るよ、扨ても優しの都鳥、御身の姿よく見れば、伽羅の古木にさも似たり、御眼の中の涼しさは、瑠璃の壺とも申すべし、囀り給ふ御聲は、春の林の梅が枝に、ほゝうほけきやうと鶯の、囀るよりもしをらしや、烏大きに騙されて助けばやと思ひつゝ、淺草川の眞中へ、だんぶとこそはの落しけり、田螺大きに喜びて、水一重泥一重、思ひのまゝに身を隱し、やい其處な馬鹿烏、已が色の黒きこと、燒木杙にもさも似たり、眼の中の穢き事、鹽辛壺とも言ひつべし、囀る聲のかしましさ、八王子の百姓が、年貢の訴訟する如く、あんがう烏の馬鹿烏と、言ひ棄て波間に入りにけり。

二十　八丈曾我

雁は來る燕は歸る秋の空、さらでも物の寂しきに、幾島守と身はなりて、潮馴衣幾綴り、荒布和布の衣裳つき、自らなるたて髪や、鬢に纏るゝ海松房の、一つ二つも むつかしと、拾ふ心の亂れ貝、磯山覆ふ雲霧や、たゞ引幕の裝と、思出づるもうたてくて、故郷の方を見渡せば、一年曾我の祐成と、呼ばれし事も仇なれや、時致戀し虎戀し、戀しき方の數々を、せめては夢と微睡めば、間の手濱松風の音、眼には見えねどもにこもる、蟲の音終夜鳴き明し、餘りの憂さに立出でゝ、彼方此方と彷徨へば、かゝるなかにも世を厭ふ、いでそよ人の笹の屋に、七夕人を織女ども、色なる糸を繰りかけて、五百機立つる窓の中、眞結ぶの唐糸ならば、手繰り寄しよもの我が袖に亂れあを、寄しよもの袖に、手繰り寄しよとは何のこちやえ、なん〳〵波路も果しなく、何となる憂き身え。

廿一　髷の雪

晝人目夜は通路ぞめき歌、きて暖めし袖と袖、雪も時雨も厭はずに、小褄からげのしどけなや、抱帶も解けて艶事の、枕に殘る髷の雲、きぬ〴〵惜む里の松。

琴線和歌の糸　卷之四

三下り端歌目錄

一　きゞす　二　きぬ〴〵
三　沖の石　四　鶴のはし
五　さよ嵐　六　氣まゝ酒
七　雪見酒　八　別れ坂
九　筑波山　十　春の雪
十一　寢ざめ鳥　十二　明烏
十三　戀すてふ　十四　袖時雨
十五　なれぎぬ　十六　筑紫舟
十七　みなれ棹　十八　薄氷
十九　暮の松　二十　春の鳥
廿一　かたし貝　廿二　菜種ざと
廿三　末の月　廿四　青葉
廿五　三つの星　廿六　立田河邊
廿七　螢火　廿八　夏の霜
廿九　秋の時雨　三十　橘の雨

卅一　里話　卅二　十三鐘
卅三　里の松　卅四　水鏡
卅五　二つ枕　卅六　男帶
卅七　さよ千鳥　卅八　かほり十三鐘
卅九　泰駒　四十　かきつばた
四十一　まごと　四十二　通路
四十三　鑓の袖　四十四　待宵
四十五　假枕　四十六　伊勢櫻
四十七　戀の峠　四十八　白小袖
四十九　藍染川　五十　三瀬川
五十一　無間の鐘　五十二　道成寺
五十三　うとう　五十四　石橋
五十五　松風　五十六　新道成寺
五十七　山姥　五十八　そなれ松
五十九　狐會　六十　仇烏
六十一　猩々　六十二　有馬ふぢ
六十三　新狐會　六十四　羽衣
六十五　小車　六十六　戀の火櫻
六十七　夢話　六十八　富士太鼓

一　雉子

雉子啼く野邊の若草摘み棄てられて、人の嫁菜と何時か扨て、こがれこがるゝ苦界の船の、寄邊定めぬ身は陽炎の、吾妻が顏も見忘れて、現ないぞやこれな、男、あれ蟲さへも番離れぬ揚葉の蝶。問の手我々とても二人連、粋な同志のなか〳〵に、問の手春にも育つ花誘ふ、菜種は蝶の花知らず、蝶は菜種の味知らず、問の手知らず知られぬ中ならば、浮かれまいものさりとては、其方の世話になりふりも、我が身の末に離れ駒、長き夜すがら引締めて昔語りと飛鳥川。

二　きぬ〴〵

後朝に曉の睦語今更に、憂きは別れの袖の海、馴染まぬ昔增ぢやもの、幾夜サ交せし情の末は、恨み焦るゝ身は戀衣、せめて一夜は來ても見よかしな、問の手たとへ逢はずと文さへ見れば、文は妹脊の〳〵橋ぢやもの、問の手花は折りたし梢は高し、心盡しの〳〵身はいかに、通ふ嵐の夜もすがら。

三　沖の石

まだ寢もやらぬ手枕に、そでもない事思ひ詫び、問の手つら〳〵と更けてさへ、寢衣の衣の肌薄き、つらいぞ憂いぞ何とせう、問の手悲しみの淚はいとゞ堰きかねて、深き思ひの淵となる、見るにつけ聞くにつけ胸に迫りし數々の、袖も乾かぬ沖の石。

四　鶴のはし

二世や三世と言葉で言ふは、水の泡沫そりや空の雲、嘘にも指が切られよか、いかいお世話の黑洒落おいて問の手爪の代りに鶴のはし、それを賴りに憂き勤め。

五　小夜嵐

峰の松風訪れて、妻戸に洩るゝ琴の音は、いづれをそれと調べけん、人の情も荒磯の、岩に堰かれて我が袖に、淚玉散る玉霰、定かならぬ契りとは、いとし可愛の我子さへ、琴柱に落つる小夜嵐。

六　氣まゝ酒

折節の空もあやなし朧夜に、忍びて通ふ立聞は、實まぢくらの戀話、好いた男の噂して、寢るも寢られぬ氣まゝ酒、問の手情は義理のあるものを、引くに引かれぬ三味線の、一期添はうとて二世かけて、調子合はする三下り、問の手逢へば嬉しい顏見るけれど、別れ思へば逢はぬが增よ、逢はぬが增よ、別れ思へば逢はぬが增よ、始めあらずばなか〳〵に。

七　雪見酒

行く水の流れの苦界果しなく、愛し男の爲にとて、思はぬ人をやき筆の、命毛かけて誓文の、撥にかゝりし三味線の、二十二三の宵の闇、隱れ忍ぶによけれども、ァ、顏が見にくの、これ申し、世にある人は許婚、私はお前の前髮の、長き契りも私が此の、直さぬ額此のまゝに、見たり見せたり離れじと、互に手に手をとりの聲、可愛

がられて今物思ひ、私やさうなかえ雪見酒はナさては思ひのよさ一つ、私やさうなかえ、染めぬ白地の元忍ぶ。

八　別れ坂

僞りのなき世の里の四つ門に、泣いて別れて心もすまず煙草のんでも煙管より、咽喉が通らぬ薄煙、外へ靡くも皆男ゆゑ、今日は東の人の月、明日は筑紫の人の花、あさてうたての娑婆世界、〔間の手思うて見さんせ白糸の、昔が増ぢやなまなかに染めて、しんくの〳〵糸の結ほれ今悔し、梯揚屋の別れ坂。

九　筑波山

逢ふは別れとかねては知れど、今朝の後朝何時よりつらや、たまに逢ふ夜は飛立つばかり、どうかかうかと心のたけを、〔間の手言はう〳〵と思うてゐたに、結の神に見棄られたかわけもなや、今は命も絶えなば絶えね、住めば恨めし同じ世に、〔間の手とうがねのナ茂右衛門女房はよい嫁子、〔間の手あれ見さいな、筑波の山の横雲、〔間の手横雲の

ナ下こそ私が親里、里の勤めも何時か離れて心のまゝに、末の落葉を誰か知る。

十　春の雪

身を棄つる、里あればこそ浮む瀬も、あるを頼みの憂き勤め、渡りくらべて名を流す、夜毎にかはる肌々の、實と嘘とを問ひかけられて、顔に紅葉する、〔間の手眞なれども逢はねば嘘よ、辛氣心のやるせなや、〔間の手恨みられしも恨みし人も、ともにやれ消え行く春の雪、〔間の手定めないぞや櫻の頃は、一しほ首尾も色にあかさぬ。

十一　寢覺鳥

初花染めの色深く、通ふ翼の香をとめて、妹背の一つ戀の種、〔間の手鶯の巢に育てられ、子で子にならぬ時鳥、禿立から廊に育ち、憂い目つらい目勤めの外に、可愛男とたまたまさかに、更けて逢ふ夜の惜しいと思や、枕取る手に寢て解く帶も、いかいお世話と結ばぬ夢を、覺せと告げの鐘の聲、寂滅別れと鳴く鳥、〔間の手流れ忙しき瀬を堰き止めて、淵となるなら淀みもあるに、つらい別れに柵はなし、〔間の手思ふ願ひは命が二つ、まゝに此の身がなるものならば、何の別れが悲しかろ、鳴く音するどき寢覺鳥。

十二　明烏

暮れし廓の裝ひに、宵の口說を背寢の、寢顏つや〳〵燈火に、煙草吸附けのむ煙草、含む薰りは東風吹く風に、亂れあふ瀨は白波か、流れよる〳〵悲しき一座、いやな一座は春の夜の、勤めなればと思うてみたり、どうかかうかの濕泣、耳鐶なれば胸にこたへて心にかゝる、來るか來んかの疊算、數へ〳〵て一二つ、みればよしなや四つ門の、はや時過ぎて八つの太鼓の、盡きぬ怨みに闇の戸の、別れもの憂き明烏。

十三　戀すてふ

戀すてふ烏の空音は人目の關よ、越すに越されぬ思ひ川、淵も瀨となるは、男の習ひ、ほんにやれ、苦界を渡る勤めにさへも、ほんの誠を立てれば立てる、ましてこちら

は一筋の、道を行くから二心なき、うちには水の月の夜を、涙の雨や胸の闇、曇りも晴れぬ姿見の、〔間の手恨みながらも外ながら、糸の解けしないぞや結ぼれし、いとのいとゞ添ふに添はれぬ身とならば、誰に見しよとて口紅鐵漿つきよぞ、とかく結の神しだい、心あれかし。

十四　袖時雨

蒔かなくに何を種とて戀草の、繁り〳〵し情の數に、又の緣を指に數へて手もたゆく、やるせないのが此の身の因果、あたら此の夜を獨り明石の浦千鳥、〔間の手かこつ言の葉枕に問へど、問へど答へぬ庭の雪、〔間の手障子明くれば燈火散らす、風も寒いか我が懷に、忍ぶ〳〵と浮名の立たば、君や恨みんむつかしの、とかく浮世は人目の關と、今ぞ身を知る袖時雨。

十五　馴れ衣

仇なりと名に立つ里の仇花に、染むも恨めし身もつらし、逢ふ夜隔たる苦しさは、言ふに言はれ數々の、實と嘘と

を分けかねて、肌に汗する思ひ寝の、夢現さへいやはかな

沈みはてにし妹脊川、下行く水の一筋に、結ぶ心の力草

間の手薬末の露の命さへ、馴れ〳〵衣の色變へぬ、我が相

性の二つ紋、外へは包む此の袖の、涙に宿る月や知る。

十六　筑紫舟

咲いた櫻に何故駒繋ぐ、駒が勇めば花が散る、櫻散る頃

其の夕、好いた埴生の板庇、かどを合せてすむ月の、朧

に物を思ひ惑び、袖のみ濡るゝ小波や、志賀の昔もある

ものと、老の爪紅さしもけに、間の手それを戀路の丸木橋、

踏みも定めぬ闇の戸に、心一つを筑紫舟、色の湊の名に

も似ず、憂しやつらしや八百萬、神の忌垣を越えし夜を、

仇になせとや仇枕。

十七　水馴棹

君戀ふる心も空も晴れやらぬ、涙曇りも何時かさて、罪

なき夜半の月を見ん、我が身一つの月よ花、戀し〳〵と

明暮に、積る思ひの色に見え、音に泣く蟲の我からと、

忍び〳〵の重なれば、間の手内外の首尾に堰かれては、禿

をだます一筆も、書けば書くとて浮名立つ、よしや苦界

の水馴棹、さして行方もあらばあれ。

十八　薄氷

來ぬ秋も何時暮れはてゝ薄氷、結ぶ手綱につい繋がれて、

憂しや妬しや人目の關を、越すに越されぬ信夫山、人の

心の奥こそ知らぬ、夢になりとも忍びて通ふ、道しあれ

なと一筋に、強ひて頼むはいやはかなる、何の因果に

婆婆に來て、生きて添はるゝ身でもなし、かくはいへど

も待て、しばし思へば命ぞと、詠みし言葉も頼もしや、

よしや月日よ移らば移れ、いちの鏡の割れても末に、逢

はん例と思へかし。

十九　暮の松

つれ〴〵と世の樣々を殘しけん、間の手つらさ憂き目は忍

ぶれど、間の手定めないぞや心の縺れ、言ふに言はれぬ歸

りばな、桔梗の紋の三輪違ひと、思ひ過しは身の仇かえ

肱枕。

廿二　菜種里

まゝならぬ、身にまゝならぬ透額、間の手鬢のほつれが冴

え冴ゆる、川風寒し加茂川や、間の手清き此身を濁す世の

人は、すいなき勤めとも、思ひ流して濟まさば濟まそ、

西吹く風の朝嵐、仇し夕に靡くもつらや、柳にそめく二

つ檣。

廿三　末の月

末はそぢやとて、待つ月日を數へては、何時を〳〵と限

りはせいで、唯待つことにすつるよの、見えぬとばかり

あらうなら、間の手にくい〳〵と思ふもつらい、まゝよ浮

世にわし一人、愚痴な住處も何時を限りに。

廿四　青葉

こは情なの仕業やな、さのみ人にはつらかりそ、悲みの

涙眼にさへぎりて、西も東も白波の、間の手寄る邊定めぬ

うたかたの、いつそ泡とも消えもせで、こがれこがるゝ身の行くへ、問の手青葉々々と、問の手呼べども濱の、問の手濱の松風音ばかり、問の手松風濱の、問の手濱の松風音ばかり、そよとなりとの消息もがなと、恨み嘆くぞあはれなる。

廿五　三つの星

世の憂さを、戀とや義理とに任す身の、難波の梅の實生えより、都の風に散る此の身、雲井に近き我夫の、緣の切れ目の藤袴、問の手ゆかりの色の花紫も、今は袂を墨染に、染めてかひなき憂き身ぞや、九曜の星のそれならで、殘る下着の三つの星。

廿六　立田川邊

立田川邊に舟とめて、尾花梶取る秋の風、問の手秋風とは身にしむと言ふ拗言葉、癖のあるこそ女はよけれと、唐土人の歌ふうたかた、味に寄邊を言ひかけられて、問の手何の答へもないのが返事、女郎花にも男のあれば、誰におちこちたつきも知らぬ、山は鹿の音この里ごとの、派手に見せぬを情の花の、菊の盃千代廻れ。

廿七　螢火

月は今出でゝもうとき谷隱れ、人は知らずや泣かで焦るる、野邊の螢火問の手水底に、呼ぶは蛙か面惡や、木蔭に忍び鳴く蟬の、よそ名立つる里の松、變らぬ仲を隔てゝ住めば、朝に殘る袖の五月雨。

廿八　夏の霜

通ひ路のつらきは戀の常なるに、思遣なき夏の霜、襖の夜半の戲れに、鳥はものかは先の夜の、人目忍ぶの契りさへ、飽かぬ中こそ眞なれ、問の手十日の雨に濡れ初めて扇の下の戀風に、問の手靡かぬ人の倭歌、紋は變らぬ三つ星の、通ふ思ひは六つの星。

廿九　秋の時雨

白露のおきて別れし明の聲、問の手鳥は物かは言問はん、

又の逢ふ夜はいつその事に、桂男も思遣れ、心は曇る月は澄む、問の手絞る袂の藤袴、誰が脫ぎ棄てし秋の野に、靡く尾花や裏吹き返す、色なき風も紅葉して、共にしぐるゝ妹脊山。

卅　橋の雨

くりためし糸竹の音の一節は、世に聞き渡る津の國の、眞野の繼橋今は早、名のみ殘りて難波の蘆の、露と消え行く哀れさを、問の手空へも風の告けるや、問の手あたら名立たる長月の、影も曇りて降る雨に、誰か袂を絞れとや、時しもあるに秋篠の、外山に鹿の鳴かぬ夜もなし。

卅一　里話

怨みられたり怨みてみたり、さうしてこそはえ、どんな男に私やほれた、何を言うてもそれぞれぢやいなさいな。

待つがつらいか別れが憂いか、どちらが增しぢやいな、待つも別れもえ、私やつらい、逢はぬ昔が增しぐぢやいなさいな。

旅の時雨と山路の鐘は、どちらが增しぢやいな、鐘も時雨もえ、苦にならぬ、行きて逢はるゝ身ぞ身とならばさいな、聞くに物憂き鳥の聲。

卅二　十三鐘

昨日は今日の一昔、憂き物語と奈良の里、此の世を早く猿澤の、水の泡とや消えはてゝ行く、後に殘りし其の親の身は逆さまなりし手向山、紅葉踏み別け小男鹿の、歸ろと鳴けど歸らぬは、死出の山路に迷子の、敵は鹿の卷筆にョせめて廻向を受けよかし　サイ頃は問の手頃は彌生の末つ方、よしなき鹿を過ちて、所の法に行はれョ蕾を散らす仇嵐　サイ野邊の問の手草葉に置く白露の、脆き命のはかなさよ、父は身もよもあられうものか、せめて我が子の菩提の爲と、子故の闇にかき曇る、心は眞如の撞鐘を、一つ撞いては獨り淚に雨やさめ、二つ撞いては再び我が子を三つ見たやと、四つ夜毎に泣き明かし、五つ命を代へてやりたや、六つ報は何の咎ぞや、七つ淚に八つ九つ

心も亂れ、とをも語るも戀し懐し、我が子の年は十一十二十三、鐘の響きを聞く人毎に、可愛々々と共泣きに、泣くは冥途の鳥かえ。

卅三　里の松

降り積る、雪には白き里の松、傾城に誠なしとは世の人の、分知らぬ情知らずの言葉ぞや、（間の手例へば命の續くだけ、本の誠を明かしても、男の方よりそれぞとも、消息をせねば遠ざかり、思はぬ方の宿の花と咲く時は、始めの誠後の嘘、（間の手勤めばかりに逢ふ客さへも、重なる枕や色衣の、ついの寄邊となじみては、始めの嘘も皆誠（間の手縁のあるのが誠なり、あるのが縁の、縁のあるのが誠なり、何と問はれて夕月夜。

卅四　水かゞみ

一目も知らぬ男なら、怨みも戀もあるまいものを、なまぜあふみの水鏡、映して見れば水底は、堅い堅田の石山と、きつう藏せたに私や藏せられて、思ひ過しも我から

さきの、一つ前帶しどけない振よ、（間の手たとへあはづと三井寺の、かねては思ひ入る崎の、矢走も風に比良のが雪の幕、（間の手誠なれどもいたづら髪の、いふにいはれぬ世の中に、人の噂も七十五日、浮名氣の毒山時鳥、はてさうぢやはえ〳〵、末は一つにもとの水。

卅五　二つ枕

君待つ宵の鐘の聲、つく〴〵物を思ふ頃、飽かぬ別れの鳥はものかはと、去なせともなき心から、無理な口説に言譯も、なく〳〵結ぶ二重の帶のしやらほどけ、（間の手二つ枕は交せど心、濟まぬ明し寢雲の帶、枕二つ交せど心すまぬ明し寢雲の帶、四面の梢も明烏。

卅六　男おび

なまなかに、逢ひも見もせぬ其の中は、戀しとばかり思ひしに、逢うて顏見て涙の淵瀬、水の馥の片思ひ、怨みに怨み襲衣の、袂の乾く暇もなや、（間の手どうした緣に氏神の、まゝにもならぬ事かいな、肱を枕の假寢の夢にも、

鴛鴦の思ひば離れじと、二世と結びし男帶、外に惡氣はあるまいけれど、惡性らしいが難よえ、なんのさら〳〵、外に惡氣はあるまいけれど、惡性らしいが難よえ、誘ふ嵐の暮の花。

卅七　さよ千鳥

包むに餘る袖の雨、晴るゝ間もなき胸の闇、言ふに言はれぬ私かくの、離れぬ鴛鴦の思ひばは、何の報いか神の力にも、こりやまあどうぢやぞいな、（間の手父よ母よと泣く聲聞けば、妻に鸚鵡が寫せし言の葉、えいなんぢやいなつがもない、（間の手世には因果な者なら私が身ぢや、可愛男は生れもつかぬ、えゝなんぢやいなつがもない、忍び音に鳴く小夜千鳥。

卅八　替り十三鐘

なか〳〵に、人目も知らず暗き世に、命の絆鐘の綱、一つ月日の惠みはあれど、片輪車でわが惡さ、二つ二人が添はれもせいで、三つ見る事なう奈良坂や、四つ冥途の是が障よ、五つ六つ六つの巷に迷子の、（間の手此の鐘のつくつくと、思へば七つ何事も、嵐に誘ふきりがやつ、早九つもとをからず、一二の末のその一つ、今の身の寂滅と、數へ〳〵て白露の、消ゆるを我は待つばかり。

卅九　春駒

めでたや〳〵春の始めの春駒なんどは、夢に見てさへよいとや申す、よいとや申す、花のや盛りなう伊達比べ、しなよき振を太鼓の拍子にさ打連れ引連れ（間の手春の小町の裝ひなんどは、夢に見てさへよいとや申す、よいとや申すおゝそれよ〳〵さ、（間の手筆にばかりを文とは讀まぬ、言葉の返事がよいとや申す、おゝそれよ〳〵さ、（間の手九十九夜九夜口說かば落ちよが、情ないぞやあた胴欲な、どうぞ誓しは靡かんせ、眞實誓文でなうござんすか、まあ嬉し先度騙されたからは一分立たぬぞえ、ヲ、辛氣、それで寢もせで迷ひ迷ふ、人の心と川の瀬は、（間の手定めなや、春の山路はおもしろや。

四十　かきつばた

在原の跡な隔てそ杜若、花紫のゆかりとて、形見の冠唐衣、身に添ひ持ちし言の葉も、契りし人の數々に、問の手よしや思ひのな露忍ぶ山、忍びて通ふ業平の、姿は今に見交す面影いと〳〵忘れぬ心やな、戀しゆかしき有樣や、語るも懷しことぞかし、いと〳〵色ばかりこそ浮世なれ、樂しむ中も早昔男の名をとめし杜若眺め給へや都人、まことは花の精なりと、見えつ隱れつなりけり。

四十一　まごと

曇る胸、泣いても離れぬ時雨月、願ひも願も神の留守、內方の首尾皆私故、お寂しからうお氣詰り、まゝならぬ身のあゝうたて、轉寢覺す松風の、よりの戻りし廻り氣の、口々扇今の里、舟や禿につけさせて、てうの〳〵と疊算、逢うて來うかとかしに行く、連の座敷の勇ましく小面の憎い明烏、まづ獨り寢とかき口說く、逢はう〳〵の念力も、屆く方まで五大力。

四十二　通路

白雪の、消えも果てなば今更に、思はじものをさりとては、こがれ寄邊の蜑小舟、浮れ心のいつかはと、問の手賴む妹脊の中を隔つる吉野川、藻に埋もるゝ玉柏、現るゝとも朕はじと、思ふは皆君が爲、とは思へども仇にのみ、いつまで月日過さまし、なほあやにくに尋ねみん、忍ぶの山の奥の通ひ路。

四十三　雛の袖

雲井にまがふ海の面に、高浪立ちて逢ふ事も、淀み勝ちなる世の憂さを、問の手我は人目に堰かれては、磯の千鳥と泣き明し、問の手何のまゝよと苦界も止めて、浮寢數添ふ時鳥、逢ふ夜短し逢はぬ夜長し、心からとは思へども、辛氣々々辛氣え、乾すに乾されぬ雛の袖。

四十四　待つ宵

君來ずば閨へも入らじと獨言してうか〳〵と、つらや妻戸にしよんぼりと、路地を見やれば月しん〳〵と冴え渡る問の手もはや夜明の鐘の聲、憎や今宵も待ち明し。

四十五　假枕

心こそ心迷はす我が心、今はこの身に愛想もこそも、月夜の鳥と啼く烏、明の別れの鐘鳴る方を、つらや憎しと今朝まで思ひ、仇なかね言つく〳〵獨りなう花の紋日につい假枕、問の手長崎の鳥は問の手鳥は時知らぬ鳥で、眞夜中に歌ふは眞時知らぬ鳥よ、しゆらへ袂に零れ春雨の果しなき身は限り知られぬ。

四十六　伊勢櫻

花の盛を待ち兼ねて、月に指折る遲櫻、憎や嵐のあてごとに、隔てられては誠も、嘘もなれば言譯泣くばかり、嬉し腕の刺青も、仇輩と問の手今は伊勢路の神の罰、一期見離すまいとの約束なれど、緣の切れ目は是非もなや、淚雨には西の雲、晴れぬ憂き身をかはゆがらんせ、誓文賴む。

四十七　戀の峠

仇波の立たぬ日もなき袖の海、夜毎々々に結ほるゝ、契の糸の切れもせで、いやなはいとゞ增鏡、思ふは薄き男の心、戀の峠の小夜嵐、更けて燈の影暗き〳〵、筆と紙とに淚を添へて、誠明かせどそれとは讀まぬ、結ぶ妹背は神や守らん。

四十八　白小袖

包むに何と白波の、流れの末の面影は、夜毎に變はる僞の、中に眞は有明の、突出しの昔より、馴染重ねの白小袖、宵に別れのヶ鐘鳴らば袖の春雨ヶ乾く間もないぞヤ、鳴きそせめて鳥の聲、月ならば十三夜、花ならば初櫻、盛ある花も人相の、鐘に散るらん花や散るらん。

四十九　あゐそめ川

宵はまぎれて暮しもせうが、背戸の川波時雨の音は、我かあはれと諸共ふりて、水も勝らん淚の淵瀨、幾瀨々々

の流れはあれど、思ひ切る瀬といふ瀬のあらば、今のつらさはあるまいものを、そめて悔しの藍染川よ、とても此の身は儘ならぬ。

五十　三瀬川

人知れぬ、戀路の闇に通ひ馴れ、忍び〳〵て逢ふ夜さへ、つく年月の甲斐もなく、ついかね言の一筋に、それを現の亂れ髪間の手思ひ切りつゝ殘しおく、二世の形見は仇なれや、淵も瀬となる男の心、知らで焦るゝ身は捨小舟、漕ぎ行く島に雪白う、衣着たれば消えもせず、あとに殘りて三瀬川。

五十一　無間の鐘

突出しの始めより、まづ逢ひ馴れ初めて、春秋幾つ越路の方を、よそに梨地の硯箱、開けて言はれぬ憂き事ばかり、その後朝の曉に、別れの鐘と憎みしが、今身の爲に鳴る鐘ならば、かはいがらうに儘ならぬ、たとへ如何なる憂き目に逢ふと、鬼棲む里の勤めであろと、男故ならそれや苦にならぬ、二八十六で文附けられて、二九の十八でつい其の心、四五の二十なら一期に一度、私や帶解かぬ、二十なら四五の、四五の二十なら一期に一度、私や帶解かぬ、歸らぬ月日戀ひしのぶ。

五十二　道成寺

昔此所にまなごの庄司といふ者あり、かの者一人の娘を持つ、又其の頃奥よりも、熊野へ通る山伏あり、庄司が許を宿と定め年月送る、庄司娘を寵愛の餘りに、あの客僧こそ汝がつまよ夫と戯れしを、幼心に眞と思ひ、明し暮してゐたりけり、さて其の後に夜更け人靜まりて、衣紋繕ひ鬢かき撫でゝ、忍ぶ夜の障は、冴えた月影更け行く鳥が音、それに厭なは犬の聲、そつとした人目忍ぶは憂やつらや、せきくる胸をおし靜め、かの客僧の傍へ行きいつまでかくておき給ふ、早々迎へてたまはれと、じつと締むれば、せん方なくも客僧は、よれつもつれつ常陸帶、二重廻りを三重四重五重、七巻まいて離しはせじと引き止むる、切るに切られぬ我が思ひ、おんま繋ぐはそ

れや嘘吐よ、とても寢よならはて諸共に、緣は朝顏淺くとまゝよ、せめて一夜は寢て語ろ、後程忍び申すべし、娘眞と喜びて、一間の所に待ちるたり、其の時客僧しすましたりと、それよりも夜半にまぎれて逃けて行く、さいはひ寺を賴みつゝ、暫く息をぞつぎゐたる、所へ娘立歸りヱ、腹立ちやゝゝ、我を棄て置き給ふかや、なうゝゝいかに御僧よ、いづく迄も追つかけ行かん、死なば諸共二世三世かけ、逃すまじきと追つかくる、折節日高川の水嵩增つて越すべきやうもあらざれば、川の上下あなたこなたと尋ね行きしが、毒蛇となつて川へざんぶと飛び込んだり、間の手逆卷く水に浮いつ沈みつ紅の、舌を卷き立て炎を吹きかけ、〳〵〳〵なんなく大川を泳ぎ越し、男子を返せ戻せよと、こゝの眠廊かしこの客殿、くるりゝゝくるゝゝくるゝゝ〳〵〳〵追ひ廻りゝゝ、なほゝゝ怨靈威猛高に飛び上り、土を穿つて尋ねける、住侍も今はせん方なく、釣鐘おろし隱しおく、尋ねかねつゝ怨靈は、鐘のおりしを怪しみ、龍頭を銜へ七卷まいて、尾を以て敲けば、鐘は則ち湯となつて、遂に山伏取りおは

五十三　うとう

鹿追ふ獵師は、山を見ずといふ事あり、身の苦しさも悲しさも、忘れ草のおひとり、高繩さして引く潮に、末の松山風荒れて、袖に波越す沖の石、又は干方とて海越しなりし里までも、千賀の鹽竈身を焦す、報をも忘れける事業をなせし悔しさよ、抑うとうやすかたのとりぐ〳〵に、品變りたる殺生の、中に無慙やな此鳥の、愚かなるかな筑波嶺の木々の間の手梢に羽を敷波の、浮巢をもかけよかし、平砂に子を生みて落雁のはかなや、親は隱すとすれど、うとうと呼ばれて子はやすかたと答へけり、さてぞ捕られやすかたうとう、親は空にて血の涙を、降らせば濡れじと菅簑に、笠を傾けこゝかしこと、便りを求めて隱れ笠、隱れ蓑にもあらざれば、猶降りかゝる血の涙に、身も紅に染め渡るは、紅葉の橋か、婆婆にてはうとうやすかたと見えしも、うとうやすかと見えしも、冥途にしては化鳥となり、罪人を追つたてゝ〳〵、鐵の觜

ん脱カなんぼう恐ろし物語。

を鳴らし羽を敲き、銅の爪を鋭ぎたて、眼を攫んで肉を、叫ばんとすれど猛火の煙にむせんで聲をあげえぬは、鴛鴦を殺し、咎やらん、逃げんとすれど立ちえぬは羽脱鳥の報とかや、うとうは却つて鷹となり、我は雉子とぞなりたりける、逃れがたの、狩場の吹雪に、空も恐ろし地を走る、犬鷹に責められて、あら心うとうやすかた安き暇なき身の苦しみを、助けてたべや御僧助けてたべや御僧と、いふかと思へば失せにけり。

五十四　石　橋

我も迷ふや様々に、四季折々の戯れも間の手蝶よ胡蝶よ、せめて暫しは手に止れ間の手見返れば花の木蔭に、見えつ隠れつ羽を休め、姿優しき夏木立、心盡しの、此の年月をエいつか思ひの晴るゝやと、心一つにあきらめてよしや世の中間の手短夜の夢はあやなしその移り香の、にくて手折ろか主なき花を、何のさら〳〵さら〳〵に、戀は曲物間の手露しのゝめの、草葉に靡く青柳の、いとしをらしく二つの獅子の、身を撫で、頭をうなだれ耳を伏し、花に宿借る浮世の嵐、あなたへ誘ひこなたへ寄りつ、園の胡蝶に戯れ遊ぶ、已が友呼ぶ獅子の駒間の手花野に寄る蝶の連れだちて、追ひ廻り下りつ上りつ、傍へ揚羽のしをらしや、追ひ廻り下りつ上りつ、傍へ揚羽のしをらしや、面白や間の手時しも今は牡丹の花の、咲きや亂れて散るは〳〵散り來るは〳〵ちり〳〵ちり〳〵散りかゝるやうでおいとしうて寢られぬ、花見て戻ろ〳〵、花にはうさをもうち忘れ間の手人目忍べば恨みはせまじ、爲に沈みし戀の淵、心からなる身のうさを、やんれそれは〳〵え、まことうやつらや、思ひまはせば昔なり間の手牡丹に戯れ獅子の曲、けに石橋の有様は、笙歌の花降り笙笛琴篳篥夕日の雲に聞ゆべき、目前の奇特あらたなり間の手暫く待たせ給へや、影向の時節も今幾程によも過ぎじ　間の手六段獅子團亂旋の舞樂のみぎん　間の手　牡丹の花房匂ひ滿ちく〳〵、大きんりきんの獅子頭、打てや囃せや牡丹芳〳〵黄金の蘂顯れて、花に戯れ技に臥し轉び、けにも上なき獅子王の勢ひ、靡かぬ草木もなき時なれや、萬歳千秋と舞ひをさめ〳〵て、獅子座にこそ直りけれ。

五十五　松　風

懐しや行平の中納言、三年は此處に須磨の浦、都へ上り給ひしが、此程の形見とて、御立烏帽子狩衣を、殘し置き給へども、是を見る度に、いや益しの思ひ草、葉末に結ぶ露の間も忘らればこそあぢきなや間の手形見こそ今は仇なれ是なくば、忘るゝひまもありなんと、詠みしも理や、なほ思ひこそ深かりし間の手亂れ髪亂れ心や狂はすれ、我が姿は恥しや、髪はおどろを頂いて、日蔭を待ちし夕顔の、蔓にかゝりし破れ車間の手よしや怨みもいとしさに、附添ひ廻る面影の、にくかれとは神かけて、思はぬ夫を放ちやる心の中こそはかなけれ、さはさりながら一念の、瞋恚となつて間の手思ひ知らずや思ひ知れ、あら恨めしの浮世やな、今更何とのたまふとも、そなたは忘れじ松風の〳〵間の手たち別れいなばの山の嶺に生ふる、まつとし聞かば歸り來ん、あら賴もしの御歌や間の手それはいなばの遠山松、是は懐し君こゝに、須磨の浦曲の松の行平、たち歸り來ば我も木蔭にいざ立寄りて、磯馴松の懐しや行平の中納言、三年は此處に須磨の浦、都へ上り給ひしが、此程の形見とて、御立烏帽子狩衣を、殘し置き給へども、是を見る度に、いや益しの思ひ草、葉末に結ぶ露の間も忘らればこそあぢきなや間の手形見こそ今は仇なれ是なくば、忘るゝひまもありなんと、詠みしも理や、なほ思ひこそ深かりし間の手亂れ髪亂れ心や狂はすれ、我が姿は恥しや、髪はおどろを頂いて、日蔭を待ちし夕顔の、蔓にかゝりし破れ車間の手よしや怨みもいとしさに、附添ひ廻る面影の、にくかれとは神かけて、思はぬ夫を放ちやる心の中こそはかなけれ、さはさりながら一念の、瞋恚となつて間の手思ひ知らずや思ひ知れ、あら恨めしの浮世やな、今更何とのたまふとも、そなたは忘れじ松風の〳〵間の手たち別れいなばの山の嶺に生ふる、まつとし聞かば歸り來ん、あら賴もしの御歌や間の手それはいなばの遠山松、是は懐し君こゝに、須磨の浦曲の松の行平、たち歸り來ば我も木蔭にいざ立寄りて、磯馴松の

五十六　新道成寺

さりとても、戀は曲物皆人の、迷ひの淵に沈む身の、我は浮かみもやらずして、戀慕の闇になほ暗く、忘れぬはかの一人なう、戀しゆかしき念力の、晴間の時やつくつくと、鐘の供養に參らんと、ありし昔の八文字、冴ゆれどな冴ゆれど月は、月は程なく入潮の、煙滿ち來る小松原、春の日長くまだ暮れぬ、急ぐ心か程もなく、供養の庭にぞ着きにける間の手春の夕幕來て見れば、入相の鐘に花ぞ散りける、諸行無常是生滅法生滅滅已、寂滅爲樂と響けども、聞いて驚く人もなし、今は我が身にかゝる櫻花、散ればぞ誘ふ、誘へばぞ散る山おろし、楢々は仇花と、思や深紅の結ほれ糸の、とけしない世を厭はで忍ぶ一夜一夜二夜は泣いても明す、今は人目の關守も、儘よなさ思ふ言の葉語ろもの、如何にかうした此身ぢやとて

懐しや間の手松に吹き來る風も狂じて間の手須磨の高波とう〳〵とう〳〵とうと烈しき夜すがら妄執の、夢に現れ見するなり。

もェさんさよしなの思ひよしなやな、東方へござんせ。花の盛りは、二間茶屋の色競べ、南方に宮川筋、弘法大師の流くむ、西方に大夫天職、引舟園に端女郎、北方にうちのしんせい七軒町、浮きに浮かれて第一中有に迷うた、懺悔々々六根罪障、南無不動明王〳〵問の手動くか動かぬかなまぐさばんだばさらだ、是や勤かぬぞ、眞言祕密で攻めかけ〳〵、珠數のありたけやつさらさ〳〵、せんだまかろしやな何の事ぢやえ。そわたやうんたら何のこつちやえ。あれ〳〵姿は現れたり、朧々になさてよさ、見分かぬ月の影もしどろに、しどけなりふりほら〳〵と、上の空なる戀の闇、廓に其の名立つ波の、流れ苦界の海深く、とても果なき身のつらさ、顔に目立つも恥しや、底の心を汲みて知る、粋も不粋も分のある思ひ、口說のあけの數々に、向ふ鏡の裏も表も、馴染の男よそへ心の亂れ髪、いふにいはれぬ言の葉を、筆に言はせてな目もとで知らしや、惚氣するとて退きくさる、罰があたろ恥知らず、あの嘘はいの二世もや三世もや變るまいぞと言ふた其方が嘘を月夜の烏の血文、恐や憎やもいとしさに間

夫で逢ふとは隱す身を分もない事ばかり、まだな〳〵聞いて下んせさりとては、夢の浮世を見ず知らず、せめて哀れと問ふ人も、泣きそな泣きそ心の外の友もなや問の手梅の花笠開いて品よく、さしかけゆりかけいとしらしいとりなり、小褄かい取りこつまてなさァよさりとは〳〵なうさて、枝垂柳の糸櫻、よれつもつれつな振もよし、よそに立つ名も恥かしや、妬みも仇も打拂ひ、罪を懺悔に滅さば、迷ひの雲も晴れぬべし、謹請東方青龍清淨、謹請西方白龍白龍、謹請中央黃龍黃龍、一大三千大千世界の、恒沙の龍王哀愍納受、哀愍自謹のみぎんなれば、いづくに大蛇のあるべきぞと、祈り祈られ、飛び上ると見えけるが、姿は虛空に問の手梅花の炎は胸の煙、ここに現れかしこに消え、楫を翔つてそら恐しや、空誓文の神罰佛罰、皆身の上にふりかゝつて、大地へどうど臥しけるが、車輪の如くくる〳〵くる問の手あら苦しや耐へがたや、情は反つて仇となり、群がる翼は刃の鐵杖猛火は羽風、呼ぶも叫ぶも怨みの木靈、霞にまぎれて失せにける。

五十七　山姥

山の端に、心も知らで行く月は、上の空にて影や絕えなん問の手見しも聞きしも花心、色をも香をも捨てざりし、二人添ひ寐の長枕、こち寄れ枕身に添ひ初めし移り香の、憎うはないものそちの心が變らねば、こちの木枕一筋に、これこゝに疊枕や文枕、口にまかせて塗枕、後や先なる言葉の端を、括枕のない人さんか、緣か因果かはいらし、こなん思やこそェ四つの太鼓を合圖に來るに、宵はいづくに隱れてぬけて、鐘の鳴る時今來た顏で、ようと知ると思はんせ憎い仕方と思へども、顏見りやいとし、ほんに浮世がまゝならは、嘘吐く男がなかよかろ、恨みがちなる神佛木調子伊勢音頭待つ宵は三味線引いてしんき節、泣いて別れて後朝の、袖よ袂よ恨みわび、末はどうなることぢややら、よいやさ〳〵、こつちに障のない操たゞ一筋に糸卷の締括りせし間の手も、逢ふ時ばかり引寄せて、よいやさ〳〵、いとしかはいも皆嘘の皮、罰あたれとは誓ひてし、よいやさ〳〵。ひんとすねては見すれども、つい過つて張弱き、なぜ女子には生れたぞ、よいやさ〳〵、ましや世の中徒に問の手三下り山廻り一樹の蔭や一河の流れ、皆これ他生の緣ぞかし、まして我が名を夕月の、浮世を渡る一節も、狂言綺語の道直ぐに、讃佛乘の因ぞかし、あら御名殘惜しや、暇申して歸る山の問の手山はもと山、水はもと水、塵泥積つて、山姥となれる、春は花咲き紅葉も色濃く、夏かと思へば雪も降りて、四季折々の山廻り、萬木千草も一時の戲れ、面白や〳〵問の手鬼女が有樣見るや見るやと、峰にかけり谷に響きて今迄こゝにあるよと見えしが、山又山に山廻り〳〵して、行方も知らずなりにけり。

五十八　そなれ松

心づくしの春風に、浦曲の波のよる〳〵に、心もすまで泡沫の、湖汲衣よるべなき、身は蜑人の袖ともに、思ひを干さぬ沖の石問の手まつとし聞かば今歸り來ん、あらたのもしの御歌や問の手えい〳〵〳〵え、いとし男をまつの木育ち、石の枕や一夜の情、須磨の關屋の鹽竈櫻、こり

やまあどうした緣ぢやいな、えいつがもないはてわけもない、寄せては返るかたを波、蘆邊の田鶴のたち騷ぎ、四方の嵐も音添へて問の手花の吹雪の松の行平、二世も三世も磯馴松の懐しや問の手三段暇申して歸る波の音の須磨の浦かけて吹くや後の山風、關路の鳥の聲々に問の手夢も跡なく現なく、松風ばかりや殘るらん。

五十九　狐會

いたはしやな母上は、花の姿をひきかへて、しをるゝ露の床の中、智惠の鏡もかき曇る問の手法師に見え給ひつつ、母を招けばあと見返りて、さらばと言はんばかりにて、泣くより外のことぞなき問の手野越え山越え里打過ぎて、來るは誰故そ樣故、誰故來るは、來るは誰故そ樣故、君は歸るか恨めしや問の手去なうやれ問の手我が住む森に歸らん、勇みに勇み歸らん、我が思ふ〳〵、心の中は白菊岩隱れ葛隱れ篠の細道かき別け行けば、蟲のこゑ〴〵面白や問の手降り初むるやれ降り初むる〳〵、今朝だにも〳〵問の手所は跡もなかりけり問の手西は田の畦危いさ、

問の手谷峰しどろに越え〳〵あの山越えて、この山越えて焦れ焦るゝ憂き思ひ。

六十　仇鳥

苦みは、海に沈みし水鳥の、羽は濡れねども袖濡れて、涙の雨の亂れ髪、亂れ心やおき所、現か夢か幻の、身の苦しさはおいとりの、末の松山風荒れて、袖に浪越す沖の石、今の浮身のうたてさよ問の手思へばけにも古は、數多の人に假枕、その睦言の僞りに、交す誓紙の仇鳥、指切髪切血潮の波に、流れ流るゝ流れの身、裾や袂や肩や裳裾につく烏、拂へど〳〵拂へど〳〵執心の、長き闇路を照る月の烏のはをぞ恐しき、胸苦しやと血の涙、降らせば濡れじと菅蓑や、袂をかざしこゝかしこに、忍び〳〵て隱れ笠、隱れ蓑にもあらざれば、なほ降りかゝる問の手群烏、目もくれ足も立たざるは、羽脫鳥の報か問の手鐵の嘴を鳴らして羽を蔽き、銅の爪を銳ぎたてゝ、眼をつかんで肉を叫ばんとするに悲しやな、逃げんとすれば猛火燄にむせんで聲もしきりに出でざるは、これ鷲の報とかや、逃れがたなき因果の程、化鳥に追つたて問の手追つたて〳〵、置き所なき身の行方、目もあてられぬ風情なり。

六十一　猩々

酒をいざや汲まうよ、客人も御覽ずらん、月星はくももなき、所は潯陽の江の內の酒盛、猩々舞を舞はうよ、蘆の葉の笛を吹き、波の鼓どうど打ち、聲澄み渡る浦風に秋の調や殘るらん、そも茶と酒と茶と酒は、二つに文字は變れども、落れば同じ谷の水、酒といふ字は三水に曆の酉を書くとかや、月雪の眺めには、下戶も上戶も隔てないぞや酒召せ〳〵さんさら柳と歌うた戲れ、瀧呑引受けてさら〳〵さらりと樂しまん、呑めば心もいそ〳〵いそと、浮れ〳〵て踊り出でばやいで面白や〳〵問の手酒はたゞだんぶ〳〵と呑まねばすまぬ、呑めば明石の浦の景、あれ〳〵見さい月は照る〳〵なん波間に〳〵ちらり〳〵醉うたあしべの千鳥足問の手亂れ、呑めや歌へやさゞんざ〳〵、廻る盃いつまでも醉うた〳〵〳〵そりや醉うた面白や問の手頼しや〳〵、萬代までの竹の葉の酒、汲めど盡せぬ呑めど變らぬ、秋の夜の盃問の手治まる御代の松が枝に、雛鶴眞鶴舞鶴鵠鶴夜の鶴色音を揃へて〳〵〳〵きりはたりちやう問の手てう〳〵〳〵と受けたる盃の、指す手引く手に舞の袖、盡きせぬ宿こそめでたけれ。

六十二　有馬ふぢ

數々の、浮名に立ちし懺悔の有樣、岩洩る水の思ひとなり、なほ仇し野の露涙、包めど餘る世の中の問の手昨日の花は今日の夢、驚かぬこそはかなけれ問の手身の憂きに、人のつらさをなほ添ひて、忘れもやらぬ我が思ひ、せめて誓しは止まれかし、梓の弓にたつ空の、これ迄現れ來るぞや、ア、懐しや今とても、忍び車の我が姿、我が思ひ問の手物に狂ひし有樣は、あはれとも又はかなけれ問の手世の中は廣いやうで狹いやうな、似合の妻は、妻はいとゞ太鼓の音もよし、とん〳〵〳〵つくてん〳〵〳〵つくどんがが、太鼓の音もよしやつとせ問の手似合の妻は、妻はいとゞ太鼓の音もよし、とん〳〵〳〵つくてん〳〵つくどんが

らが、太鼓の音もよしやつとせ、踊り狂ひて伏し沈む。

六十三　新狐會

我が住み慣れし故郷も、戀ゆゑなればゆづる月、入るさの山の端がくれに、いとゞ心は恥しや、我が思ふ〳〵、願ひの雲も打晴れて、去のやれ戻らうやれ、足を爪立てちよこ〳〵、ちよこ〳〵走りに、小池の小水に撫でつけて、上の〳〵畦道は、近うてよい〳〵けれども、殊に闇の夜で、眞黒々黒犬が恐ろしや、合點々々、其方も合點我等も合點、ほんぼにそれはの、腹が立つなら合點々々其方も合點、やつくるりくるり〳〵、くる〳〵廓の亂れ髪、昔は花の、江戸京難波に名を得たる、郷白菊名取の面々、金吾長門に小泉、三五夜しこなし女郎問の手妻戸合圖にそと開けて、馴染怖に鳥の聲、忍ぶ狂氣にまつくれあらし、此の事どもが洩れ聞え、もし此の里にて浮名立てなば、間夫を妹の女郎に預けたてのおろせにさしあて、宵詰後詰は其の場の懸引　おうしう戀路に胸を打ち我儘酒に醉ひ亂れ、遠く逃ぐるを續けて呑ませ、近くに見ゆるを無體に押へ、向ふで嫌はゞ一座の大酒、けにも〳〵あら面白や、今は歸るぞさらばよさらばと、小笹篠原かき分け〳〵、世を忍ぶ身の隱れ笠、細道しどろに、連れて行く身の草隱れ。

六十四　羽衣

花降り妙なる靈香も、四方に薫ず、面白の今の音樂、面白の樂の音、空もいつしか行く雲を、羨ましけに打眺め問の手迦陵頻迦のなれ〳〵し聲さらに問の手雁金の歸り行く天路と聞けば懐しや、けに乙女子が霓裳羽衣の曲をなし天の羽風のひら〳〵〳〵と、雨に濕ふ花の袖、東遊の駿河舞、此時始めなるやらん問の手花の色香もよい姥櫻、姿優しやほら〳〵〳〵と二重の帶をきりゝとしやんと緣結び問の手御茶屋乳母の癖として、脊に子を負ひ寢させておいて、いんの子〳〵と言うたもな目なかけそ、可愛らしさにナ愛すれば愛盛、かぶり〳〵ちやうち汐の目、さても其方は誰人の子なれば、定家葛か、離れがたやの〳〵、手車に乘せて參ろの東山や西山、北嵯峨の踊は、對の帽子をしやんと着て踊る振が見事え、花見て戻ろ〳〵花にはうさをも打忘れ面白や伊勢音頭九重の都歸りの江戸櫻、瀬川帽子や菊櫻、匂櫻や八重一重、君が情の薄櫻、それは眞によう言うた、吉野初瀬の花よりも紅葉よりも、戀しき人は見たいものぢや、所々お參りやつてとう下向めされ、咎をばいちやが負ひまゐらせう、しをらしや問の手見れば、五色の文の瀧、綾の茵もえ君と我が二人、緣を結ぶの常陸帶、天津乙女のな、誰が袖ふれし姿よし問の手驛路の鈴振ればなりもよし問の手十二の子寶揃へて問の手さつさ時雨か鈴の音か問の手にほんめでたき春日の山は三笠待てば廿露の日傘、月の笠ほど開いた〳〵、秋は猶紅葉もじ笠それ〳〵ぢやいな、眞に鵲の橋を渡した、解けぬ思ひの戀もあるに、數々の文に私や騙されて、忍ぶ其の夜は闇こそよけれ、來ぬ夜は面憎我一人、枕片敷く終夜問の手枕並べてさんさ待つ夜は稀に逢ふ時ばかり、かはい〳〵と騙しておいて、憎や鷄まだ宵ながら後朝告けて、ほんに憎いぢやないかいな、うやつらや空も懐し雲の波問の手花鳥飛びかふ雲の袖翔け廻る問の手さまは蜑人なそれとんとろり乙女の姿問の手雲の通路ちらと見た、見初めた〳〵天人女郎衆の姿もよし、歌舞の菩薩の遊びもこゝにかくやらん、さる程に時移つて天の羽衣浦風にたなびきたなびく三保の松原浮島が雲の、愛鷹山や富士の高嶺かすかになりて天つみ空の問の手霞にまぎれて失せにけり。

六十五　小車

鐘は宵、鳥は空音と恨みわび、逢ひ見し夜半は現とも、夢ともわかぬ手枕に問の手名殘も深き曉のかねて思へば道芝のいつそ露とも消えなば消えよ玉の緒の、なほ繰返し青柳に問の手心引かるゝ移り香を、我が身にとめてその人と、見れども厭かぬ面影の、暫しながらも別れ路を、雲をも憂しや小車の、廻る月日を數へては、又の仰せを待つばかり。

六十六　戀の火櫻

昔より、戀に浮身を奉るよう、色は樣々ある中に、わけて哀れを止めしは、八百屋の娘お七こそ、戀慕の闇の暗

がりに、よしなき事をし出して、親の嘆きは如何ばかり、お七泣く〳〵申すやうは二上り戀に日もくれ夜に日も別かず、うつら〳〵と此の人を、松帆の浦の夕凪に、燒くや藻鹽の身を焦し、私は迷ひと思ひの種ぢやいな、助け給へや、南無妙法蓮華經〳〵間の手せめて一日我が世帶、夫婦と言はれ死ぬならば、未來の罪も厭ふまじ、私は迷ひと思ひの種ぢやいな、助け給へや、南無妙法蓮華經〳〵羊の歩み程もなく、勇まぬ駒の鈴の森、見る人袖をや絞るらん。

六十七　夢ばなし

馴れ染めし、其の文月の中空に、二世の約束末かけて、結ぶ緣さへまゝならぬ間の手夜晝わかで忘られぬ、いつそ馴染まぬ先ならばかうはあるまい ァ、しん氣、几張の夢を見し人も、難波の蘆に繫がれて、後は互ひの語り草。

六十八　富士太鼓

思ひぞ積る胸の花、涙にしをる富士葛、女心の亂れ髪、ゆひがひなくも戀衣、その移り香を後朝の、形見と今は鳥甲、重き思ひをいたゞきて、狂ひ出るぞ、はかなく消えし草葉の露の、殘る此身をいかにせん、戀しや床しやいとしやと、或は嘆き笑ひつゝ戀し心がきやう〳〵〳〵狂氣となつて現なく間の手太鼓こそ〳〵、失せにし人の敵なれ、思へば〳〵腹立ちや、後に呼ぶは夫の聲、前には敵の閧の聲、打てや〳〵と攻め鼓、越天樂を舞はうよ、歌へや〳〵梅が枝に、風吹かばいかにせん、花に宿る鶯間の手持ちたる撥をば劍と定め〳〵、瞋恚の焰は太鼓烽火の天に上れば雲の上人、まことの富士颪に、絕えずもまれて裾野の櫻、四方へばつと散るかと見えて花衣、さす手も引く手も伶人の舞なれや間の手富士が恨みも諸共に躍り上つてゝうと打つ間の手嬉しや今こそは、思ふ敵は打ち收め、打たれて音をや出すらん、げにや女人の罪深く五常樂を打たうよ、さて又千代や萬代の、千秋樂を打たうよ、民も榮えて安穩に、太平樂を舞はうよ、日も既に傾きぬ〳〵、是迄なりや人々よ、伶人の姿鳥甲皆脫ぎ棄てゝ我が心、亂れ笠亂れ髮、かゝる思ひを忘れじと、又立ち返り太鼓こそ、憂き人の形見ぞと、跡見置きてぞ歸りける。

琴線和歌の糸　卷之五

二上り端歌目錄

一　舞鶴　二　みすの追風
三　花の香　四　名古屋帶
五　爪紅なる　六　髮梳き
七　間の山　八　雲景色
九　萬歲　十　放下僧
十一　戀の淵　十二　長生殿
十三　袖の時雨　十四　雨の夕
十五　夕の雨　十六　鳥邊山
十七　秋の旅　十八　秋の藤
十九　實ばなし　廿　松の二葉
廿一　出口の柳　廿二　一つ夜着
廿三　みすのうち　廿四　沖の舟
廿五　かづきめん　廿六　歌占
廿七　亂れ髮　廿八　弘徽殿
廿九　あしたの原　卅　井筒

卅一　淺間　卅二　小夜嵐
卅三　窓の梅　卅四　松風
卅五　淀川　卅六　小袖物狂
卅七　梅が枝　卅八　重ねぎく
卅九　戀の和讃　四十　如月
四十一　橘の廣葉　四十二　三つの車
四十三　夏のつま　四十四　袖の露

一　舞鶴

數々の盃に、千代萬代と重ね〳〵て、廻らすてうしも取取、糸竹の聲も賑ふ、さつ〳〵の松の風、丹頂の鶴は、庭上に舞を奏で、齢を獻ぐる君が御代間の手盡きじ盡きせじ、詠むとも盡きぬ眞砂の數、一つ二つ三つの濱四つの海、波靜かにて、豐かに治まる御代ぞめでたき。

二　みすの追風

去年の嵐も一夜に變る、今朝の春風薫りを添へて、梅の下風軒端に通ふ、御簾の追風なほゆかし間の手

かへ唱歌　初音々々と呼ばるゝ鳥は、梅に鶯山時鳥、落ちて田面に鳴く雁金や、折に觸れての小夜千鳥。

三　花の香

長かれと何思ひけん世の中に、憂きを見するは命なり、思へば夢の世と、知らでかひなくすむ月の間の手現の闇に見る花の、朧々と身もわかぬ、明けて散りなん、暮れて散りなん、散ればぞ花の色も香も間の手何れはかなき間の手春の風、吹かぬ其の間の一盛、惜しや暫しの花の宴間の手名殘を雲に吹き閉ぢよ間の手とめてかひなき花の香を、袖に包めど小笹の霰、零れ易さよ我が涙間の手共に鳴き連れ歸る雁間の手よそに見なして思ひこそやれ、などや心のなかるらん。

四　名古屋帶

逢うて立つ名が立つ名の內か、逢はで焦れて立つ名こそ、眞立つ名の內なれや、思ふ中にも隔ての襖、あるにかひなき捨小舟間の手思や世界の男の心、私は白波現なき、夜の寢覺の共の睦言を、思ひ出す程いとしさに、ぞつと身もよもあられうものか間の手締めて名古屋の二重の帶が三重廻る、深山鶯鳴く音に細る、我は君をば焦れて細る、あゝ浮世昔忍ぶの戀衣。

五　爪紅

若紫を引換へて、茶色の袱紗、結ぶ契りは爪紅に、焦れてや焦れて野邊の、野邊の雉子の妻ごめに、脊はなゝ燒きそ武藏野に、果しなき身の思ひ草。

六　髪梳き

亂れし髪を梳き反し、いとし男の爲にとて、思はぬ人に誓文の、罰も當らば三味線の、引手に靡け黒髪の、私はお前の前髪の、長き契りと筋立てゝ、心盡しの九十九髪二世も三世も、かけて結んで後れの髪に、固き油を附けて梳け、常に辛苦の〳〵、心もそゞろに茶筅髪六黒舞移れば變る髪の色、跳元結のひんしやんと、所風なる鹿兒島を、眞に駿河ののんこ髷、解けぬ髪筋果しなき、私も心のたけおりに、微塵如才は投島田、水に繪を書く鷗髷、鷗烏の黒髪を、結ひたいことぢや糸鬢に、なにの撥鬢剃下は、儘にならざるそゝけ鬢、四方髪から結ひたてゝ銀出しさへもないやうな、假令局へ下髪の、ひつこき髪の髷なくと、蟬折々の合せ髷、思ひ合うたる丈長の、又の世までも掛元結、變らぬ色の長髪、鶴の笄千代萬代と、結ひたて髪の太元結、結ぶの神の緣次第。

七　間の山

二下り花も散りぬれば、楢のかひもなきものを、おゝそれなきものを、仇な月日の仇枕、里の圍に鳴く蟲の、野でも山でも啼きはせで、君と我とが添ふ仲を、きり〴〵すきり〴〵すと、鳴くは祈るか面憎や、戀路の闇に晝さへ暗き見え隱れ、かうぢやはてまいこれなうやいの　二上りもとは浮氣で藍染川の、深うなる程逢はれはせいで、越すに越されぬ人目の關よ、寒の師走も火の六月も、つらい勤めに日を暮しやるか、顏に細りが可愛や見ゆる、思や二人が生き長らへて、ゐるも不思議の中なるぞ、久振にてあひの山、逢ひに來たさに三つつぎの、柿は契りのたがやさん、今は一つに添はれもせぬは、どのかみ駒の罰あたり、三は切れても二世の緣、一期離れぬ心ぞや、嬉し悲しうござんする間の手こちの正體なしが、辻で禿を口說くとさ、連たちに見附けられて、笠を冠つて行くはなう間の手戀が商賣なれば、憎むことではなけれとさ、きんざんに間夫が附いて、浮名の立つが迷惑、通ふまいぞ

や、あゝくん廓の馴染はな、たゞ我が身の仇なる花衣、きては袂の雨涙。

八　雪景色

面白の、四方の山邊も白妙に、見渡す空の薄霞、雲と見しは白雪の〳〵〳〵、拂へど〳〵降り積む、花と見まがふ、梢々もしをらしや、いづれも白妙に間の手眺め〳〵て雪や氷もみながらに、袖をかざして立ち寄れば間の手それは木々の花、切りくべて樂しまん、酒にいざや遊ぶべき先づ冬木より咲き初むる、窓の梅の北面は、雪封じて寒きにも、異木より先立てば、先づ梅を切りや初むべき、梅は樣々あるが中にさ、早咲梅の、わつさりとはんなりと、色よし品よし信濃梅、思ひこがれて書く玉章を、便り求めて鑓梅や、あなたへとつと飛梅、枝がさはらば御免なれ、ふりふつてふりふつて、ふつて〳〵〳〵〳〵、ふりふつた振袖、誰が袖の香の匂梅、初音ゆかしき鶯の、羽風につれてふわと、亂れ〳〵、亂れ亂るゝ枝垂梅間の手しなと拍子を數へ〳〵て、それ〳〵〳〵〳〵〳〵、そこらでしめろ、まかせておけろの、とんと〳〵〳〵はづんだ手毬梅間の手一ィ二ゥ三ィ四ヲ五ッ六ゥ七ナ八ァ、音は音はしととんとん〳〵、しととん〳〵しととんと、丁度百ついた面白や、數々の盃は、どこ〳〵へ廻つた、てうにてう七てう三郎、ちよんちよろめきのてう次郎、ずうまん坊にわ入道、囃し立てゝ遊んだ、ざん〳〵〳〵ざ、濱松の音は、幾千代御代は萬年。

九　萬歳

德若に御萬歳と、御代も榮えまします、愛敬ありける新玉の、年立ちかへる朝より、水も若やぎ、木の芽もさき榮えけるは、誠にめでたう候ひける間の手京の司は關白殿降位の帝は日の本たいし、王は十善神は九善、萬安々浦安の、きいのもとにて正月三日、寅の一點に誕生まします若惠比須、商賣神と祝はれ給ひて、商賣繁昌守らせ給ふは、誠にめでたう候ひける、間の手きぬた優女々々京の町のやしよめ、賣つたる物は何々、大鯛小鯛鰤の大魚、鰒榮螺蛤こ〳〵、蛤々々召されと、賣つたる物はやしよめ、そこを打ち過ぎ傍の店見たれば、金襴緞子紗綾や縮緬間の手繻子緋繻子縞繻子繻珍、色々の結構飾り立てゝ候ひしが、町々の小娘や、小歳の寄りたる姥たちまで、賣り買う有樣、げにも治まる御代なり時なり、惠方の御倉にずつしり〳〵間の手寶は治まる、門には門松、脊戸には脊戸松、そつちもこつちも、幾年のお祝ひと祝ふ。

十　放下僧

面白の花の都や、筆書くとも盡きせじ、東には祇園清水間の手落ちくる瀧の音羽の嵐に、地主の櫻はちり〳〵、西は法輪嵯峨の御寺間の手廻らば廻れ間の手水車の輪の、ゐせき〳〵の川波、川柳は水にもまるゝ都の牛は間の手車にもまるゝ、茶臼は挽木にもまるゝ、げにまこと忘れたりとよ、こきりこは放下にもまるゝ、こきりこの二つの竹の間の手世々を重ねて、打ち治まりたる御代ぞめでたき。

十一　戀の淵

戀の淵なら塡るがよいに、なうさてな、人を塡めたり騙したり、勤めの中の姉妹、戀のまぎれの裏表間の手戸の立てられぬ人の口間の手よその噂も、思はくごかしの浮名よ誓文ざ、つがもない間の手そんなおつかない事言はぬもの、人が間の手思ふも憎うない間の手今での心は、馴染ぬ昔がましぢやに誓文ざ、嘘でない、人目の關よ忍摺、心の亂れ限り知られん。

十二　長生殿

長生殿の中には秋深く、老せぬ門の前には日も傾かず、月はなほ間の手ていけの亭の春風に、散りても薫る庭の梅が枝、ませの白菊露深く、手折れば消ゆる袖の初雪、月よりも花よりも紅葉よりも、なう戀しき人の閨の中、見たいものぢや〳〵間の手閨の扇の繪空事かえ、思ひの增すわいな、扇の繪、閨の扇の繪空事かえ、思ひの增すわいな、たまに逢ふ夜の言の葉ゆかし。

十三　袖の時雨

などや情なき心と心間の手袖は時雨の時しもなきに間の手時

雨の袖は間の手袖は間の手時雨の時しも分かで。

十四　雨の夕

籬の菊も綿ぬきて、霜にしをるゝ夜嵐に、霧の矢走の渡し舟、榜ぎ消えて行く蘆の波、立ち添ふ袖も雨の夕よ、くりかへし何のはもなき糸柳。

十五　夕の雨

見たい逢ひたい、かくても過ぐる身ぞつらや、いつそ絶えなば絶えよかし間の手三筋の糸に、せめては憂さを忘れやせんと、暫し向へば忘れはやらで、松風ならぬ面影通ふ、とかく戀路は夕の雨よ、晴間知られぬ我が思ひ。

十六　鳥邊山

獨り來て、二人連れだつ極樂の、清水寺の鐘の聲、早初夜も過ぎ四つも告げ、九つ心の闇路をば、照らすや否や稻妻の、光りし後の暗きこと、我等二人が身の上と、今はなまなか長らへだてを、したら浮身に愛想もこそも、

つきた浮世やいざ鳥邊野の、露と消えんと最期の用意、女肌には白無垢や、上に紫藤の紋、中に緋紗綾に黑襦子の帶、年は十七初花の、雨に萎るゝ立姿、男も肌は白小袖にて、黑き綸子に色淺黃裏、廿一期の色盛をば、戀といふ字に身を捨小舟、どこへ取着く島迚もなし、鳥邊の山は其方ぞと、死にゝ行く身の後髪、引く三味線は祇園町、茶屋のやま衆の色酒に、亂れて遊ぶ騷ぎあひ間の手あの面白さを見る時は、染どの此方と某が、去年の初秋七夕の、座敷踊をかこつけて、忍び逢うた事思ひ出す羽織かづいて茶屋ぞめき、ふたせの玉に引きずられ、迷惑するを見る時は、其方に私が無理言うて、口說した事思ひ出す、祇園林の群鳥、かはい間の手かはいの聲聞けば父母の事思ひ出す、涙に道のはかさへ行かぬ、思ふまいぞと思ひはすれど、こゝぞ浮世の別れが辻よ、早うござれと手に手を取りて、行けど歩めど又見ることも、今が始めの終りより、追手の者や來らんにサア〳〵最期急がんと、鳥邊野の露消えて行く、見るに二人がせきくる涙、じつと押へてこれお染どの、思ひ切らしやれもう泣かしやんな、私は泣かねどそれこなさんの、いゝや其方のいや此方のと、顏と顏とを見合せて、一度にわつと歎くにぞ、一足づゝに消えて行く、遂にこの野を春降る雪や、折節はや寺々の、鐘も撞きやみ夜はしらぐ〳〵と、鳥邊山にぞ着きにける。

十七　秋の旅

西で咲く花南で開く、北野に稀な時鳥、間の手今の一聲松島や間の手月はしん氣の種ぢや種ぢやいな間の手。かへ唱歌されば儘にはならぬが浮世、難波に殘る女郎花、間の手くねる波路の船の內間の手月はしん氣の種ぢや種ぢやいな。

十八　秋のふぢ

浦々かけて、吹くや嵐の花誘ふ、東遊びの七浦三浦、日本堤の秋風に、淺茅が露と消えし身の、何時か難波に返り花、咲くこともなき浮れ船よなうさ、二丁立てたる伊達女房、俄訛りのえちやえ、つらやはかなや覺束な、ふぢの園生の夕なつかし。

十九　實ばなし

秋風の身にしむ程にかはいがられて、松蟲の音と共に、間の手枕は浮れ浮して、ついしたことではないわいな、鵲の翼並ぶる、逢ふ夜契りて天の河瀨の波に間の手袖濡れて、稀の馴染はついしたことではないわいな、東雲の別れものうや、逢はねば思ひはないわいな。

廿　松の二葉

松の二葉はあやかりものよ、青葉はまして落葉さへ間の手妹背離れぬ契りとは、嬉しからうであるまいか間の手室の湊の菜の花曇り、曇らば曇れ仇枕間の手止まる胡蝶の身とならば、嬉しからうであるまいか間の手小田の蛙の雨呼ぶ聲は、夕はまして曙に間の手二つ枕で聞くならば、嬉しからうであるまいか。

廿一　出口の柳　祭文

敬つて申し奉るノホ奈良の都の八重櫻サヲイ今日九重に浮れ來て、二度の勤めを島原の、出口の柳ふり分けて、戀と義理とのヨイサ二重帶、結ぶ契りも仇し野の、露の浮身は誰故に、よ渡る舟のかひもなく、寄邊定めぬ蟹小舟、岸に離れて便なや、島隱れ行く磯千鳥ニ上リ忍び音に泣く憂き涙、顏が見たさに又こゝに、木辻の里の朝込みに、菜種や罌粟の花の色、移りにけりな徒に、我が身はこれなうこの姿、つれなき命長らへば、又この頃や忍ばれん、忍ぶにつらき目狹笠、深き思ひぞせつなけれ本調子今は太皷も鳴りやめて、貰ひし文の數々も、盡きぬ哀れを身にうけて、せめて旦那の御恩德、報ぜん爲の間の山、逢はせたいぞや若樣に、別れ給ひし心根を、思ひやられて今更に、昔忘れぬ貰ひ泣き、かゝる哀れも又の世に、來るまじきは、あゝくん廓の間夫狂ひよ、祟りをなすなよ、御祈念と敬つて申す。

廿二　一つ夜着

櫛入れぬ秋の柳の枕さへ、外れ次第の轉寢は、誰に拗ね

てと人の問ふまで、穗に出づる問の手その稻舟の最上川、せきにせかるゝ下よりも、今宵待てとのたゞ一つ、思ひやりなき男氣に、神かけてとは仇波の、碎けすぎたる二人が仲は、恨みられたり恨みたり、後は五に言ふ事も、なんのかのなき一つ夜着。

廿三　みすのうち

散りかゝる、花とや人の惜むらんなう、戀の流れの今出川、末白川の便も切れて、殘る一人の稚兒櫻〳〵、形見と見るも仇なれや、いつそ此身はかうして濟まそ、とは思へども名に高き、花の匂ひの姥櫻迄、勤めする氣はないものを、神に祈りの伊勢櫻、見し玉簾の內ぞゆかしき。

廿四　沖の舟

恨みわび、干さぬ袖とは今ぞ知る、君は繫がぬ沖の舟、風の誘へば寄る身ぢやものを、我は磯邊の蟹子ども、舟よ問の手舟よと叫べども、つらい浮世の山おろし、よその浦回へ吹いてよる、晝とも分かで忘られぬ、馴染まぬけども離れぬ執念の、迷動するこそあさましき。

廿六　歌占

先がましぢやいな。

廿五　かつぎ面

迷ひ行く、時も違へず丑滿の、秋風寒く身にしむも、嫉妬の念の晴れやらず、夜な〳〵毎に恐しき、姿變れば心も變る、人はそれともいざ白絹に、鬼女の面を隱し持ち庭のたまりの泉水に、映す姿は我が身から、そつと身の毛もたちまちに、穗に現るゝ糸薄、菊の茂みを傳ひ行く、積る恨みの數々を、いつか晴らさん今宵の中に、思ひ知らせん思ひ知れ、逢ひ見し時は我ならで、枕は外に交さじと、言ひしも今は仇波の、水に映ろふ月さよが、馴染は遙か遲咲の、菊の實生の種蒔き殘す、三月四月は袖でも隱す、最早七月あらはれ月よ、藥祈念でも下りるまいかいの、恨めしや此の世を去らば我一人、思ひ思はれ思ひの葛、亂れ髮はらり〳〵はら〳〵、おそはれおそるゝ小車の、廻る因果はくるり苦しき此の身は問の手かつぎし面はその儘に、生れついたる二つの角、おのれと動く如くにて、我が身もあきれてこは如何に、取るに取られず

は無量なり。餓鬼の苦しみは無邊なり、畜生修羅の苦しみは、我等にいかで增さるべき、身より出せる咎なれば、心の鬼の身を責めて、かやうに苦をば受くるなり、積るぞ恨み戀の山、因果は廻り來る、思へば〳〵腹立や、刃にかゝつて修羅の道、らく〳〵らい〳〵と地に倒れ、忽ちに滅せしこと、思へば〳〵腹立や、婆婆の名も散りて木枯の雪に埋れ、消えてはかなくなりにけり、死んではかなき我は名を流す、空穗舟に推し入れられて、深き闇路に迷ひける、死しても殘る一念の、死しても殘る面影の、涙ぐみてぞ失せにけり。

廿七　亂れ髮

誰がかたの、思ひや閨に通ひ來て、主は誰とも白綾の、衣の綸の空炷も、くゆるばかりの亂れ髮、亂れ心を知らすべし。消息なければあこがれて、その數々の思ひの魂ふるとは人のよも知らで、露の憂き身の消えもせず、嵐の風に誘はれて、こゝに現れかしこには、立ちし姿のすつくりと、繼路を知らば一言の、なけの情にかゝらんと袖に取付き枕に寄りて、夢かと見れば夢ならず、現に見ゆる女の一念、あるかなきかに立ち添ひて、夜はほの〴〵と閨の戸に〳〵、薫りばかりや殘るらん。

廿八　弘徽殿

いとゞ恨みの增鏡、鳥は立つとも變らじと、思ひ寄邊の仇波の、現に迷ふ面影の、たとへ嘘にも思ふと言ふは、憎うないものいとしさ故の、上の空吹く風さへも、松に音する鳥のつらさも〳〵私や忘られぬ間の手我人の爲身を棄て草の、葉末の露の玉葛間の手かゝる憂き目も三瀨川、戀のせ枕交さぬ中も 廿め同じ心の苦しみに苦しみ悲しみものうき世はうき黑髮の、もつれ亂れてばら〳〵〳〵と知らぬ妬みゝ身に受けて、積る思ひの我が姿、こゝにあられも泣き沈むあさましや間の手悔みても死出の旅、しかうして起き上れば、獄卒は撞木をあてゝ追立つれば漂ひ廻り八大地獄の苦しみに苦しみを重ね御前にて間の手懺悔の有樣見せ申さん、先づ等活地獄衆合叫喚、大焦熱炎熱極熱、無間の底に足上頭下と、落つる間は三年三月の苦しみ絕えず間の手彼方を尋ね此方を求めん方の何處やらんと、求め〳〵迷ひ出でしが露消え〳〵と、死靈の形は失せにけり。

廿九　あしたの原

いとしさを、思へば影に添ふものを、迷ふが中の迷ひとは、千々にものこそやるせなや、逢うた月日を忘れもやらぬ、すいも思ふと言ふ一言に、馴染む程なほ勤めもよそに間の手ほんに世界の妻ともなれば、男一人を守りの神の、綱さへ切れて、今宵々々と待つ身は明けて今朝、今朝は昔の鐘の聲 間の手セメなほも戀慕の闇路は暗き、暗まぎれ、此處に現れ彼處にたちまち立ておきし、屏風は劍の山に等しく、追つたてられてよお登れば、危な〳〵突き落され、なほ一念のせめかけ〳〵 間の手すはや廓の座敷も明方の、朝まにやなりぬるらん、名殘の袖を引止むれば、そのまゝ跡たえぬ、唯茫然たる朝の原に、唯茫然たる朝の原に、面影ばかりや殘るらん、蟲の音ばかりや殘るらん。

卅　井筒

井筒井筒、井筒の水は濁らねど、交せし人は朧月、いる方もなき我が思ひ、唯變らじと一筋に、寢ても覺めてもいとしさの、餘りて洩れて愔うなる、墨と硯は濃い仲なれど人が水さしや薄うなる、辛氣〳〵〳〵水さしや人が、人が水さしや薄うなる、辛氣その一念の附き添ひて、影に佇み〳〵日向に薇ひくる〳〵〳〵〳〵と、苦しき胸のほむらの火、湧き來る水に消えもせで、離ちはやらじと取付けば、霞に隔つあさましや、少しはそれと思ひ知らずや思ひ知れ、足下はよろ〳〵〳〵〳〵〳〵と、弱りはてたる釣瓶の雫に、落ちて形はなかりけり。

卅一　淺間

恨みも戀も殘りねの、もしや心の變りやせんと間の手思ふ疑ひ、晴らさん爲の誓紙をば、なぜに煙となし給ふ、恨めしや間の手胸のほむらは夜に三度間の手こちの思ひは日に三度、煙比べん淺間山、あれ御覽ぜよあさましや間の手邪

淫の惡鬼は身を責めて、なう劍の山の上に戀しき人は見えたり、嬉しやとてよぢ上れば思ひは胸を焦す、こはそもいかに恐しや間の手花の姿もよは〳〵〳〵と、かしこに立ち、行かんとすればこゝに消え間の手あるかなきかの春の夜の、朧月夜にはかなくも、消えて形は失せにけり。

卅二　小夜嵐

小夜嵐、散りてかひなき山櫻間の手憂き身を焦す鹽釜の、晴れぬや胸のきりが谷、心一つを定めかね、仇と情の僞りを、梢に纏ふ糸櫻、亂れ〳〵て咲く花の外になる身の片思ひ、夫は此世に身は死出の山、櫻花かやちり〳〵に、淺葱櫻の薄いも知らでしめて逢ふ夜の一盛、今は歸らぬ昔の春に、添はぬ契りの花のえん間の手解いて悔しの一重の帶よなう人の心の二重の帶よなう今は身にしむ仇枕間の手せめ恨めしや〳〵、双にかゝり死したる身は、鐵刀の地獄に落ち、地より出るは劍の炎、空より落つるは劍の春雨間の手降らせば悲しと此處彼處に便を求めて、恐れ廻れば後より追ひ來る煩惱の犬櫻、婆婆の色欲愛怨戀慕の二つの鬼、間の手火櫻の車に乘れと、追ひ廻り追ひ廻り、車に乘れば、熱や悲しや身は燒き焦れて、墨染櫻となりし苦しみ、霞貫く庭の曙、松風ばかりや殘るらん。

卅三　窓の梅

思へども、思はじとのみ思はれじ、なんの思はじとは思へども、迷ひ廓の色香を慕ひ、梅の木立の鋭い氣ぢやに、何故徒な間の手勤めの嘘と我が誠と歸るさ知らぬならさとすまい、惚氣せまいと誓ひを立てゝ、殿御其方に槍梅ならば、私は其方の梅になろ間の手せめたとへ野梅山梅迄も、共に添ひ寢と思ひの數々、今は冥途に向ふ梅間の手形はさながら鬼梅蛇梅、物凄や恐しやとて、逃げ行くさきの、襖障子も白梅飛梅間の手庭梅こぼれ梅、なほ生き代り死に代り、ふたゝび君に鶯宿梅と、言ふ聲ばかりは窓の梅が枝、言ふ聲ばかりは梅が枝に、姿は隱れ失せにけり。

卅四　松　風

懷しや行平の中納言、三年は此處にすまの浦都へ上り給ひしに、此の程の形見とて、御立烏帽子狩衣を、殘し置き給へども、是を見る度に彌益しの思ひ草、葉末に結ぶ露の間も、忘らればこそあぢきなや間の手形見こそ今は仇なれ是なくば、忘るゝひまもありなんと、詠みしも理りや、なほ思ひこそ深かりし間の手宵々に脫ぎて我が寢る狩衣、かけてぞ賴む同じ世に、住むかひあらばこそ忘れ形見もよしなしと、捨てゝも置かれず取れば面影に立ち增さり、起臥わかで枕より、跡より戀のせめくれば、せんかた涙に臥し沈むこそ悲しけれ間の手三瀨川絕えぬ涙の憂き瀨にも、亂るゝ戀の淵はありけり、たとへ暫しは別るるともまつに變らで歸り來ば、あら賴もしの御歌や間の手立ち別れいなばの山の峰に生ふる、松とし聞かば今歸り來ん、それはいなばの遠山松、是は懷し君此處に、須磨の浦囘の松の行平立ち歸り來ば、我も木蔭にいざ立ち寄りて、磯馴松の懷しや間の手松に吹き來る風も狂じて、須磨の高波激しき夜すがら、妄執の夢に現れ見ゆるなり。

卅五　淀　川

春の夜の、夢驚かす鷄の、その後朝の物思ひ、又逢ふことの何時かはと、深き心に詫ち草、根引にせんと言ひ交す、身は捨て草の捨てられて、流れし此の身は淀川の、何を賴に浮草の波にゆらるゝ泡沫の、逢はぬは君が情なや妬ましや間の手それは若草身を恨み草、何の其方に厭いたではなし、厭きも厭かれもせぬ中なれど、請け出され行く後に殘りて拙き此身、せめて哀れと思へかし間の手送り歸せば淋しき閨も、今は枕に香ばかり殘る憂き思ひ、なほ恨めしき鐘の聲、下行く水の思ひ川、底の心は白糸の亂れて物を思へとや間の手鳥が歌へばも去のと仰るさのえ月夜烏はサ何時も鳴くしやうがえ間の手も去のと仰るさのえ月夜烏はサ何時も鳴く、暫し止りてくれよかし間の手せめア、腹立やさりとては、二世と交せし思ふ男を、外へはやらじ離さじものと、夫に向つて吐く息は、猛火となつて此の身を焦す、袖や袂に、すがれば振り切りすがれば振り切り、足もよろ〳〵よは〳〵〳〵と、夜半の嵐に物凄く、彼方へ廻ればくるり〳〵此方へ廻ればくるり〳〵、恨みの數を數へ〳〵てァ、腹立や曲もなや、女心の

一念はあるものかないものか、思ひ知らずや思ひ知れと踏む足音はとう〳〵〳〵〳〵〳〵問の手大地も響きて凄まじく、夢か現か現か夢か、霞に隠れて失せにけり。

卅七　小袖物狂

戀よ戀、我中空になすな戀。戀風が來ては袂にかいもつれ、思ふ中をば吹き分る、あら心なの嵐に連れて、裏吹き返す形見の小袖、見るに思ひの增す故にこそ狂はすれ問の手狂ふは誰そや我はそも、安部の保名が安からぬ、胸に迫りし數々よりも、何處を指して和泉路や、寄る邊の水に泡沫に、漂ふ姿亂れ髪、素襖袴踏みしだき、浮かれ歩くぞ現なき問の手夢にも更に、紫蘭芙蓉の花の顏容姿は及びなき、吉野初瀨の遲櫻、更科越路の月雪も、眺めは遙が下照衣通、神の緣の榊とは、我が戀人の仇し仲、仇な契りの言の葉を、思ひやるさへ悲しけれ問の手更け行く鐘も別れの鳥も、獨り寢る夜はさあらぬものを、柳の糸の亂れ心、何時々々忘りよ、何時の春風花のえん、花のえんや、稀に逢ふ夜は寺々の鐘、撞くに寢られぬいとゞ寂しき旅の空問の手夜さの宿りは何處が宿りぞ、草を敷寢の肱枕々々、はしごの〳〵幕の內、昔戀しき面影や、移り香のその睦言の露深くセメ立ち寄り見れば狹薄、尾花交りに招く手を、拂ひ退けては彼處に茂る榊の枝に形見の小袖打ち着せ、あれ〳〵〳〵枝にゆかしき人は見えたり、嬉しやとて、上れば榊の枝は、身を通し、愛着は胸を焦すこはそもいかにあさましやと、せんかた涙に伏し沈む。

卅七　梅が枝

梅が枝に、咲き亂れたる景色こそ、いとゞ戀しさますほの浦に、契をこめしも、今は早問の手絕え〳〵に、せめては人の心あらば問の手そよとなりとも水莖の、流れにつる濱千鳥友呼び焦れつれなきは、深き思ひなるべし問の手なか〳〵に初めより、馴れずば物を思はじ、忘れかねたる涙川。

卅八　重ねぎく

九重の、のちの月見の名殘もよそに、故郷へ歸る雁金の

惜しや恨めし我が夫の問の手八千代とこめし契りさへ、さながら仇の仇昔、交す緣も淺瀨川、關の清水を戀ひ渡る。

卅九　戀の和讃

こしかたより、今の世までも戀といへる曲者、曲者かな、身はさら〳〵〳〵に、戀故寢もせで明かす故、我も昔は愚にも、心にこめて陸奥の、千賀に遊べど外目のかたく、言はで別れて何時となく、夢か現か幻か、さらば面影忘れもやらず、懷しやゆかしや問の手戀は曲者皆人の、迷ひの淵や氣の毒の、山より落つる流れの身さへ、緣のあるこそ誠なれ、情の道を手習ふは、誠の戀にしくはなし、迷へば迷ふ悟れば悟る、煩惱卽ち菩提ともなる、浮れ心の出づるとも、よそに主ある袖引くな、契りし人の變るとも、深くは恨むことなかれ、さしあたる言の葉ばかり思へかし、歸らぬ昔知らぬ行末。

四十　如月

さてものどかや如月半、松に春風香を送る、いざや連れ立ち、梅咲く里へ行くまいか、道は菜種の花咲く野邊よ、見えつ隱れつ柳の下に、櫻やう〳〵色附く景色、眺め殘して行く道すがら、霞流れて川瀨の水に、誰か恨めしこの盃の、主は誰ともいざ白波の問の手寄る邊定めぬ思ひの淵の、深き心を知らせたや。

四十一　楢の廣葉

楢の廣葉は舟ぢやと仰る、漕ぎて如何にと夕の露を、波と見なして乘手は蟬よ、聲をはにあけ月待つ頃は、これぞ眞の日暮しよ〳〵、これぞ眞の日暮しよ。

かへ唱歌　妻戸叩くは水雞と仰る、姿見てかと夕の月を、星と見なして更け行く空に、松はつれなや曉ばかり、啼くは眞の鳥の聲、啼くは眞の鳥の聲。

四十二　三つの車

三つの車にのりの道、火宅の門や出でぬらん、夢か現か朧夜の、月毛の駒に片手綱、引き止むれば春の雪、解け

て亂るゝ我が思ひ、餘りて憎いその人を、誰に添はせん妬ましや、袖に流るゝ血の涙、色と情の二思ひ、深き心は常々に、語り明かせし繼草の、穗に出で初めし面影の、すがり付けば八重櫻、風に亂れし亂れ髪、ゆひがひなくも殺されて、身は仇し野の露霜と、消えにしことの恨めしと、泣くより外のことぞなき、咲いた櫻に何故駒繋ぐよなう駒が勇めば花が散る、あさましや絶えがたや、煩脳邪淫の身の苦しみに、鐵石立つこと一由旬、仇な情も心の鬼、登れと責むる劍の山、くるり〳〵〳〵〳〵、くる〳〵〳〵〳〵追つ立てらては、岩根に取り付き〳〵〳〵登りて見れば、下より猛火を吹き上けて、こは情なや悲しやと、助け給へと夕暮の、月は霞に影曇る、聲ばかりして失せにけり。

四十三　夏のつま

木の下闇の手枕に、一年ぶりの仲直り間の手身は任せても物言はず間の手凭れかゝればなよ竹の、節をこめたる憂き思ひ、心が間はゞ何としよ。

四十四　袖の露

見てもなほ、飽かぬ眺めの花の色、何時まぬがれぬ一の里、色附く梅の難波津に、二世をかけて結ぶ身の、三つ四つ落つる五月雨に、亂れ初めしも何時の間に間の手今日九重に軒の松、松吹く風に夢覺めて、殘るは獨り袖の露。

寛延三庚午年季秋

輯者　松川勾當
　　安永勾當

新町通三條上ル町　吉田善五郎
烏丸通高辻上ル町　河南四郎右衞門
寺町通二條下ル町　野田治兵衞
錦小路通新町東入町　永田調兵衞

皇都書林

琴線和歌の糸　終

第九　山家鳥蟲歌

山家鳥蟲歌序

夫仁は心の徳、五倫は常の道にて、此の世の中にある人毎に、是を亂すは人と言ふべけんや、かくありて、事の繁き中、見る事聞く事につけ言ひ出せる、山々里々に稻刈り麥搗くことわざ、聲面白く諷ひなす賤の女の一節、如何なる故の心にやあらんと耳を傾けても、其の心分ち難く、故に尋ねて筆に記し、其の風俗を見れば、幾千世と君を祝ひ、身にすぎ樂みの餘り、荒れたる家にむぐら這ひかゝり、蓬など高く生ひたる庭に蓄へ置きし粢を取り出で、あやしき様したる女ども、化粧して、男と共に臼挽歌歌ひ、心地よけに疲れを晴らさんとて、かたへの牛飼ひ所に休み、煙草のむ間に茶うけと名づけ、濃き茶に熟米を入れて、幼子ども持ち運ぶ有様、瓢簞屢空し顔淵の樂みと思ひ出られて、あはれに思はるゝ其の言の葉誰が言ひなしたらんも知らず、世の風俗として、花に鳴く鶯水にすむ蛙の聲、何れか歌を詠まざらんと古事にあるよしして、山家鳥虫歌と名づけて、其の所々の國風も知らるべきやと集むるもの也。

明和八辛卯冬　　天中原長常南山序

山家鳥蟲歌　目錄

卷之上　本朝　三十箇國

卷之下　同　三十八箇國

山家鳥蟲歌　卷之上

山城國風

▲目出た〳〵の若松さまよ、枝も榮える葉もしげる。

▲今年御上洛、上樣繁昌、花の都は猶繁昌。

▲稻は刈り取る穗に穗がさいて、何處に寢さしよぞ親二人。

▲親子つまとも田を植ゑしまひ、神に千歳の種をまつ。

▲來いと誰が言うた笹原越えて、露に小松は皆ぬれた。

▲ござる其夜は厭ひはせねど、來るがつもれば浮名立つ。

▲わしは小池の鯉鮒なれど、なまづ男は厭でそろ。

▲忍ぶ道には粟黍植ゑな、會はず戻ればきび惡い。

▲こなた思へば千里も一里、會はず戻れば一里が千里。

▲暇下され後日は待たぬ、あすは黑日で日が惡い。

▲戀に焦れて鳴く蟬よりも、鳴かぬ螢が身を焦す。

▲飲みやれ大黑歌やれ蛭子、殊にお酌は福の神。

▲幾世長かれ此の殿の、めぐみ育ちて若菜つむ。

▲樣はさんやで宵々ござる、せめて一夜は有明に。

▲高い山には霞がかゝる、わしはこなたに目がかゝる。

▲繻子の袴の襞取るよりも、樣の機嫌の取りにくさ。

▲舟は出て行く帆かけて走る、茶屋の女子は出て招く。

▲招けど磯へ寄らばこそ、思ひ切れとの風が吹く。

▲樣の寢姿さこそ見たれ、さつき野に咲く百合の花。

▲かきは投けかけゆすらば落ちよ、心つれなや山桃よ。

▲こなた思へば野もせも山も、藪も林も知らで來た。

▲いとし殿御の目元のしほを、入れて持ちたや鼻紙に。

▲こひといふ字がありやこそきたれ、鳥羽の戀塚秋の山。

▲さてもよい子や黑木賣の娘、戀の重荷かかつぎ連れ。

▲山に咲く花嵐が毒よ、わしは君樣見るが毒。

凡二十五首

君を松に譬へ、千代萬代まで榮え給へと祈りし賤の女の心ばへ、又は豐年の貢を祝ひ、妻子おくにのるの心、孝悌の道學ばずして人情感ずべき事なり、他の國にすぐれ水清く男女ともに色白く、詞自から別れて滯りなし、孝悌の道は國々同じといへども、記すに暇なし。五畿內の外は大概を述ぶる、此の國に

大原盃といふあり。圖に出す。東山殿時代此の盃出來、蒔繪小原木の模樣故大原と申す由、それより後色々形を變ずる。

大原木や召せ〳〵黒木さゝを召せ、濃くも薄くもきこしめせ〳〵。

栗本駿河家に形有之

大和

▲千代の松が枝三笠の森に、朝日春日のみかげまつ。
▲様の暇の吸ひつけ烟草、戀が增すやら火がつかぬ。
▲梅と櫻と吉野へ行たら、梅は酸いとて戻された。
▲東山のは雪ではないか、あれが雪かや櫻花。
▲一に當麻の糸掛櫻、奈良の都は八重櫻。
▲ござれそめたら様來そめたら、道の小草も枯るゝほど。
▲吉野川には住むかよ鮎が、わしが胸には戀が住む。
▲わしは山雀餌に落されて、明障子のうちに住む。
▲人に物言や油の雫、落ちて廣がる何處までも。
▲若い女の顧かけるのは、神や佛もをかしかろ。

▲様に恨は三島の暦、言うて何しよに添はぬから。
▲花の盛りを此方でしまうた、何處を盛りと暮そやら。
▲ゆうべ呼んだる花嫁御、けさは無間の鐘をつく。
▲花は一枝折手は二人、わしは何方へ靡こやら。
▲獨り山道ものすごござる、早く聲出せ時鳥。
▲なさけないぞやけさ立つ霧は、歸る姿を見せもせで。
▲雉のめん鳥薄のもとで、夫を尋ねてほろゝうつ。
▲月夜影にもほしたい袖を、濡らしたよ又しほるほど。
▲様よあれ見よあの雲ゆきを、様と別れもあの如く。
▲思ひ直しは無いかよ様よ、鳥は古巢へ歸らぬか。
▲人目思はず人さへ言はにや、織りて着しよぞやたつ縞を。
▲添うて添ひ飽く殿御もあるに、添はで思ひの增すもあり。
▲お月さまさへ戀ぞよ召さる、こゝで待てとの雲陰に。
▲蝶よ胡蝶よ菜の葉にとまれ、とまりや名が立つ浮名立つ。
▲はやる簪髪かたちより、直な心が美しい。

凡二十五首

山々里々にて言ひ慣らはすことわざ、世の人情、父を慕ひ君を敬ひ、宮仕への賤の女なれば、主を思ひ子を慕ひ夫を親しむ心のまゝ、優しくも感ずべき事也、此の國に大峰といふ深山あり、昔遠江國長福寺へ山伏來り、大峰へ入る路用の合力を得んと言ふ、かねといふは鐘樓より外はなし、路用にたゝば參らせんといふ、客僧喜び、鐘を提げて走り行き、釋迦が嶽の松にかけ置て今に存すと言ふいぶかし、しかれども、かやうの事古ありし事也、漢の武帝の御時未央殿の鐘故なくして自ら鳴ること、三日夜まで止む事なし、帝驚かせ給ひしに、東方朔奏しけるは、銅は山の子にして山は銅の母と承る、陰陽の氣類を言へば、子と母とは相感ずべし、山崩るゝ所ありなんと申しけるに、三日のうちに南郡の山崩るゝ事三十餘里とぞ奏しける、今も人家の釜鳴ることあるは此の理にてぞ侍る、是等の理をよく通じなば、其の一氣の感ずる所は、百世と雖も遠からざる事を知るべしと、鬼神論に出たり、山伏の鐘を山上へ持ち行くこと、東方朔に尋ねたらば如何答へん。

河内

▲君は八千代に岩船神の、あらぬ限りは朽ちもせん。
▲ことし世の中稻刈りそめて、神と君とに重ね餅。
▲山家なれども我が故郷は、柴の庵も懷しや。
▲山家々々とあしけに言やる、色のよい花山に咲く。
▲親が片親ござらぬ故に、人も侮りや身も痩せる。
▲人はけなりや咲く花なれど、我は木蔭のしをれ草。
▲様とわしとは山吹育ち、花は咲けども實はのらぬ。
▲富士の裾野の一本薄、いつか穗に出て亂れ合ふ。
▲人が言ひますこなたの事を、梅や櫻のとりぐ〳〵に。
▲人の言ひなし北山時雨、曇なき身は晴れてのく。
▲わしは谷水でごとは出たが、岩に堰かれて落ち合はぬ。
▲何を歎くぞ川端柳、水の出ばなを歎くかや。
▲五月雨ほど戀ひ忍ばれて、今は秋田の落し水。
▲梅は香よ櫻は花よ、人は心よふりいらぬ。
▲雨のふりでに名が立ちそめて、雨は止めども名は止ま

ぬ。

▲面白いぞや今咲く花は、後の散りばは知らねども。
▲人の事かと立ちより聞けば、聞けばよしないわしが事。
▲阿波の鳴戸に身は沈むとも、君の事なら背くまい。
▲戀の山吹なさけの菖蒲、秋の枯草しをれ草。
▲様とわしとはうちごみやなぎ、浮けど沈めどもろともに。
▲思うて戀して叶はぬ時は、稻の葉結びして見やれ。
▲こなた思うたら是程痩せた、二重廻りがみへ廻る。
▲一夜落つるはよもやすけれど、身より大事の名がをしい。
▲暇ぢやと言うて挿櫛くれた、心解けとのとき櫛を。
▲飽きも飽かれもせぬ仲なれど、暇やります親故に。
▲鐘が鳴るかや撞木が鳴るか、鐘と撞木のあひが鳴る。

凡二十六首

君を敬ひ豐年を祝し、神に祈りて安穩を願ひ、貧しきうちに樂みあはれに聞ゆる、古歌に、樂みははまのひさごの夕涼みをつとはてゝら妻はふたのして、御製のよし。男女ともに心和かにて詞美しくあれども、國の癖として、ことをはかる心多しといふ、大和河内の境に二上山といふあり、麓に雲母多くあり雲母は水氣にて、此の山に霧立ちのぼりて雲合へば雨降る故に、二上山に雲集れば雨ふると、所の者言ふは、陰陽相和し同氣求むる故なり、雲母と書くは此の故なり、相感ずる事は前に出づる。

和泉

▲千歳に餘るしるしとて、君が世を經るはるの松が枝。
▲こなた百までわしや九十九まで、髪に白髪の生ゆるまで。
▲ひよ〳〵と鳴くは鵯、鳴かぬは池の、共に鴛鴦連れて行く。
▲七つさがりて田の草とれば、のばの露かや涙かや。
▲聲はすれども姿は見えぬ、君はみやまの螽蟖。
▲様はけなりや細糸つむぐ、わしは山家のふしつむぐ。
▲人は惡ないわが身が惡い、破れ車でわがわるい。
▲朝は朝ほし夜はまた夜ほし、晝は野ばたの水を汲む。
▲風がもの言や言傳しよもの、風は諸國を吹きまはる。
▲夫耕へす娘は稼ぐ、妻は背戸へ出て来かしぐ。
▲嫁をかはいがれ嫁こそかゝれ、娘他國の人の嫁。
▲紅葉ふむ鹿憎いと言へど、戀の文かく筆となる。
▲尋ねてござれ戀しくば、わしは信田の森に住む。
▲月夜うたてや闇ならよかろ、待たぬ夜に來て門に立つ。
▲様に貰うた根付の鏡、見れば戀增す思ひ增す。
▲後世を願やれぢ様やば様、年寄こいとの鳥がなく。
▲落ちよ〳〵と落そとしやる、猿の木登り落ちやせまい。
▲お前追從か人事言ふか、お茶をあらしに又來たか。
▲松が殿御で子を産めばこそ、山に小松が絕えませぬ。
▲嫁を〳〵とえと誂りやんな、誂る我が子も人の嫁。
▲昔思へば恨めしござる、なぜに昔は今ないぞ。

凡二十一首

長き世の松を慕ひ豐年を喜び、友白髪の有様、池の鴛鴦の睦じきを眺め、嬉しき世にあふ事は、淀の流れの車絕えせぬ古事思ひ出られてをかし、民の風うはべ美しくおとなしと雖も、實義薄き所といふ、此の國堺の寺に白犬あり。勤行の時、堂の椽に來り平伏する事年あり、餅を咽につめて死す。和尚憐みて弔ひぬ。或夜僧の夢に、彼の犬來りて念佛の功力により、門番人の妻に宿ると見しが、男子を生めり、出家させ異名を白犬と呼ぶ、やすからず思ひて和尚に問ふ、餅を嫌ふ故にと言へば、然らば食すべしと言ひて、用ある體にて座を去り、行方しらずとなり、佛說に過去現在の事をいふ、天地の間一元氣にして五行集りて物を生ず、死しては散じ、散じては集る、前生は人或は犬猿のれいとかたよりありて、生をかへんや、かくあれば、天地生々してやまざる事は如何ならん。

攝津

▲今年世がよて穗に穗がさいて、殿も百姓も嬉しかろ。
▲親はこの世の油の光、親がござらにや光ない。
▲人はけなりや親さま二人、わしは入日の親一人。
▲親といふ字を繪にかいてなりと、肌の守りと拜みたや。
▲歌の返しは二度こそ返せ、三度返すはいなものよ。

▲山を通れば茨がとめる、茨放しやれ日が暮れる。
▲いとしかはい子に旅させ親よ、憂いもつらいも旅で知る。
▲心短氣でわしや國を出て、今は習はぬ職をする。
▲半季女子に心を置きやれ、どこの何處で語ろやら。
▲腹の立つとき裏に川欲しや、水に心をすゝぎたや。
▲鳥も通はぬみ山の奥に、住めば都ぢやのよ殿よ。
▲野でも山でもお主様よかれ、お主のお蔭で世に出づる。
▲物を言やるな言やくづになる、言はで包めばくづも無い。
▲人を使はゞ川の瀬を見やれ、淺い瀬にこそ藻がとまる。
▲おれを言ふとて隣をおしやる、濱の松風うらを聞け。
▲夢になりとも會はせてたもれ、夢に浮名は立ちやせまい。
▲様が悪いかわが惡かろか、妬む心は菅の根か。
▲思うてござるか思はで來るか、おれが心をひいて見るか。
▲お臺所の櫺子の窓に、月と書いたはまことかや。
▲胸で苦しき火はたくけれど、煙り立たねば人知らぬ。
▲雨の降りでに名が立ちそめて、雨は止めども名は止まぬ。
▲浮名立たしてなぜ君は添はぬ、人がさますかわがいやか。

凡二十二首

千世を祝ひ孝悌の道ありて言ひ出すこと、義に叶うて情ありといへども、國富み華美を好む故にや、心ざま人を怨み身をかこつ事も、勢強くおとなしからざる姿あれども、よきにすゝめなしたらば義ある國と言ふべし、此の國東成郡林寺村といふ所に、鳥虫の類、石の上にとまれば、いたゞき二つに割れて口を開き、落し入れて又もとの如し、蛙の物を呑むに似たり、よつて蛙石といふなり、又河條國金遊山の廟に龜石あり、人食に盡きぬれば、此の石に向ひ禮をなせば、飲食悉く出すと、三才圖繪に出たり、蛙石は物を呑む、龜石は穀を吐く、一氣なるによりさもありなん、いぶかしとて、或人林寺村へ行き尋ねしに、人家の藪中に蛙石あり、古は口をあけしよし今は其の事なしといへり。

伊賀

▲千代も長かれこの君の、老木の松は榮えゆく。
▲他國隔てゝ海山越えて、見ずと心は替るまい。
▲松になりたや有馬の松に、藤にまかれて寢とござる。
▲咲いた櫻になぜ駒繋ぐ、駒が勇めば花が散る。
▲幼馴染に離れた折は、沖の艪櫂が折れたよな。
▲寢たらよござる青田の中で、寢たら花咲く實ものりて。
▲燕も軒の住家に歸る、君は何故歸らぬぞ。
▲見れども見えぬ沖の船、こち吹く空を聞に待つ。
▲小石小川に子が捨てゝある、拾うて育てゝ花が咲く。

凡九首

伊勢

▲掛けてよいのは衣桁に小袖、掛けてたもるな薄情、ヤアレヤレ〳〵。
▲勤めすりやとてわごれのやうな、やほの酌すりや足もする。
▲鳥羽で咲く花、ヤアレ、女郎は大坂の新町に、ヤアレヤレ〳〵、酒は酒屋に茶は茶屋に、ヤアレヤレ〳〵。
▲心中しましよか髪切りましよか、ヤアレ、髪は生えもの身は大事、ヤアレヤレ〳〵。
▲駒のやせたに高荷をつけて、是でおりよかよ鈴鹿の山を、しかも月夜か闇の夜に。

凡五首

志摩

▲今朝のうの字は嬉しのうの字、消ゆるまもなきうの鏡。
▲思ひ切らしやれもう泣かしやんな、様の繼路は薄ござる。
▲曇らば曇れ箱根山、晴れたとてお江戸が見ゆるでもなし。
▲勤めしようとも子守はいやよ、お主にや叱られ子にやせがまれて、あひに無き名を立てらるゝ。
▲顔を汚すは白粉か、生れながらの山櫻。

凡五首

志摩の國、古は伊勢と同國なり、伊賀の國風伊勢と同じ、婦人のかたち山城と伊勢を第一とするなり、伊勢の窪田と椋本の間に錢懸松といふあり、參宮する人此の野の長きに飽きて、行程何程あると問ふ、里人戲れて豐國野へは十日に餘ると言ふに呆れて、壹貫文の錢を松が枝にかけて、太神宮を拜し、國へ歸る、他の人彼の錢を見るに、蛇のわだかまるやうに思ひ、神靈ありと恐れて取る人なしといふ、此の類、漢の世に廉浦といふ所を過ぎし人の、何となくわらぐつを枝にかけて過ぐる、あとより來る人又始め過ぎし人の如く掛く、後には幾百といふ事を知らず、何者の戲れにや、草鞋大王と名を題して、後には終に御社を立てしと也、これらの類、淫祀と言うて、蛇狐狸のたぐひを祭ること和漢とも多くあるなり、父母の氣は卽ち天地の氣にして、人體をうけ得て、何ぞ故なき淫祀を敬ふ事やある、國々往來の樹にわらぐつをかけ、道祖神と言うて旅行無難を祈る

▲萱も刈りたし麥刈かりとりて、羽織仕立てゝ親も子も。

尾　張

▲女子好きなら八丈へ行きやれ、八丈昔は女護の島。
▲瓢くづやに蚊遣をたきて、綾や錦と夕涼み。
▲山椒胡椒より辛いもの世帶、ならぬ世帶は尙辛い。
▲心きよきぞ水鏡見やれ、濁る心は無きものよ。
▲江戸に唉く花駿河でつほむ、殊にお江戸は花盛り。

凡六首

國風實義あり、さわやかにしてよき風なり、此の國中島郡國府の宮に每年直會祭といふあり、往來の人を一人捕へる故に、其の日は外へ出ずといへども、自然ととられる者あり、人形を作りて其の人の代りとして俎の上に据ゑて、傍に人を置き、翌朝神前より追ひ放し、倒れたる處に餅を納めて塚を築き、其の人は我が家にかへす、之を考ふるに、昔大蛇ありて人を呑む、生贄を納むれば外に禍をなさずといふ事ありて、淫祀を祭る過より起りて、後世その眞似をすると思へり、近年は國君の命ありて、此の祭を止め給ふのよし、大智の君と言ふべし。

三　河

▲樣の心は何故薄くなる、爰は八橋杜若。
▲飽かぬ故里ふり捨てゝ、誰が爲かや君故に。
▲柳の糸にとめられて、かへるもならず子が繫ぐ。

凡三首

遠　江

▲明くれば出でて暮るゝまで、身は粉になるか裸麥。
▲遠州濱松ひろいやうでせまい、横に車が二挺たゝぬ。
▲君はこがらす我はまた、尾羽をからすの羽擊。

凡三首

三河遠江とも虛談少く、女もけなげに恥を知る風と言ふ、大井川による堤の陰に忍びて見れば、鳶の如きもの來り魚をとる、人音すれば去る、俗に木の葉天狗と言ふ、考ふるに夜鷹なるべし、夜川面に出て蝙蝠虫魚などをとる、すべての事、我が心旣に惑ひぬれば神も亦暗し、神暗きが故に物に惑ふ事あり、たとへば目を患へる者の空中の花を見るが如し、これを玄花黑花といふ、孔子曰く、人の信ずる所のものは目なり、眼もまた信ずるに足らざる事あるかと宣ひしは、かゝる事にて見誤つ事多くありと、鬼神論に出たり、又晉の禿廣といふもの、常に親しく來る人ありしが、久しく怠りて來らざりしを不審に思ひ問ひければ、以前座敷にて酒を飮みたるに、盃の中に蛇の形あらはれる、高位の賜はる物なれば、飮みつくす、是より病に犯さるゝ故來る事疎くなるといふ、壁の上に蛇を畫きたる弓をかけ置きたり、この故の事にてありなんと思ひ、又座敷にて酒を勸め盃に物ありやと問へば、以前の如く蛇ありと言ふにつき、其のいはれを言ふにより、心晴れて病癒えたりと也、心の惑ひより起る事しかり。

駿　河

▲今年世がよて思ふやうに叶ふ、親も喜ぶ身も立ちて。
▲知つてをれども人にまた問うて、母の指圖で迎ひと

れ。

▲樣のやうな〳〵瓢箪男、川へ流して鯰と語りや。

凡　三　首

遠州と同じきうち取締りなき風といふ、此の國富士へ登る事九里、信州淺間の嶽は凡八里あるといふ事いぶかし、いづれか其の山の麓なるや、又は谷峰を越え行くまがりも知れず、諸國土地の高きあり、低きあり、信州は本朝第一の土地高き所なり、富士海へ近き故山の本といふ事大概知らるべし、山の本は海より量れば知らるべし、四海くまなかなる土地に水たまるを海として、異國本朝高下等し、天文書に、雖大山不過六六丈、とあり、（六六は三百六十丈なり）生物草木の數三百六十を限とす、土地は圓體なるにより、東の山へ登り、西の山を見れば西低し、西の山へ登り、東の山を見れば、東の山低し、是土地まどかなる故なり。

甲　斐

▲殿は雨夜の月影なるか、心も知らぬ行末を。

▲高い山から谷底見れば、おまんかはいや布晒す。

▲おれが晒すは布ではないぞ、あだな男の心をさらす。

凡　三　首

伊　豆

▲今度ござらば持て來てたもれ、伊豆のお山の梛の葉を。

▲ゆうべそが〳〵降つたる雨は、虎が涙か風強し。

▲實に添ふなら生爪はなそ、おれは五つの指を切ろ。

凡　三　首

相　摸

▲大工どのより木挽は憎や、同じ仲をばひき分ける。

▲來るか〳〵と川下見れば、いぶき蓬の影ばかり、

▲つまは萱刈り鎌倉山へ、我は子供に根芹つむ。

凡　三　首

武　藏

▲都まさりの淺草上野、花の春風音冴える。

▲妛は何處ぞと船頭衆に問へば、妛は梅若隅田川。

▲色のよいのは出口の柳、殿にしなへてゆら〳〵と。

▲いとし殿御を遠くに置けば、烏鳴くさへ氣にかゝる。

▲若い女子に殿御の無いは、笠に締緒の無い如く。

凡　五　首

甲斐の國、南に富士をおほうて氣籠りするとなり、伊豆の國は氣強くして清き心あり、相摸の國は淫風多き所といふ、武藏の國心廣く奢りの氣ありといふ此の國足立郡大宮の森のうちに黒塚といふありて惡鬼すむ、東光坊といふ山伏、鬼を退散せしむるといふ、古は人の來らざる所に塚穴あれば、盜賊こもりて、人來れは殺し、衣類を剝ぎとる類を鬼といふ、然らざれば山川木石水土の怪に過ぐべからず、山深く水暗く、草木おひ繁る所は日月の光及ばざれば、陰陽の氣自ら鬱して百怪を生ずる事は、所謂蒸して茸を生ずるが如し、これらの類に苦めらるゝ事は避くる事を知らず、みづから恐れる所なり、晉の溫嶠といふ人、牛渚といふ淵に舟をとどめて、此所に水深く集る所と聞きて火を燃やして照らすに、樣々の怪しきもの、水に浮み出て逃げ去りぬ、深山大澤はかれがいるべき所なるを、人行きて之を鎭めんになどか崇をなさゞらんと、張南軒といふもの言ひけん、道理にこそ覺ゆれと、鬼神論に出たり。

安　房

▲碎けても身は構はぬぞ、退くならば、なぜに我をば落したぞ。

▲山な白雪朝日に融ける、融けて流れて三島へ落ちて、三島女郎衆の化粧水。

▲そなた命を捨てんと言うて、今は二道山越に。

凡　三　首

上　總

▲臼よ廻れよ廻れよ臼よ、晩の夜びきに廻りあふ。

▲岩に堰かれて腹たつ波も、心直なら波越さん。

▲つまは北國まだ歸らぬか、文をやりたし歸る雁。

▲思ふ心のまゝならば、妬む心は何故やまぬ。

▲昔見し夢ふり捨てゝ、今は昔の夢戀し。

凡　五　首

下　總

▲曇らば曇れ箱根山、晴れたとてお江戸が見ゆるでもな

し。

▲土橋板ならよかろもの、どんと踏んでは目を覺ます。

▲小夜の中山これではないか、様についてやろ撞鐘を。

凡　三　首

常　陸

▲水戸で名所はせんばの川よ、はすのめごめに鴨がすむ、サツサオセ〳〵。

▲潮來出島のよれ眞菰、殿に刈らせて我さゝぐ、サツサオセ〳〵。

▲潮來出てから牛堀までは、雨も降らぬに袖しほる、サツサオセ〳〵。

▲岩井町とは誰が名付けしぞ、金がなければつらい町、サツサオセ〳〵。

凡　四　首

安房の國は心鋭なり、上總の國安房と同じ、下總の國は上總と同じ、山沼流水多き所なり、常陸の國風氣よろしからず、病をもつて死せざるを譽とする風なり、此の國息栖明神のいそ海に、女瓶男瓶といふ二つの石あり、中は素水にて潮の味ひなし、忍鹽井の水と言ふよし、素水なる事は輕くして潮は重し、海中きり上るが如く、彼の石の中の水は砂ごしをするが如し、然れども山上に水あり、海なき國の山に潮の出る所あり、石中に潮湧く所あり、これらは山澤氣を通ずる故に、一氣そのまゝ通ずなり。

近　江

▲年立ち返る御代の春、松の綠の千代を待つ。

▲伊勢の山田のいまきり竹は、お杉お玉の編木竹。

▲堅田船頭を夫には厭よ、月に二十日は沖に住む。

▲何も職ぢやが鞍馬の職は、馬に七束我が身に二束、馬の手綱を手にひきまとひ、花の都へ柴賣りに。

▲わしが殿御は明日から江戸へ、足も輕かれ天氣もよかれ、留り〳〵に女郎無かれ。

▲大田原見たか江戸見たか、大田原町はまだ知らぬ、お江戸に弓が千挺立つ、弦引く殿は我が夫か。

凡　六　首

美　濃

▲松になりたや有馬の松に、藤にまかれて寢とござる。

▲淺香山かや山の井の、人の心の底見ゆる。

▲底の見ゆるは誰が知る、深い中とはみとせまで。

▲海が無いとや此の國に、舟も帆もある高瀨舟。

▲高瀨舟には柴を積む、我は浮名の種をつむ。

凡　五　首

近江の國風、詞和らかにして善を選ぶ心あり、美濃の國心和らかにしてよき風なり、此の國月吉村といふ所に、長さ一二寸ばかりある、薄白き寶貝の如き月糞といふ石あり、同所村田の邊に星糞といふものあり、上天の星は末代變らず、流星は地中より出づる陽氣にて空へ上り、冷際といふ大寒の所あるに當り、擦れて光を發し、落つるものを流星と名づけ言ふなり、土中の陽なる故、土氣を含み上る、大なる流星は地まで火光届く、燈火の心あるが如く、陽は發し、土氣は凝まりて、黒き燒石の如きもの地へ落つる、これを星糞と言ふなれば、岩村に限りてあるとはいぶかし。

飛　驒

▲佐渡と越後は筋向ひ、橋を架きよやれ船橋を。

▲橋の下には鵜の鳥が鳴くぞや、何と鳴く、エ、ぶりしやりと。

▲おまんの部屋で鳥蟬が鳴くいナウ、何と鳴く、ヤア、夫こい〳〵と三聲鳴く。

凡　三　首

信　濃

▲嬉し目出たの若殿様よ、知行まします程なしに。

▲逢ひた見たさは飛びたつ如く、籠の鳥かや恨めしや。

▲籠の鳥ではわしやござらねど、親が出さねば籠の鳥。

凡　三　首

飛驒の國の人の心狹し、他に洩るゝ氣なき故なり、信濃の國心健やかなる風なり、此の國或寺に猫あり、世に言ふ猫またなり、商人來りて所望し歸り、我が家に惡鼠ありて、猫を食ひ殺す事度々の事なり、彼の猫を合せければ、鼠を食ふ、鼠又猫を食ひて二つの獸死しけるとなり、昔夫子陳蔡の間に苦しませ給

ひし時、夜に入りて身の丈九尺ばかりの男、黒き衣に冠著たるが、つつと入り來りて、聲を上ぐる事夥し、子貢進みより、こは何者ぞと言ふ所を、宙にひつさげ腰に挾む、子路續いて大庭に引出して鬪ふに勝たんこと叶ふべからず、夫子さし覗き見給ふ所に彼の男がつらがまちの間、時々ひらきあふ所ありと見えしかば、そのつらがまちかい探り取て引寄せ、飛び上つて上になれと教へ給ひければ、子路心得て組んで押し伏せ、之を見るに大なる鯰の九尺餘りなるにぞありける、夫子見給ひて、物老いぬれば群の精これによる、龜蛇魚鼈草木の類に至るまで、久しきものは神皆よりて妖怪をなす、されば是を五酉といふ。（酉といふは老ゆるなり、）殺す時はやむと語り給ひけり。（搜神記衝波傳等に見ゆる、）彼の魚をしたゝめて人々にすゝめし程に、飢ゑを救ふ、天より賜ふにやと後世の人は言ひけり、凡五行の氣をうけし類、老いては皆怪をなすべきものなり、人の老いたるも怪をなすものにや、大原の王仁祐が祖母二百餘歲ばかりにて、形小くなり三尺に

足らず、妖をなしたるの類、鬼神論に出たり、鼠老いたるにより猫を食むの妖をなしたるにや。

上野

▲わしは此の町の軒端の雀、聲で聞き知れ名を呼ぶな。
▲殿御忍ぶはしん氣でならぬ、くゞり九つ古川七つ、十二小口の榎戸を開けて、忍びこんだら夜が明けた。
▲戀と情はきりあるものよ、したでおくるは三重の帶。

凡三首

下野

▲十七禿の小口に一人寢て、花がかゝると夢に見た。
▲人は兎もあれ角もあれ、わしは牝鹿とかた並びよ。
▲白鷺や、舟の舳に巢をかけて、波にゆられてしやんと立つ。

凡三首

上野の國は物に臆する事なき風也、軒端の雀と言ひしにより、かくとだにえやは伊吹のさしも草と詠みし、實方朝臣は行成と同じ時の殿上人にて、口論をし、行成の冠を笏にて落されしを、さらぬ體にて冠を著、色をそこなはずして、是はいかなる故に亂冠にあひ候ふやらんと申されければ、實方いへらんかたなく、しらけて立たれけり、主上此の事をひそかに御覽ぜられて、實方を陸奥の守になして遣され、終に召し還されずして國に卒す、歸洛せん事を願ひて、今一たび臺盤の飯を食はゞやと言はれけり、其の後實方雀とて、殿上の臺盤の邊りに必ず雀ありけりと言ひ傳へたりと、百人首の抄にあり、其の後歌の會席にてこけたる殿人ありしを若き人笑ひしに、年老いてこけるを笑ふ人々の、命ながかれ思ひしらせんと讀みし人もあるに、歌道を嗜み學問する人の謹み第一なるべし、下野陸奥は詞訛多しといふ、訛るといふ事、五音四聲の分ちを知る時は無き筈なるを、四聲の考なくして、妄に詞を使ふ故なり、此の國に限らず、諸國とも四聲の分ちを言へば、雲はくも、蜘蛛はくも、戀はこい、鯉はこい、海人はあま尼はあま、此の平上去入の事を心得る時は、皆分つ事なれば、みづから知るべき事なり、五畿内の人音の事を學ぶにあらず、都に近き故、よき音を自然と小兒より聞き覺ゆる故なり。

陸奥

▲橋の擬寶珠を五兵衛かと思うて、既に詞を掛きようとしたが、山椒食て見て胡椒食て見れば、從兄弟同志やら、似てからい、さんしよのせい。
▲秋風が吹けばいの、秋風が吹けばッ豆の葉も枯れるいの、豆の葉も枯れるッ枯れたが大事か、何としよ、さんしよのせい。
▲あのむら千鳥つら憎やッ我を連れては何故行かぬ、連れて行たら殿御に會うてッわしが心の底うちたゝき、見捨てられたら島國へ、さんしよのせい。

凡三首

出羽

▲橋の欄干に腰をかけ、沖を遙かに眺むれば、沖の鷗か三つ連れて、又三つつれて睦まじく、よられながらも君戀し、さんしよのせい。
▲明くれば出でて暮るゝまで、辛苦するのは誰が爲なる

や、末を遂けんと思ひ詰め、身は粉になると構はぬにつれない言葉如何せん、さんしよのせい。

凡　二　首

陸奥出羽の風俗、民家に子をぶつかへすといふて、三歳の比、父母これを縊り殺す、人これを怪まず、夷狄の如くありしに、仁風及び、今其の事無しといふ、陸奥の國、或村に古塚のありしを、其の里の者畑地にせんとて曝きしに、大きなる郭を掘り出し、明けて見れば、錦の直垂に鎧甲に太刀を佩き、その様七十歳ばかりなる老人と相見え、生けるが如し、所の役所へ訴へ見分をうけ、吟味の處姓名かつて無し、定めて秀衡にてもありなんとて、今その所に社を建て祭りありしとなり、納めやうにより、數百年を經ても損ぜざる納めかた有る事は、古書に委し。

上　巻　終

山家鳥蟲歌卷之下

若　狭

▲松より巣だつ鶴の子の、千歳は君と親の蔭。
▲走る舟をも招けば磯へ、寄るは心の誠なり。
▲よそに思ひし昨日の菖蒲、今日は我家の妻となる。
▲昔竹馬老いては禾の、杖となりたるおやぢ様。

凡　四　首

越　前

▲山陰や、いがらし川の流れには、み山の奥のきよの水。
▲月の夜にさへおくりを貰うて、見捨てられたよ闇の夜に。
▲思うて來たのに水かけられて、わしが思ひを水にしやる。
▲相性見よより甲斐性見やれ、小鬢無でうより概無でうよ。
▲しん氣〳〵が三つ四つござる、語るしん氣に語らぬしん氣、一つ枕に寢ないしん氣。

凡　五　首

加　賀

▲治まる世の嬉しさは、稻穗榮える秋の水。
▲里のあたたまりでむしやれて暮しや、我等はみ山の蟬の聲。
▲今日か明日かと朝日を待つに、つひに曇りて日をくらす。
▲様は流れの瓢簞男、ぬらりくらりはようもよも。
▲みやま六月布子を著るは、金が無いから冷ゆるやら。

凡　五　首

能　登

▲親子草とは年ごとに、古葉ゆづりの若葉かや。
▲雉子野に住む雲雀は山に、鶉粟穗につま思ひ。
▲飲みやれ歌やれ先の世は闇よ、今は半の花盛り。
▲沖の戸中の三本竹は、不産竹やら子がさかぬ。

凡　四　首

越　中

▲よろづ世をへる音無の、瀧の流れはよも盡きじ。
▲鮎は瀬につく鳥は木にとまる、人は情の下に住む。
▲死んで又來る釋迦の身が欲しや、見しよもの面當に。
▲買うて呉りやれよ粘るのを一兩、胡麻の油で毛がふさん。

凡　四　首

越　後

▲老いせぬ千代の松坂や、谷間の岩に鼈遊ぶ。
▲わしが思ふとて戸板に豆ぢや、なまじ言はぬがましぢやもの。
▲千里走るやうな虎の子が欲しや、やるぞ此の文江戸までも。
▲いとし殿御のしんがい田が割れた、夕立俄に來めいこと。
▲月夜烏は迷うても鳴くが、わしが眞實思ふでもなし。

凡　五　首

佐　渡

▲佐渡と越後は筋向ひ、橋を架けたや船橋を。
▲様は釣竿わしや池の鮒、釣られながらも面白い。